

採 蓮

Siren

第三号

No.22

目次

Contents

採蓮のいわれ 4

The Implication of "Siren" 5

図版 石井林響《唐獅子牡丹図屏風》 7

資料紹介 石井林響をめぐる書簡など (翻刻と解題) 松尾知子 9

[図版解説] 石井林響《唐獅子牡丹図屏風》

[Introducing material] Letters Relating to Ishii Rinkyū (Transcription and Commentary) 48

[Illustration] Ishii Rinkyū "Lion Dance and Peony Folding Screen" Matsuo Tomoko

平成三〇(二〇一八)年度 千葉市美術館の活動 49

平成三〇年度 市民ギャラリー・いなげ 企画展および施設の利用者 77

Me [me] × Futoshi Hoshino Crosstalk "Where does the Flow Line go?" Speaker: Haruka Kojin / Kenji Minamiyama / Futoshi Hoshino 22

目 [me] × 星野太 クロストーク「導線の行方」 荒神明香 / 南川憲二 / 星野太 1

採蓮のいわれ

蓮は古来の画題でありそれを描いた名画が多い。その花は清浄無垢、また枯れては寂寥の情をもたらす。

千葉は古代蓮の種が発掘され現代に命を復活した町であり、奇しくも千葉市美術館は古には蓮池（はずいけ）と呼ばれ蓮の漂う池を埋立てたといういわれの繁華街に位置する。音通する *蓮池* は美声をして船乗りを誘惑し難破させるギリシャ神話の海の精である。蓮を採るが如く古今の美を紡ぎ、妖精の如く人を魅惑する芸術に就いて論ずべく本誌の題を定めた。

千葉市美術館

The Implication of “Siren”

The lotus has been the theme of painting, and there many master works which delineate it. Its flower is pure and innocent, and gives the feeling of loneliness and silence after it is withered. Chiba is where ancient lotus was discovered and its life was reinstated. Coincidentally, the Chiba City Museum of Art is located on a street made by reclaiming the lotus field called Lotus Pond (Hasu-ike) in ancient times. *Siren* has same phonetic expression as Siren in Greek mythology who lured mariners to their destruction. The name of the bulletin was decided with the intention to weave the beauties of both present and ancient times as if harvesting the lotus and to discuss the arts which lure us like a siren.

Chiba City Museum of Art

石井林響《唐獅子牡丹図屏風》部分



資料紹介 石井林響をめぐる書簡など (翻刻と解題)

松尾 知子

石井林響(一八八四〜一九三〇)は、千葉県山辺郡土気本郷町(現千葉市)に生まれ、明治末に若くして画壇に登場、昭和初めにかけて活躍した日本画家である。本稿は、二〇一八年十一月二十三日から二〇一九年一月十四日にかけて開催した展覧会「生誕一三五年 石井林響 千葉に出づる風雲児」の補遺として、展覧会でも一部は紹介した、石井林響から相原寛太郎(一八七五〜一九四五)号沐芳宛の書簡及び相原が関わった画会の資料(新井旅館蔵)と、初紹介の安田鞞彦(一八八四〜一九七八)から石井林響宛書簡(千葉市美術館蔵)を翻刻し、若干の解説を加え、明治末から昭和初めの林響をめぐる動向を紹介しようとするものである。

相原沐芳は明治五年創業の修善寺温泉「養氣館新井」の三代目館主となり多くの文人・画家たちと親交したが、林響とも、結婚の仲人も務めるなど若き日

千葉市美術館所蔵 石井林響関係資料のうち書簡リスト

掲載番号	図版掲載	文中日付	西暦	形状	宛先	差出人名 (内は文中での差出人名)	内容等
①	図①	明治43年4月27日付	1910	巻紙に墨書、封筒	東京府下南品川五五七 茂野様御内 石井天風様	沼津にて 安田鞞彦(新三郎)	切手剥落、消印読めず
②	図②	(年不明)2月19日付	1920?	巻紙に墨書、封筒	東京市外南品川五五七 石井林響様	相州大磯山手 安田鞞彦	
③	図③	大正13年12月9日付	1924	巻紙に墨書、封筒	東京市外南品川五五七 石井林響様	相州大磯山手 安田鞞彦	
④	図④	昭和4年4月30日付 (年不明)12月6日付	1929	便箋に墨書、角封筒	石井林響様 御令正様 (東の石井さん) 二代目伊三郎様	大磯にて 安田鞞彦 石井林響 (西の石井)	「十二月六日 今夕一寸出かけるのに○印無し、銀行は日曜で休みヤハヤ、処で聖徳太子と観音さんの分を頂ければ大助かりです。但しお仕事代を差引いて…、御都合で半分でもよいのです。 東の石井さん、 西の石井」

より縁深く、その生涯にわたって支援を続けた人であった。新井旅館には林響の特に若き日の絵画作品をはじめ、林響からの書簡や関係した画会の案内状などの資料が多数残されている。その書簡は、はじめて当地に滞在した明治末のものから、関東大震災後の連絡、そして林響急逝の知らせに至るまで、通読すれば、林響の生涯を駆け抜けたかのようであり、現在まで大切に伝えられたことも含めてその篤い好誼のさまに胸打たれるものがある。

安田鞞彦の書簡は、石井林響の手元に残されていた四通で、他に数通の書簡とともに石井淳氏より寄贈を受け現在千葉市美術館が所蔵するものである。

「両資料群の全容はおよそ年代順にして表にまとめ、その中から抜粋して掲載する。(一部、新字体に改め、適宜ルビや読点を付した。)

14	図14	明治45年2月28日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風18
15	図16	明治45年4月11日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風19
16	図17	明治45年4月28日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風20
17	図17	明治45年5月3日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風21
18	図17	明治45年7月7日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風22
19	図21	明治45年7月16日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風23
20	図21	明治45年7月25日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風24
21	図22	大正元年8月23日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川 石井天風			石井天風25
22	図22	大正元年9月20日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川 石井天風			石井天風26
23	図22	大正元年11月10日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 相原天城様	石井天風			石井天風27
24	図25	大正元年11月12日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 相原天城様	石井天風			石井天風28
25	図25	大正元年12月6日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風29
26	図25	大正2年3月11日付	1913	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風30
27	天風後素 会の発云	大正2年4月21日付	1913	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風31
28	天風後素 会案内状	大正2年4月11日付	1913	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風32
29	天風後素 会案内状	大正2年4月20日付	1915	印刷物1枚	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風33
30	天風後素 会案内状	大正2年5月15日付	1913	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風34
31	天風後素 会案内状	大正3年1月1日付	1914	年賀はがき(印刷)	伊豆国修善寺 相原天城様	東京南品川五百五十七番地 石井天風		大正三年年賀状	石井天風35
32	天風後素 会案内状	大正4年2月付	1915	印刷物1枚	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風36
33	天風後素 会案内状	大正4年5月10日付	1915	便箋にペン書、封筒	伊豆国修善寺 温泉 新井天城様	東京市京橋区三十軒堀三ノ巻、茂野梅吉方 天風後素会			石井天風37
34	天風後素 会案内状	大正11年6月22日付	1922	官製はがき(印刷)	伊豆国修善寺 温泉 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風38
35	天風後素 会案内状	大正12年5月付	1923	官製はがき(印刷)	伊豆国修善寺 温泉 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風39
36	天風後素 会案内状	大正12年9月7日消印	1923	官製はがき、ペン書	伊豆国修善寺 温泉 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風40
37	天風後素 会案内状	大正12年9月19日付	1923	官製はがき、ペン書	静岡県田方郡修善寺 相原寛太郎様	南品川五五七 石井天風			石井天風41
38	天風後素 会案内状	大正14年3月15日付	1925	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 温泉 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風42
39	天風後素 会案内状	大正14年4月16日付	1925	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風43
40	天風後素 会案内状	大正14年5月11日付	1925	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺 養氣館 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風44
41	天風後素 会案内状	(年不明 大正15年か) 8月4日付	(1926)	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風			石井天風45
42	天風後素 会案内状	昭和5年2月24日付	1930	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 相原寛太郎様	南品川五五七 石井天風			石井天風46
43	天風後素 会案内状	昭和5年2月25日付	1930	印刷、角封筒	伊豆国修善寺 相原寛太郎様	南品川五五七 石井天風			石井天風47
44	天風後素 会案内状	昭和5年4月14日付	1930	巻紙に印刷、封筒	伊豆国修善寺 新井 相原寛太郎様	南品川五五七 石井天風			石井天風48
45	天風後素 会案内状	昭和5年4月14日付	1930	巻紙に印刷、封筒	伊豆国修善寺 新井 相原寛太郎様	南品川五五七 石井天風			石井天風49

安田鞞彦の書簡 石井林響宛
(千葉市美術館蔵／石井林響関係資料・石井淳氏寄贈)

①明治四十三年四月二十七日付

落花の春愁風趣
深く惠風和暢一
年の好期に御坐候、
御葉書有難拜見、又
瘰癧に就き御懇切
なる御注意奉深謝候、
以御庇最早懸念も
不要、不日快癒の筈に
御坐候、當地方御光
臨の事、俄に御差支
を生じ候由、遺憾此事
に候、御好都合に相成候
はゞ是非共御令聞御
全道にて御出馬の程
待入候、東京画會に
巡覧の由、御高話も
承度候、大觀氏の作
名古屋出品のと殆全
工のものらしく近来か、
る裝飾或花鳥を試みら
る、如く
る、ちしく新味大い掬す
へく候、
今回愈々紅兒會御入會の由、慶
賀に不堪、向後全會の

為に御努力玉はり度切
望に不堪所に御坐候、拜
芝の際は萬々御物語致度
候、

前田君も折々見へられ候、
過日も渡辺蜜健次君の令
弟高鳳君の會三寫に有
之、前田君も出席大に
毫を揮はれ候、小生も天
城氏、雪橋氏と共に參觀
大に一昨年の三寫を回
想致候、
前田君も小生の知れる限
にては大に神妙の体に候、
但鬱勃たる英氣抑へ
難き状看取するに難か
らず候、
天城氏は新に可愛しいのを
もらはれ、相原家の家連萬
歳に候、
須田氏、村田氏変りなく村田
氏は一寸上京、昨日歸られ候、
別段格別の珍談も無之
依例如例に御坐候、江戸
表の珍話鶴首待居候、
御母堂御令聞又梅吉氏
にもよろしく御傳声申
下度願上候、忽々不一

四月廿七日 新三郎

天風大兄

榻下

(封筒表)

東京府下南品川五五七

茂野様御内

石井天風様

親展

(封筒裏)

沼津にて

四月廿七日

安田鞞彦

* * *

四月二十七日付、安田鞞彦(鞞彦)の書簡である。
消印から明治四十三年と判明。五ヶ月違いの同い年
であった安田鞞彦と石井林響は、このとき満年齢で
鞞彦二十六歳、林響二十五歳である。鞞彦は明治四
十二年晩秋、修善寺から沼津に移住していた。一
方、林響は四十二年に三河島の画房が焼失し、南品
川の茂野梅吉方に転居していた。

この書簡は、沼津で静養中の安田鞞彦が、瘰癧ろうそ
(指先のうむ病氣)にかかり、心配する林響の葉書に
対して返信したもの。林響は沼津を訪ねる予定でも
あったが、急に都合が悪くなったことが伝えられて
いたようだ。当地に来られる際は是非ご令聞と共に

石井林響様

(封筒裏)

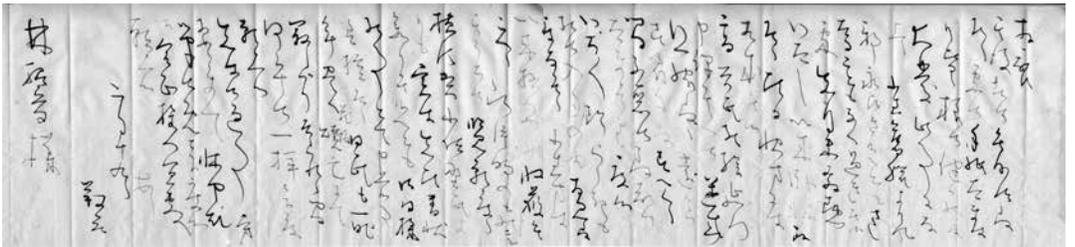
相州大磯山手 安田鞆彦

二月十九日

* * *

年紀がないが、「林響様」とあり、石井林響が改号した大正八年(一九一九)以降の書簡である。鞆彦は大正三年に大磯山手御嶽神社前に転居していたが、関東大震災で住居全壊してしまう。また、大正九年一月から二月にかけて肺炎で臥床しているので、「先月末發熱いたし以来臥牀致」とある本書簡は、その年のものか。林響の手紙に対する返信である。鞆彦の筆跡は、①からかなり変化をみせ、仮名文字が多く、良寛風の書風となっている。「高谷氏」より依頼の絵の制作が遅れていることを詫びている。林響の紹介でもあったものか、近いうちに着手すると述べている。

本書簡で注目したいのは、「いろく珍らしきもの御入手の由」とあることで、この頃林響は、古書画を色々と購入していたらしい。鞆彦も、收穫は「断片的のもの二三」といいながら、同じく何かよきものを求めて、互いに意識しあう仲であることがうかがえる。「横須賀小佐野氏」も同好の士らしく、一昨年火災で蔵幅を失って寂しがつているので、見せてやって欲しいとも言っている。



図②

③大正十三年十二月九日付

拜啓

其後は御無沙汰にうち過ぎ候うち、もはや冬に相成候、皆々様御機嫌よくおはし候や伺上候、

先日は帝展の招待券御惠贈下され難有拝受致候、當時いろく致、その為御

礼延引いたし、帝展も終りて御手紙さし上げ候仕義御ゆるし被下度候、

一寸承れば玉堂名品近日御入手の由其うち拝見をたのしみ居候、

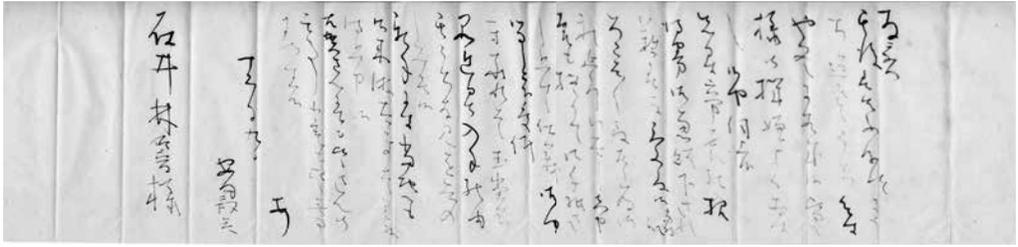
新年には當地へも御来游たまはり度待上申候、

古賀さんにも皆さん御無事、小宅も皆無事に御坐候

頓首

十二月九日

安田鞆彦



図③

石井林響様

(封筒表)

東京市外南品川五五七

石井林響様 御下へ

(封筒裏)

相州大磯山手 安田鞆彦

十二月九日

* * *

林響は鞆彦に帝展の招待券を贈つたらしい。しかしいろいろごたごたしているうちに、終了してしまつてからの御礼になつてしまつたことをわびている。林響は大正十一年の帝展で《林の中》を出品し、推薦となつていた。大正十二年九月の関東大震災を経て、この大正十三年の四月には林響は帝展の展覧会委員となつた。ただし、自身はこの年の帝展には「都合により出品を見合わせた」と報じられており(読売新聞十月七日)、出品していない。

本状で注目されるのは、林響が浦上玉堂の名品を近日入手するということを鞆彦が耳にしており、そのうち拝見できることを楽しみにしているという文面である。林響の古書画の所蔵とその見識が知られており、玉堂についても既知のこととのニュアンスが感じられる。

林響は、大正十五年六月の『アトリエ』二一六

「名作短解」において、玉堂画の愛蔵について「時々取り出して鑑賞する事によつて私はどんなに励まされ、力づけられて居るか知れない」と解説している。大正半ば頃には、玉堂に注目する人として、一目置かれる存在であつたと思われる。

林響がかの石濤の《黄山八勝画冊》(泉屋博古館蔵、重要文化財)を苦心して入手したのは大正十四年三月。このとき歳幅の売却などとして資金を作つたようだ。年代不明十一月一日付の書簡(生誕135年石井林響展「出品番号103」)にて所蔵の玉堂画を三点売ろうとしたのが、この頃の事とも想定される。一方で、石濤画冊入手の前年末の本書簡で近日入手とされている玉堂名品とはいかなる作品であつたのだろうか。

④ 昭和四年四月三十日付

拝啓

其後御主人様御経

過如何におはしまし

候や、御案申上候、

先般新聞にて承

知いたし恐愕致候、

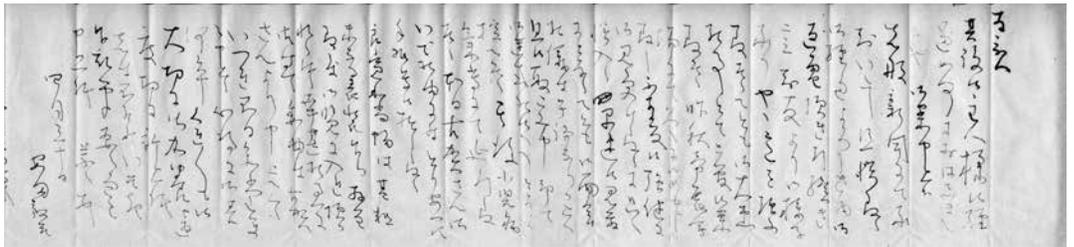
御経過よろしき由、御

返電頂き引續き

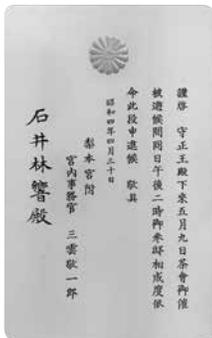
二三知友より御様子

承り、やゝ意を強ふ

致居候へとも御大患の事として只管御案致居候、昨秋帝展會場にて久々に御めもじ致し不相交御強健に御見受け致候に只々愕入候、■早速お見舞にと存候へとも御面会の儀は、無論なりかたく且御取こみ中却て御迷惑の御事と存上控へ居候、其後小兒病氣等にて延引致居候、本日古賀さん御いで由に付、とりあへず手紙等御托し致候、良寛和尚幅は甚粗末なる表装乍ら拝呈致度御覽に入れ頂かれ候は、幸甚の至に御坐候、委曲は古賀さんより申上へく候、いつれ不日参堂致可申上候心得に御坐候、何卒くれくも御大切に御加養被遊度切に祈上候、先は不取敢いそき乍乱筆要々而已申上候 早々頓首



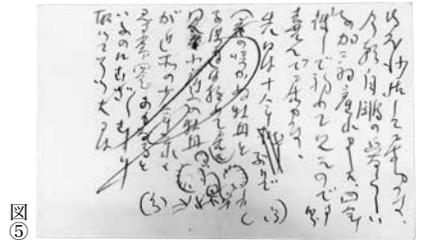
④



⑦



⑥



⑤

四月三十日

安田鞆彦

石井林響様

御令正様

乍末皆々様へよろしく御致聲被下度候

(封筒表)

石井林響様

御令正様

御許

(封筒裏)

大磯にて

安田鞆彦

四月三十日

* * *

林響は、昭和四年三月二十四日、脳出血症で倒れ、一時危篤状態となるが、一命をとりとめ快方に向かっていった。この書状は、新聞でその報に触れ驚愕した鞆彦が、林響の妻に宛てて差し出したものである。無事の旨は返電されており、二、三の知友より様子を聞いていたので意を強くはしていたものの、大病なので案じているという。見舞いにも行けないので、とりあえず古賀さんにこの手紙を托すといい、確かにこの封筒には郵便の痕はない。

昨年(昭和三年)秋に、帝展の会場で久々に二人は会ったという。その帝展には林響は出品しておらず、その前の昭和二年の第八回帝展に《野趣二題》を出品し、話題を集め、帝展委員となっていた。

注目されるのはここでも書画のことで、鞆彦は本書状のほかに、良寛の掛幅を托しようだ。粗末な表装のものだがご覧いただければ幸甚という。前提として二人の間に良寛についてのやりとりがあり、今の状況に何か相応しいような内容のものを進呈しているのだろうか。

林響も良寛の掛幅を持っていた。内弟子となった秋野不矩が、大綱の画房で掛軸を掛け替えたり、書を学ぶように教えられていたことなどを述懐しており、良寛への心酔が伝えられている。

石井林響の書簡 相原寛太郎宛(新井旅館蔵)

1 明治四十一年四月十四日付

拝啓

天候さだまらず鬱

陶敷候折柄、御在京

の閣下には如何御消

光遊ばされつゝ有之候や

御出立後既に一周日

御入京の報を外にして

は、いまだ委敷御消息に接せず、ものたらぬ心ちいたし申候、御療養の御目的は如何遊ばされ候にや、それとも何かと御多忙に涉

らせられ、いまた御診断を受けたまはず候にか、或は面白き事に忙殺さるしてふおそろしき事などもあらんかとしぎりにあてなき

想像にふけり居候、爾来小生も至て健全彩管に親しむと申し度きなれども実は風邪の為の少しく頭痛になやまされ氷囊にてひやし候

始末とて御令室様はじめ皆々様の御厄介を煩し漸く一昨日起床いたし、昨今は兎に角執筆罷在候様相成候間、御過慮には及ばず候へ共、不取敢右様の場合なりし事御通報まで申上候

此間は都は大降雪

にて大さわぎなりしよし
 に候へ共、当地は何
 等の損害もなかりし
 もの、如く、むしろ
 雪中の桜華に古
 来稀なる不思議の
 光景を樂しみ
 申候、閣下亦或は奇
 抜なる雪見の宴など
 はり候へしならんか
 □□子勝仙兄と語
 られ候や、酒中の仙
 客雅風氏と相見られ
 候や、其他紳士高
 士と面白き御談笑
 など候はば、時に御
 もらし賜はり度
 千万希望する処
 に御座候、それから
 上野の美術村も花
 ざかりと察し申候
 処、此中匂はまた
 咲きかはりのものも多か
 らんと存じ候が、御
 狂駕などなされ候
 や、遠く唐宋元
 あたりを思はれ候
 閣下の御高眼には
 如何御覧じ
 られ候や、過日前

橋なる観山宗の
 吾一宮崎先生よ
 り書信あり、修善
 寺趣味の大影響
 同氏蔵幅に及ぼし
 手が出せぬと申来
 り候、いよ／＼神経を
 なやまされつゝある
 ものと存じ候、
 橋本未亡人様には
 不良の天候をなげ
 く外何もかも御氣
 に召し、六暗と嬉
 しがり居候、霞
 花池はそろ／＼とかた
 づくべく見事な
 る老松数かぶ植付
 けられ嬉しく存候、
 毎夜十二時頃までも
 長談論にふけり
 候習慣により病
 後の淋しさ一方な
 らず候まゝ、閣下
 の御帰館の一日も早か
 らんを欲すれども
 御不快の為め御上京
 の事なれば、一日も多
 く充分御撰養
 專一に御座候、まだ／＼
 記し度き心ち候へ共

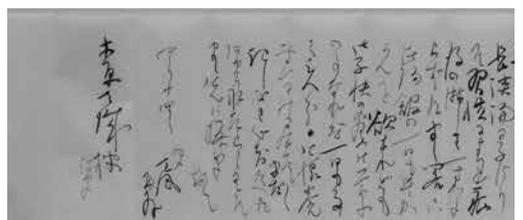
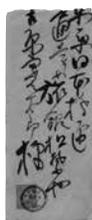
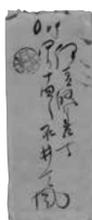
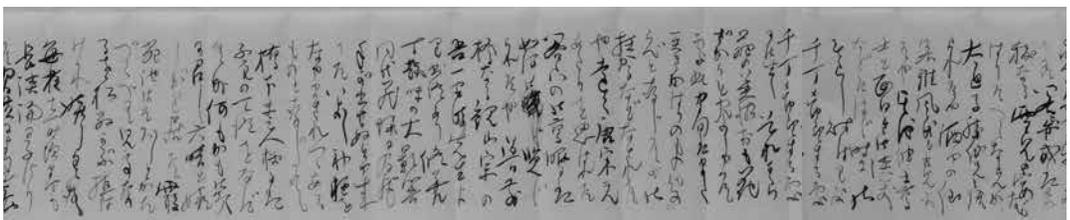
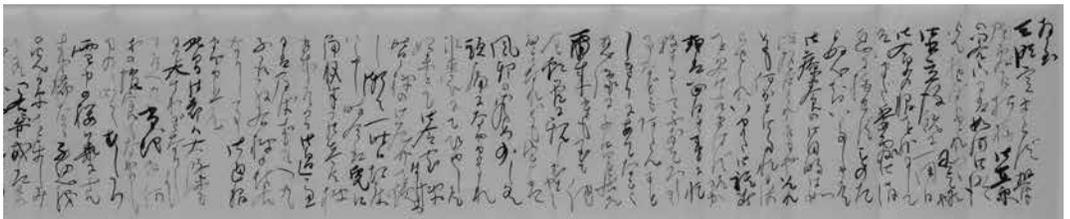


図 1

あまり永たらしく候
まゝ先は擱筆

頓首

四月十四日

弟天風 再拝

相原天城様

侍史

(封筒表)

東京日本橋区

通壺丁め 旅館松葉や

相原寛太郎様

(封筒裏)

伊豆修善寺

四月十四日 石井天風

* * *

新井旅館に残る石井林響からの書簡の中で、最も早い日付のもの。林響は二十三歳。前年末から修善寺に逗留していた林響がこの四月にもまだ同地に居ることがわかる。東京の旅館松葉屋にて静養中の相原寛太郎宛に、長引く療養について心配し、早い帰館を願っている。大雪が降り、桜に雪という不思議の光景を楽しんだことなど、近況を報告している。なお、この年の一月、橋本雅邦が没し、三月、林響は存続となった二葉会の幹事となっているが、未亡人も滞在していることがわかる。

2 明治四十一年四月二十日付

お手紙拝見仕候

随分何やかやと御

多忙とみえ候、御

治療はしっかりと

遊ばされ度候、何

より御好物の芝居

大家の蔵幅 時折

はトッチリシヤンで なかく

に御慰安も多かるべ

くと存候、異画会

は大奮発と聞及ひ

しに矢張り駄物

が多きものとか、さてもく

今日安田兄より奈

良の春事こまかに

報じ来り、浦山敷

てたまらず候 近

頃居は春日野町一、

澤山氏方となん

雅風氏の名作賞

も受けられ 売約

ともなられ まづ一寸

御愛度き方と存候

氏も亦や、消沈の

体とか 迎も画家

なんて奴は世間並の

楽感は一六ヶ敷もの

と存候 何の事は

ない丸で春の蝶だ

僅かの露で活きる

そして華より花

を、露命をつな

ぐといふは是が画家

の多くと存候

小弟事病氣お蔭

を以て平癒 爾来

勇猛精進寢食

を忘れて彩管に親

しみ今や其三昧

にありと申したいが

其れはうそにて

雨天中は気がふさ

ぎ晴るれば引き出

され(これは一二度)夕

方なぞの淋しき

夜は食ふとすぐ褥

にもぐりこむ、あた

ら春の日をかくの如

くに消光罷在候

でも此間御承知

の吹笛美人、蓮池

美姫を初じめ大

原の小物(上)、紅葉

(下)牡丹、立野老人への

漁村の月、椎野氏への

山岳、其他三ノ小

物も作り申候、目下

斎藤氏への大作二
点製作中に御坐候、
権藤將軍よりも
依頼を受け申候、
將軍は先日宇都
宮に帰られ申候、か
くの如くにてとんと
はか行かず候が
よ〜健康旧に□
し候まゝ大に揮
ふつもりに御坐候、御
約束の屏風は是
非とも相談等致
したきものなるが
如何に候や、粹
やら絹やらの都合
もあればいまだ
着手せず候へし、
就ては御帰館
までは
襖やら尺八絹本や
らもあれば是に染
めちらそうと存候、
兎に角 大公の留守
と〇〇の〇〇には
さすがにぼんやり
致し居候 この
身心ともにゆるむ
長閑な春の日とて
随分御由断なく

御棋養專一に
御坐候

早々

四月廿日 天風 再拜

今日は当地のおまつり

相原様 侍史

(封筒裏)

東京日本橋区通二丁目

松葉や様内

相原寛太郎様 親展

(封筒裏)

御帰館は何日頃にや

四月廿日 石井天風

* * *

前便の返事からまたすぐ差し出された書簡。異画
会や、安田鞞彦、橋本雅邦門下の日本画家・吉原雅
風(一八八二〜一九二九)らの動向を気にかけてつ、
彩管に親しみ、あるいはまた気が塞いで寂しがる
といった日々を綴っている。吹笛美人ほか、制作した
画についての報告もある。立野、椎野、斎藤、権藤
の各氏という依頼者の名前も出ている。「権藤將軍」
は、「天風会」の賛助員や「天風後素会」趣意書に
も名を連ねる、陸軍中將の権藤傳次(一八六七〜一
九四六)と思われる。「椎野氏」は横浜の洋装絹織物

の製造販売を行っていた椎野正兵衛商店の二代椎野
正兵衛か。文面から絵の依頼者等について共通の理
解がみられ、相原が随分と世話をしている背景が察
せられる。屏風制作も約束しており、帰館されたら
相談したいとしているなど、絵の内容についても話
し合う間柄であったようだ。相原の留守と何(〇〇
の〇〇)に、ぼんやりしてしまっていたのだろうか。

3 明治四十一年四月二十六日付

相原先生

虎皮下

いよ〜大手術いたされ
候よし、さぞおいたかつた
事と存じ候、これも片
方丈けと聞き及び候
にや 齒の方は一切相
済み候へしか、過日
は勝仙、青邨の両兄
相見え候よし、嘸かし
面白き事も有しな
らんと奉察候、でも
両兄の事なれば至
而おとなしく画論な
どあたりをおどかす
おそれもなかりし事
と存じ候、もし是が
雅風兄とか更に小弟とか

にてあらんには、諸人の
難渋思遣られ候、

こなたにては毎日故師の
未亡人初め皆健在に

御座候へは御安神願上候、
同人等は月末帰京の□

に御座候、小生も亦御伴い
たし度候が既に力無

之候、齋藤氏の大福
二点、今日豊国銀行

に宛て、発送仕候、実
は御校閲の上にてと思

ひしが一刻も早きがよ
からんと存じ、直接に

差向け申候、小弟近頃
入念のものにて候へし

但し可否は別に御座候、
其他こゝまでおしつけられ

た二三の寄附畫も皆夫
れく染筆仕候、明日

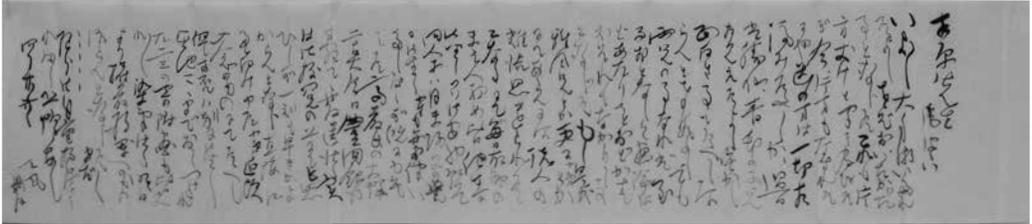
より権藤將軍へのもの
作らんと存じ候

……まだく
随分御自重遊ばさ

れ度候 恐惶頓首
四月廿六日 天風 再拜

(封筒表)

東京日本橋区



通壺丁め 松葉や
相原寛太郎殿

御直披

(封筒裏)

伊豆修善寺

石井天風

四月廿六日

* * *

療養中で手術を終えたという相原寛太郎へ宛て
た、さらなる続報である。勝仙(広瀬長江・一八八
四〜一九一七)、前田青邨が来られたとの由、吉原
雅風や自分もいたらおとなしくしていなかっただろ
うと面白く記す。橋本雅邦未亡人らは月末に帰京と
のこと。齋藤氏への大福二点を豊国銀行に宛て発送
したことも報告。その絵は一刻も早い方がよいと思
い事前に見せられなかったが、「近頃入念のもの」
と自信をのぞかせている。

4 明治四十三年四月二十五日消印

(絵葉書 表面)

伊豆國修善寺温泉

新井天城様

いよいよ久々にて明日は故郷

に帰るのを楽しみして
先何よりの語り舛に

各展覽会(東京府)
研精(南宗、大東等)
を今早朝より

参観夜に入りて帰
宅すれば思止まら

ねばならぬ事あり
其意を得ず、又

他日を期する事
不得止ものに御座候

残念此事に御座候
つまらぬものも出来

候ま、御笑艸に差
上仕度候 其内に

天風拜

(絵葉書 絵のある面)

此写真では
際立つた長

所と短所とが
判らぬ背

影が極めて
ツマラヌ 否イ

やなものな
れど人物

の態度と色
と泉とがい

つもならず
嬉しく見申候

此繪の右は
之までに御
座候 切りし
にあらず

* * *

高橋廣湖筆「みやびを」の絵葉書(東京美術及美術工芸展覧会発行、画報社製)に書かれたもの。高橋廣湖(二八七五〜一九二二)は、安雅堂画塾で今村紫紅と同期で、巽画会でも紫紅とともに評議員となつていた日本画家。明治四〇年、林響も創立に参加した国画玉成会の発起人の一人であつたが急逝する。二葉会や紅児会など共通の場で活躍していた先輩の絵に注目し、対する林響のコメントが、相原に

宛てて率直に綴られ面白い。久々に「故郷に帰るのを楽しみ」にしていたという故郷思いの念も記されている。

5 明治四十四年三月二十七日付

いよゝ温かに相成候所

御あたり如何に候や

過日御滞京中は

例の閑話の機もなく

何となし物足らぬ

事に候へし、さて

只今は御名産

の椎だけ沢山御

惠贈に相成られ

一方ならず嬉しく

拝受いたし申候

今月中に老母も

帰宅可仕候間、何よ

りの馳走に楽しみ

申候

此程紅児会中

安田兄に毎日面語

ことの外健康のよう

に見受けられ慶賀

此事に存候、前田

兄は画会の成功にて

大元氣、廣

瀬兄は不相交お

となしく、小林兄は

時々沈黙を破りて

あたりをおどろかす、

其他の面々皆く

安泰斯界の為の

大慶至極に存候、

却説御令息君

此頃の氣候にては

弥か上にも御元氣

なるべく其の御小照

拝受いたし度き

ものに御座候、此儀

特に御令室まで懇

願いたし申候

先は御礼旁々

右まで 恐々頓首

石井毅

三月廿七日

天城学兄

侍史

(封筒表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

(封筒裏)

三月廿七日

東京南品川五五七

石井毅



裏



表

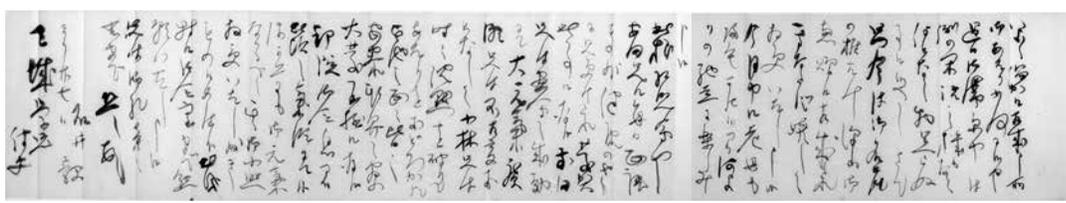


図5



* * *

南品川の林響からの手紙。三月の紅児会の最中であり、安田鞞彦は毎日のように会い、健康そうであること、前田青邨は画会の成功で「大元氣」、広瀬長江は相変わらずおとなしく、小林古径は「時々沈黙を破りてあたりをおどろかす」と、紅児会の面々の近況も活写している。林響は二点出品していた。

6 明治四十四年八月一日付

肅啓

此度は永逗留致し
甚だ御厄介か
け申し候、出立之際
はまた御土産産
山拝領いたし
且つ過分之補助
料まで添えられ候
事、深く御礼申上候、
実は千歳様分
丈はかねての

お言葉により甘

え可申考に候へし

処、開封すれば之

には過ぎたる御

心つけと知り、却

りて恐縮に存候、

昨夜九時といふに

無事帰宅致候

間御安心下され度、

老母と荊妻とより

よろしく申出で候、

先は取急ぎ御

礼之意まで申述

度余は後便を期

し申候

八月一日

恐々頓首

毅三郎 拜

天城学兄

御令室様

尚々 長江兄へよろしく

願上候

(別紙)

汽車中絶えず

樹木のたをれしと

橋の流失せしと

崖のくづれしなど

風害水難の跡

に心寒く帰宅致

候処、幸小宅には

異状無之候、御安

心下され度候、然かも

海岸はことの外は

げしかりしよし

気の毒に存候

(封筒表)

伊豆国田方郡修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七 石井天風

八月一日

* * *

この年もまた修善寺に長逗留をしたことがわかる礼状。この前に、七月二日付葉書にて、雨天などで延引していたがいよいよ晴天を待ちこの葉書と同日に参館」と知らせられているので、七月ひと月に亘る逗留だったとわかる。さらに出立の際にはたくさんの土産に「補助料」まで頂いたようだ。その礼状。婦りの汽車中から災害の痕が見られ海岸の激しい被害に心を痛めたこと、品川宅の無事を別紙で伝えている。この年、七月二十六日にあつたらしい豪雨のことか。

7 (年代不明、明治四十四年か)八月三十日付

拜復

此程横山先生重ねての御出馬

可□之由お楽しみの方に御座候

就ては□銀氏の出張を急

がる、儀、御尤も至極に奉存候、

然るに延引いたし候は当方

にても不本意に存候得共

僅か一兩日にして完成すべき

程の仕事をもた重ねて出張

は逆も駄目ならんとも懸念し

且ッ本人も是非仕上るとて

急ぎ居候間相済まぬとは

知りながら遂々如此延引

相成候儀、単に御海容

願入候

拙作六曲屏風につき横山先

生には嘸御苦笑の事と

存候へども、来月開会の展

覧会に間に合ふ製作は

逆も六かしく候間、絵画としては

チト妙変なれども出品して

川崎氏への義務丈けを

はたし度存候、宛所は上野

公園二号館内絵画彫刻

展覧会(日本美術社)に御

座候

先ずは不取敢右まで

早々

八月卅日

天風生

天城学兄

侍史

(封筒裏)

養氣館

相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

卅日

* * *

事情が摺みづらいが、九月開会の展覧会への六曲屏風出品について記している。郵便ではなく年代不明だが、天風名で差し出されていること、続報と思われる葉書があることから、明治四十四年のことか。

8 明治四十四年九月九日消印

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様 侍史

(裏)

日本美術社よりしきりと出

品を急がれ候へども荷造不便なれば見合せ可申か

横山先生は御出張相成られ

候や、銀氏は如何にせしや、間に合はさりしか、不日拝眉を

可致候 早々 石井天風

△小川氏より依頼ありしも俗用多忙の処進行

よろしく

* * *

内容より年代不明八月三十日付の書簡の続報と思われる。日本美術社へは出品を見合わせたか。

9 明治四十四年九月十三日消印

(官製はがき表)

伊豆国田万郡 修善寺温泉

新井天城様

南品川五五七

九月十三日 石井天風

(裏)

御腫物に御難儀遊はされ候や

御経過如何に候や、御都合にて

五浦へ出張いたし度、当方は何

日でもよろしく御座候、さて御

地霊湯は脚気患者には

如何に御座候や、実は愚妻

該病と今日診断あり候、然るに

此乳を飲まず時は幼児は尤も

危険との事につき人の子の

父として心痛せざるを得ず

候間もしあやめの湯に其効

ありとならば御厄介御願

申度御伺申上候、尚一方

居に職人絶えず画会の運

動せねばならず、ツク／＼閉口に

御座候、画会々場は上野常

盤華壇十一月三日と決定

致し度存候間、然様御了承

願上候 取急ぎ右まで 早々

* * *

五浦に出張の旨を伝えるとともに、修善寺の霊湯は効能があるかをたずね、乳飲み子を抱えた脚氣の妻を氣遣いご厄介になりたいと願ひ出ている。画会のために動かねばならないことをぼやくつ、画会「天風会」のことがこの年十一月三日、上野常盤華壇に決まつたことを伝えている。

10 明治四十四年十月一日付

(官製はがき表)

伊豆国 修善寺温泉

新井天城様

(裏)

其後は如何に御座候や、いよ／＼

画会も近き候ま、五浦へ急ぎ候

御都合よろしくば御東上待

上げ申候、先は取急ぎ要用まで

委細は拝眉にゆつり可申候

十月一日 南品川五五七 石井天風

* * *

画会(天風会)も近づくなか、五浦へ急ぎ向かうこと、ご東上を待つと願ひであるはがき。多くの画家たちが席上揮毫など協力の運びとなつたもので様々な相談があつたと思われる。

11 明治四十四年十月五日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

「東京府下／南品川宿／五五七番／石井毅」(方印)

(裏)

爾来一向に御消息を拝し不申候

が御左右如何に御座候や、小生五浦行き

を急ぎ居候、画会の印刷ヤット

只今出来、取急ぎ発送仕候間可

然御高配願上候、却説紅児会

一同決死励精いたし居候、今日竹坡

兄を見申候、努力可驚木戸御免

の六曲屏風三双!!!

十月五日夜

* * *

石井天風

画会(天風会)の案内状の印刷ができたこと、紅児会の一同や、尾竹竹坡(二八七八〜一九三六)らの精勵を伝えている。

【天風会の発会】

天風會々規

發会 十一月三日

會場 上野公園 常盤華壇

天風會趣旨

天風石井氏は現代画壇に嚆望重きの人なり、其作品は実に師が玄妙なる感情の表現にして先師橋本雅邦翁深く其才を愛し推挽尤も努む、翁の逝くや切に感ずるところあり中央芸苑の名声と絶ちて遠く閑地に修養すること数年其造詣浅からずして已に清新なる一家の風格を成す、今や帰り来りて城南に卜居し畫房亦新に成るあり、並に予等同人是を機とし本会を起して以て絹素の上に氏が深遠なる蘊蓄を吐かしめんとす、同好の緒彦希くは此意を贊し別記規約によりて振って入会あらんことを。

明治四十四年十月

主唱者

(いろは順)

- 東京 石川正五郎 東京 原 安民 東京 小野鉦五郎
- 東京 岡田甲子之助 静岡 渡邊健次 東京 加藤觀澄
- 東京 川村七造 東京 亀井唯二郎 横浜 谷口喜作
- 東京 田中義一 東京 高橋兼之助 東京 梅室純三
- 千葉 久貝賢治 東京 國藤廉太 東京 藤根常吉
- 大阪 古川專之助 東京 船橋理三郎 東京 藤田義郎
- 東京 小峯奥義 東京 江藤厚作 静岡 新井寛太郎
- 千葉 佐藤三郎 東京 茂野梅吉 東京 茂野吉之助
- 横浜 平沼亮三 東京 瀬沼定治郎 東京 鈴木梨坪

清規

一、本会は石井天風筆新作絵画を会員に頒つを以て目的と致し候

一、発会は来る十一月三日(天長節)晴雨不拘上野公園常盤華壇に於て午前十時より開催可仕候

一、作品及び会費は左の三種とす、

- 甲種絹本(巾一尺三寸 丈四尺) 双幅 金拾七円
- 乙種同上(巾一尺八寸 丈四尺五寸) 一幅 金拾五円
- 丙種同上(巾一尺五寸 丈四尺二寸) 一幅 金拾参円

一、会費は発会当日何種に不限一口につき金参円を払込み残額は作品引き換もしくは翌十二月以後毎月一円宛分納の事但し分納は市内に限り便宜上毎月中旬本会より特に集金人を差出し可申候

○会員二百名を超過する場合には作品自然順延可致につき分納払込みは隔月と変更すること可有之候、

一、画題は会員の望みに応ずべしと雖も複雑なる研究を要するものは協議の上是を定め可申候

一、作品配布順序は発会当日会場に於て抽籤を以て定むる事(但し欠席者は幹事代籤)

一、発会記念として別記諸画伯の寄贈にかゝる絵画を全会員に抽籤にて頒呈可仕候(但し欠席者は幹事代籤) 尚当日諸画伯廿余名席上揮毫の清興を添ふ、

一、当日昼餐として聊粗酒飯を呈し可申候、

一、入会御望みの方は別記申込書用紙へ其要点を記入し発会当日までに御申込み下され度候、

甲種	口	画題	申込書
	口	画題	
乙種	口	画題	申込書
丙種	口	画題	
申込人住所氏名			紹介者

(裏)

東京府下南品川五百五十七番地 石井方

天風會 中

賛助員

(いろは順)

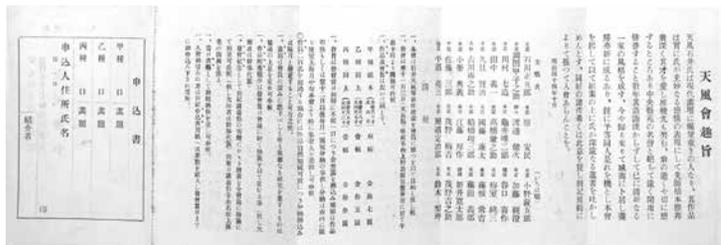
- 東京 伊藤太平殿 東京 伊藤福雄殿 栃木 伊藤次郎殿
- 千葉 市川惇治殿 山形 伊藤悦太郎殿 東京 井上龜三郎殿
- 千葉 石井貫一殿 静岡 原忠三郎殿 静岡 原田新一殿
- 千葉 服部半蔵殿 東京 馬場郁太郎殿 千葉 西尾発造殿
- 千葉 仁茂田兵四郎殿 東京 二階堂保則殿 愛知 本間逕次郎殿
- 静岡 伴野賢造殿 静岡 時田弘太郎殿 岐阜 千葉泰一郎殿
- 静岡 丘 宗潭殿 愛知 丘 球学殿 静岡 小澤清作殿
- 三重 大川親直殿 大阪 岡田幡陽殿 東京 加賀豊三郎殿
- 東京 川上五郎殿 千葉 田丸 節殿 横浜 田中 茂殿
- 東京 田中増蔵殿 横浜 田島啓次郎殿 愛知 都築三衛殿

- 福岡 中山森彦殿 静岡 中田驟郎殿 東京 中村致道殿
- 栃木 上竹善三殿 東京 呉 秀三殿 東京 山口 鍛殿
- 静岡 山本晴太郎殿 千葉 矢部 哲殿 長野 町田清治殿
- 東京 松村清吾殿 東京 眞山鞆六殿 東京 藤井美豊殿
- 栃木 権藤傳次殿 静岡 小杉 潔殿 長野 小島福太郎殿
- 静岡 安達兼太郎殿 東京 尼子四郎殿 静岡 斎藤文吉殿
- 静岡 岸澤惟安殿 群馬 宮崎吾一殿 横浜 椎野正兵衛殿
- 静岡 柴 毅殿 東京 諸井恒平殿 静岡 須田茂馬殿
- 静岡 杉本 柳殿 横浜 鈴木傳次郎 千葉 鈴木卓爾殿
- 東京 鈴木 弘殿

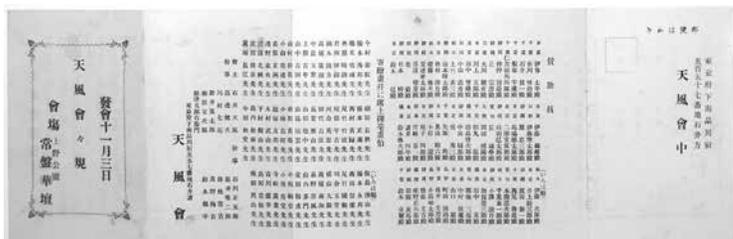
寄贈画並に席上揮毫画伯

(いろは順)

- 今村紫紅先生 磯田長秋先生 飯島撫山先生
- 橋本秀邦先生 橋本正素先生 橋本永邦先生
- 橋爪雪城先生 西田青棉先生 西田信徳先生
- 奥原晴湖先生 尾竹竹坡先生 尾竹国観先生
- 若柳湖先生 梶田半古先生 川合玉堂先生
- 鍋木清方先生 河合英忠先生 横山大観先生
- 高橋廣湖先生 田代古崖先生 高橋南湘先生
- 中倉玉翠先生 長安雅山先生 長野草風先生
- 上原古年先生 山田敬中先生 山内多門先生
- 山中古洞先生 山脇崎雲先生 安田毅彦先生
- 山村耕花先生 前田青椰先生 小堀鞆音先生
- 小山栄達先生 小林古径先生 小泉青堂先生
- 古賀玄洲先生 越塚友邦先生 寺崎廣業先生
- 浅野未央先生 木村武山先生 吉川靈華先生
- 三浦北峽先生 下村観山先生 島田墨仙先生
- 庄田耕峯先生 島内松南先生 飛田周山先生
- 廣瀬長江先生 平田松堂先生



表



裏

會主 石井天風
 幹事 渡邊健次
 川村七造
 新井寛太郎
 瀬沼定次郎
 根津五郎 右衛門
 東京府下南品川宿五五七番地石井方
 天風會

幹事 石川正五郎
 龜井唯二郎
 藤根常吉
 茂野梅吉
 鈴木梨平

12 明治四十四年十一月三日付

拝啓

小画会もお蔭を以て
 予想以上の成効を得たるを

奉謝候、殊に御電報にて御祝下され且ツ十口も御申込み下され候は却りて恐縮いたし候、

然し御芳志により謹て拝受いたし候、いづれ明瞭に御報告可仕候得共、先四百之会員を得たるが如くに御座候、幸か不幸か今後之の疑問に御座候先は取急ぎ右まで

早々

十一月三日夜 石井天風

新井天城様

尚々御令室へ

よろしく願上候

〔封筒裏〕

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

〔封筒裏〕

十一月三日 石井天風

「東京府下／南品川宿／五五七番／石井毅」(方印)

* * *

十一月三日の画会(天風会)の当日、終了したその夜に認められた礼状。幹事として尽力した相原は自らも十口も申し込んだらしい。会員(申込者)が四百名に達したようだと一報している。追って送られた礼状(印刷物)でも、予定以上の盛会であったことなどが述べられている。

【天風会礼状】

拝啓

秋冷の候益々御多祥の段奉大賀候陳者此度開催の本会が過分の盛況は偏に大方諸彦の御同情に因るものと難有御

厚礼申上候從て発会当日は、一々御挨拶可申上筈の処、予相
外の雑沓に取紛れ引続き残務に追はれ乍思及欠礼且つ萬
事不行届の段千萬申訳無之候幸に御寛恕賜はり度奉願
上候並に会主は會員諸氏の為め専念彩管を執りて御温情
に可酬を誓ひ併て将来の御庇蔭を仰度不取敢如此に御座
候恐々頓首

明治四十四年十一月

天風會主唱者一同

新井天城 殿

注意

一、本会は予定以上の盛会の為発会記念絵画殆ど二百点
の不足を来し席上揮毫は大小貳百点以上を余し候間重ね
て諸画伯を煩はし不日贈呈可仕候

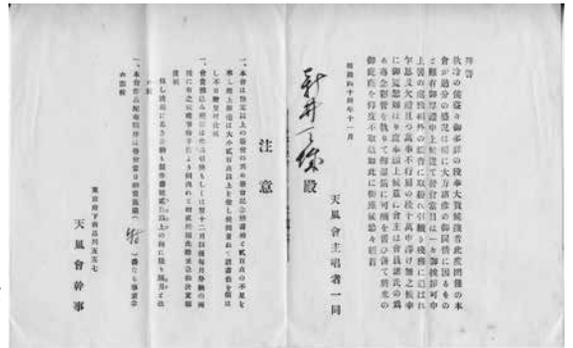
一、会費払込み残額は作品引換もしくは翌十二月以後毎
月分納の兩種に有之候処事務手落より伺洩れと相成候間
此際至急御決定願度候

但し清規に基き分納も製作番号貳百以上の向に限り隔
月と改め候

一、本会作品配布順序は発会当日御当籤第(特)番なる事
為念由添候

東京府下南品川五五七

天風會幹事



天風会礼状

13 明治四十五年一月二十七日付

(官製はがき表)

伊豆国 修善寺温泉

新井天城様

南品川五五七

廿七日 石井毅

(裏)

厳寒之候愈、御清勝奉大

賀候、御令息之御元氣さこそ

と察し上げ候、絵所預長江殿には

湯と日向其間興にまかせては筆
も執らるゝ事と浦山敷候、こなた
は騒がしくババツク一向に感興の
人となれずあきれ居候、老母鎌
倉に遊び候為め外出なりがたく候

○ことの外苦しく候 御察し下され度候

14 明治四十五年二月二十八日付

天城相原学兄 侍史

拜啓

昨日は廣瀬君御

使者とありて見事

なる雛一對御祝

ひ下され、長女の光榮

と小家一同感謝に不

堪候、御見立ての任にあ

づかられ候廣瀬君の

御心労また奉鳴謝候、

実は何方よりも呉れ

そうな処へは妙な

断りを申置候間

新らしき雛一つもなき

おりから、御許より賜は

りしは特の外雅致深

く日頃ほしかりし雛

の一ツとて此上なく恐悦

がり早速に飾り立て

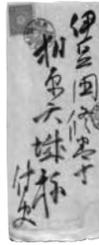
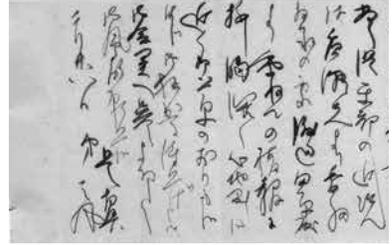
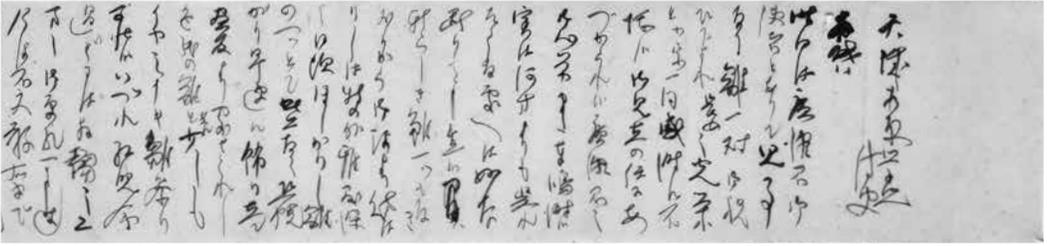


図14

畫友より寄せられた
色紙の雛と共に少しも
イヤミナキ雛祭り

可仕候、いづれ紅児会
過ぎには拝趨の上

万々御厚礼可申述、
今は不取敢右まで、

尚々倶楽部の近況
は廣瀬兄より委細

拝承の処、渡辺多平殿
より重ねての情報に

接し、胸潤の心地致し候、
近く御上京のおりも候

は、御扨駕待上げ申候、
御令圍へ呉々よろしく

御鳳声願上候 恐々拝具
二月廿八日 弟 天風

(封筒表)

伊豆国修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

* * *

廣瀬長江が見立ての任に当たり、林響の長女のため
の雛人形をお祝いに頂いたことへの礼状。画友よ

り寄せられた色紙の雛とともに飾り、よい雛祭りとな
ったという。

15 明治四十五年四月十一日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

(裏)

拝啓 ようく外出の用意

成りて十五日頃籠立で度候 長江兄へ

よろしく 御用など候はゞ

仰せ越され度候

十一日 石井天風

* * *

この年、四月十五日頃から、二十二日まで修善寺
に逗留のことがわかる。出立の時を知らせるもの。
廣瀬長江も滞在していたらしい。

16 明治四十五年四月二十三日付

拝啓

昨日はあまりに勝手

なるふるまい吾ながら

あきれ申候、幸に

御寛恕願上候、
貴館滞在中は
厚き御もてなし

いつもながら感銘
此事にて御座候、

殊に駿河湾の船
遊び臨川の宴等

尤も興深く忘れが
たく彷彿致し居候、

それにつけても廣瀬
君には御氣の毒千

萬に奉存候、
昨夜はチヨード十二時

に相成申候、子供は
オイデ〜とシャン〜

ニギ〜の三つ丈け進み
居候、母は帰り方の

よからぬことしきりに
せめ申候、依て不取敢

起床早々御託まで
如此に御座候、

乍末筆御令聞様
へよろしく御鳳声

願上候
尚々小生の荷物は

御帳場まで委細
御頼み可申上候間

可然願上候 早々
四月廿三日朝

天風

新井天城様

侍史

近日御大切の『カミソリ』
小包にて御送可申上候

(封筒裏)

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

四十五年四月廿三日

* * *

このときまた新井旅館に逗留し、駿河湾での舟遊び
など興深いもてなしを受けるなど世話になったよう
だが、夜、何か勝手な振る舞いをしたようで、翌朝
早々に無礼を詫びた本状をしたためている。荷物も
帳場に送付を頼んだらしい。カミソリを送ると言っ
ている。

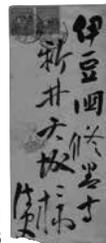
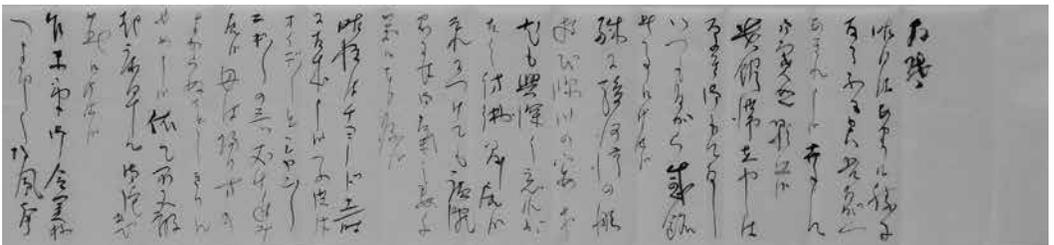


図 16



17 明治四十五年四月二十八日付

(絵はがき表)

伊豆国修善寺
新井天城様

御手紙の儀
恐縮千萬に
奉存候
武器も残り
置き候間 目
下休業の体
御發送方 伏
して願上候
廿八日 天風

* * *

追つてすぐ、絵葉書も送っている。「武器」まで
残し置いてしまい、仕事になつていない様子で、発
送を願ひ出ている。



表



裏

図17

18 (明治四十五年)五月三日付

吾まゝなるふるまい

して御手数相懸

け申候、荷物只今

正に着いたし候

難有御礼申上候、

中に春草畫集

一部見え不申

候へども之は御手

許宛に長江兄

ともに御持

由なれば或はま

ぎれしならんかと

存候、尚々運送

費と口の油代として

金少し長江兄へ

の手紙に同封致し

置候へども同氏

上京の間際と聞

けば御帳場への

手續き相済ま

せ呉れられしや

否や、兎に角御

氣の毒千萬に

奉存候、

小生が預り候まゝ持参

いたし候「カミソリ」は

小さきものゆへ郵便にて紛失せられて

はと氣づかひ居

候処、渡辺君上京

を幸に之にこと

づけ可申候、延引

の儀御ゆるし願上候、

不日紫紅兄御出

張之由こんどは落

つき可申候、

小生は先月の代りに

大車輪に相つ

とめ居候(でも)

また〳〵後便可得

御意候 早々

五月三日 弟 天風

天城様

侍史

(封筒裏)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

五月三日

* * *

送つてもらつた荷物が届いたことの礼状。件の
「カミソリ」は、郵便ではなく渡辺君にことづける

ので遅くなってしまうこと、『春草画集』が紛れた
のではないかということ、長江に厄介になっている
ことなど。今村紫紅が出張の由。自分は先月の代わ
りに大車輪で仕事するということなど。

19 明治四十五年七月七日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

相原天城先生

南品川五五七

七月七日 石井天風

(裏)

拝復 益々御多祥奉

賀候、御手数相かけ申候油

畫集とも難有拝受いたし候

然るに廣瀬氏に托し候もの

其ま、封入御返送付相

成恐縮千萬に奉存候

いづれ不日同人一行に加はり拝芝

萬々可申述候 早々

* * *

手数をかけ「油畫集」とともに受け取ったことの
報告。長江に託した「もの」(前便に言う「金」であ
ろう)が受取られなかったことに恐縮している。

20 明治四十五年七月十六日付

拜啓

此度も依例無遠

慮に御厄介に相成

申候、いつもながら

御高配奉謝候、

帰途国府津にて

諸兄に別れ小山氏

と只二人、淋しき

うちにも談笑を

続け九時といふに

無事帰宅致し

先は不取敢御礼

まで如此に御座候、

御一同様へ宜しく

願上候 早々

七月十六日 石井天風 拜具

相原天城様

侍史

特に長江兄へよろしく

尚々月末御上京の節

はキット御立寄待上申候

紙。

(封筒裏)

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

七月十六日

石井天風

* * *

七月、再度逗留し世話になったことへの御礼の手
紙。

21 明治四十五年七月二十五日付

そろ／＼御多忙の

御事と奉察候

御上京の節は必

ず御立寄り下され

度候

御照会の春草ハ

(絵)

尺八絹本のつまりしものか丈三尺

全体鼠色の仕上げ御所

蔵の物(鳩)よりは汚れ候も

味ある作と見え申候、帰

朝當時の作に御座候、

(絵)

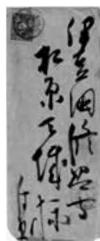


図 21

尺五絹本にして鶏は淡墨の線描あたり温き色、兎に角小生の未見の作風に御座候(春草として)如此物にして右図は百式拾円、左図は百五拾に候由

時價なるや否や、只小生は右図を好み居候、

先ずは御答まで 早々

御令聞御帰館の

御事と存候よろしく

願上候

七月廿五日

石井天風

相原天城様

侍史

(封筒裏)

伊豆国修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

七月廿五日

南品川五五七

石井天風

* * *

菱田春草(二八七四〜一九一〇)の二点の絵について林響に照会したらしくその返答を图示して記した

興味深い手紙。春草の鳩の絵を相原が所蔵していることも承知していることがわかる。時価を尋ねられたのであるうか。(時価は安くとも)帰朝当時の作かを見た「味ある」風景画の方を自分は好むと言いついてはいる。

22 大正元年八月二十三日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

廿三日 石井天風

(裏)

今村君の御作時宗の繪交渉

を試申候処あきれ申候、四五百円

なら望み手もあれど差控居候

など誤托をぬかし候由、勝手に

にしががれと申より外無之候、是

が千〇町風に御座候、御諦

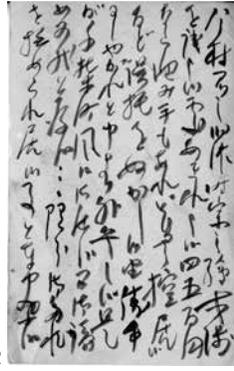
め可然と存候；随分御多忙

を極められ居候事と奉察候

* * *

今村紫紅(一八八〇〜一九一六)の《時宗》の斡旋を林響が引きうけたのだらうか、「四五百円」なら望み手もあらうに「差控居候」といつて話は決裂したようで、勝手ににしががれというほかないと、両者

を彷彿として面白い経緯があったようだ。なお、《時宗》（東京国立近代美術館蔵）は、明治四十一年（一九〇八）の作で、その年の第一回国画玉成会（竹之台陳列館）に出品されたものだった。同展に林響は《弘法大師》を出品したが、それは新井旅館に残された。（現伊豆市蔵）



裏

図22

23 大正元年九月二十日付

其後は意外のご無沙汰
いたし申候、昨今全く
秋清の季に入り申候
処皆々様益々御清
安の御事と奉察候、
当方亦幸に無事清
光罷在候間御安意
可被下候、過日来何
かな落つき不申、製
作為めに更に進捗不
致候、文展への作品

も漸々にして今日より
取かゝり申候事に候、
既に出来せし方も候
よしなれども大方は
同じく気せはしき
思して執筆中と
聞申候、是も
御大喪故と申も何
とも恐入候、乃木將軍夫妻
の事涙ながらも
吾心身を洗淨せし
事思いたし候、毎朝
將軍の記事を
見るをつとめに致し
居候所、追々記事
の薄れ行くも愁
しく候、
小生が文展への出品の予
定にて取懸り候ものは
流行の金屏風
一双へ丈長き蘆
を描き並べ、左に釣者
二人、右に飛べる白鷺十羽
計りを配し、此間を
風渡りて蘆の裏
羽の白きを見せん
との思考に御座候、
然るところ此蘆の
描法には日夜苦心
するも更に名案

浮ばず、細心にせば
風動かず、草筆に
せば顔料の都合上
キタナラシキ結果を
可見、従て清らかの
意を損じ可申候、
茶白線を用ゆべく
二三の絵具や品切れ
せしめ僅かに十両匁
を存申候次第御
笑察願上候、
曾て及落は念頭
にあらざりしも
今はや、危険の状態に有
之候呵呵
いづれにしても大正改
元第一の文展を可
見、今秋は必ず御
上京の程待上申候、
女しきりに机上を
騒がし一層の乱筆
御判読願上候
九月廿日 天風
天城学兄
侍史
(封筒表)
伊豆国修善寺
相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川 石井天風

九月廿日

* * *

大正改元後初めての文展に出品予定で取りかかっている作品(『白映』のこと)について、構想や苦心の点などを報告して興味深い書簡。特に蘆の描法に苦心しており、画面に風が渡るように、清らかにしたいが、草筆にするか顔料にするかなどとの苦慮を打ち明けている。

24 大正二年三月十一日付

拜啓

此頃品川勢一同

小田原に安田兄

を見舞ひ申候、

一時非常の重患

なりし由なれども

既に安心の程度

にあり候、不遠御

平癒の儀を察

せられ候、ここに前

田兄にも会し申候、

いつもの元氣懸

念する程にもな

るべきか先以て至

幸に存候、然るに

意外にも大兄の

御怪我といふを

伝聞し驚申候、

昨今如何に候や

御尋ね申上候、近

来大火しきりに候、御

注意奉祈候、沼津

の諸氏には見舞ふの

辞も無之までに同情

に不堪候

三月十一日 天風

天城仁兄

(封筒表)

伊豆国修善寺温泉

相原天城様

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

* * *

「品川勢一同」が小田原に安田鞞彦を見舞いに行つたことを伝えている。一時非常の重患であったという。ここで前田青邨にも会った。相原が怪我をしたらしい。

25 大正二年四月二十一日付

春和の候、御経過

如何に御座候や、

昨日は青葉の浮

月楼に川上氏得

意の展覧会に

参加いたし其帰

途には是非共御

尋ねいたし度心算

の所、故障ありて

乍残念欠席

いたし候次第に御座候、

此頃の御地は忘れ

がたくなつかしき

記憶を呼び起し居候、

いかにかして罷越し

度切望いたし其機

を待居候得共、

数日前より増築

を初め本月中には

竣成の予定に御座候

間、来月に延び可

申待遠き思致し

小生近来殆ど他出

いたさず珍しく

勉強いたし候、慰み

としては小品の古

画二ツ三ツ手に入れて



図2

恐悦がる位に御座候、
 ときに華山の花鳥
 横巻一本(紙本十一図)
 (三百五十円といふ)同山中
 二友(紙本全紙梅菊)
 (三百円といふ)及び
 椿山の花鳥画帖
 二冊(紙本廿四図)二図
 丈うたがはしく八
 図は見事なるもの十二図
 丈け平凡無印
 八図と覚居候二百
 円冊といふが話し込ま
 れ候も、之は小生の
 手に行かず思し
 召し有之候や否や、
 實は渡辺氏へも
 一寸照會いたし置き候
 尚別に小生入手の都
 合□□□□□□□
 伊藤若冲 十二点
 を得候へ共同一
 筆者の作物を
 数点蔵するは
 小生の境遇上チト
 愚なる儀と存候
 間、譲与もしくは
 交換いたし度、大
 平様には如何
 に御座候や、豫の

御意向御伺申
 度候、少しく書
 画屋じみ候得
 共、多方面の道楽
 中止の小生として
 不得止もの幸に
 御笑察可然
 願上候、
 委曲拝芝万繰
 を斯し申候 拝具
 四月廿一日 天風
 天城仁兄
 侍史

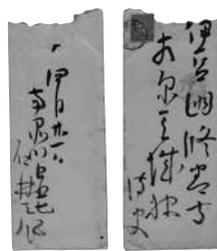
(封筒表)
 伊豆国修善寺
 相原天城様 侍史

(封筒裏)
 四月廿一日

南品川五五七 石井天風

* * *

数日前から増築をはじめ、本月中には完成予定の
 こと。外出せず勉強していること、慰みとして小品
 の古画を二、三人手していることなどの近況を伝
 え、椿山の花鳥画帖に関心があるかを尋ねてい
 る。他に伊藤若冲の十二点を得ていること、しか
 し、譲与もしくは交換を望んでいること。「書画屋



じみ」ているが、「多方面の道楽中止の小生として」などと記している。この頃の古書画収集の様子がわかる。

26 大正二年五月十五日付

拝復

其後当方どぞ

くさまぐれに

遂御尋ねも不

仕候処、御令室様

及御子息様の

御容態如何に被

為在候哉乍後

馳向上候、次に

不器用なる荆

妻が□申候

海苔少々御口

には叶はぬ事と

知りつつ心計りに

御送り申候を、過

分なる御形容

沢山に贅辞を

寄せられ恐縮

此事に奉存候、

然し案内状も差

出し不申得なし

為の御開封延

引せられ候事、
多少は其味を
損ぜしならんと
妻女口惜しがり
申候、

先日一寸御報申上候、

椿山の画帖は

他に片つき申候

得共小生別に■

■隆古

一幅入手いたし候、

尚氣持よき伊

孚九の書小点

も得候、之は如何

あるべきものか、

追々不順の候

に向ひ可申候まま

随分御自愛

專一に奉折候、

皆々様へよろしく

願上候 早々

五月十五日 天風

天城盟兄

侍史

(封筒裏)

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風 五月十五日

* * *

引き続き、林響の古書画収集のことがわかる手紙。前書簡で話題であった椿椿山の画帖については他に買手があつたようだ。別に高隆古、伊孚九を入手している。

27 大正四年四月二十日付

拝啓

其後は不一方御無

沙汰に打ち過ぎ何とも

申し訳無之候、陳は先

年の画会も累片

つき申候所、此程また

厚かましき希望を

抱き別記の後援

会を起こして頂き申候

については従来の関

係上御尊名無断

借用致し置き候間大

目に御察しを願上候、

前景気はなかく、に

よろしくは候得共

時節柄油断なり

かたく存候阿々、

尚々此程高橋光三

色々御高教に預り

難有御礼申上候、老

人はチヨイ／＼出馬に有之候、

此度も何かと御助力

下され居候、

兎も角此會さへ

出来れば少しは勝

手な修養も出来

可申心算に御座候、

発會當時御上京

のおついででも有之候はば

是非御奮臨の栄を

得度今より御願申上候

御一同様へよろしく願上候

卯月廿日 風生

天城学兄 侍史

尚々高橋光三帰京

の節 南画三大家集

御持たせ願上度候

敬具

(封筒裏)

伊豆国修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

卯月廿日

南品川五五七

石井天風

* * *

先年に続きまた別の後援会(天風後素会)を起こし
てもらい、名前を借りたことなどを記す。この会さ
え出来れば少しは勝手な修養もできるだろうとい
心づもりと、協力を願う手紙である。

【天風後素会の発会】

大正四年五月二十三日午後一時發會

天風後素會(印)

發會々場上野公園

精養軒

●天風後素會趣旨

芸術は是れ感情の発露なり、然らば作家の個性は実に之
が生命たらずんばならず。然るに現時の風潮を觀れば、
滔々として、或は因襲に囚はれ、或は時流に酔ふて、毫
も個性の尊重すべきを思はず、徒らに空虚なる製作を繰
返しつつあるものの如し、豈に浩嘆に堪ゆべけんや。而
して鑑賞家敢て之を咎めず、作家も亦単に職業として意
味なき労作に甘んずるの觀あるは、不徹底の甚しきもの
と謂はざるべからず。幸に幾多の評論家は漸く覚醒を叫
び、賢明なる一部の作家の呼応して起ち、之が新運動を

開始せるものあるは、聊か意を強くするものなくんばあ
らず。

画伯石井天風君深く茲に見るところあり、心身を芸術の
壇上に献じて、大に奮勵せんとするの志あり、乃ち絶對
に干渉を避け、飽く迄自由意志を尊重し、充分に個性を
發揮せしめ、其製作をして一段の光彩を放たしめんこと
を希望し、爰に同志相謀りて斯会を企てたる所以なり。
是れ決して私情より出でたる姑息の小策にあらず、聯か
新運動に向つて意義ある後援を為すに足るの一方法たら
んと信するを以てなり。就てはやがて其成績を集めて、
之を發表し、世評に問ふことあらんを期す。大方博雅の
諸賢希くは微衷を諒とし、奮つて贊助あらんことを、至
囑に堪えざるなり。

大正第四乙卯仲春

天風後素會

主唱者

(いろは順)

- 千葉 五十嵐重郎 下関 磯部勘七 東京 石垣甲子造
- 東京 石川正五郎 上総 石井貫一 東京 石井権蔵
- 東京 調所武熊 大阪 脇本米司 伊豆 渡邊健次
- 東京 亀井唯二郎 東京 上村新五郎 東京 川村七蔵
- 東京 吉田克巳 東京 伊達源一郎 東京 高橋為三郎
- 大阪 高橋崑吉 東京 高橋重平 東京 田中義一
- 横浜 田中 茂 東京 中南定太郎 東京 村越鶴吉
- 東京 村松市太郎 東京 潮田竹次郎 東京 国藤廉太
- 東京 松澤與作 東京 松本不卷 大阪 藤澤友吉
- 東京 藤根常吉 東京 古川金次郎 東京 福島於菟吉
- 東京 小峰興義 伊豆 相原寛太郎 東京 榊原定右衛門
- 東京 齋藤省三 東京 坂井義三郎 東京 三宮徳之助
- 東京 関 直彦 東京 千田貞治 東京 妹尾勇吉
- 東京 鈴木栄次郎

●目的は石井天風画伯の後援を兼て同氏会心の作を会員諸氏に頒つ事

●発会は来る五月貳拾参日(第四日曜)午後一時より晴雨に拘らず半日の清遊を期し上野公園精養軒に於て左の通り開催す。

席上小点揮毫(諸画伯一同)色紙短冊画帖扇面を程度とす、

席上楽焼(諸画伯一同)花瓶茶器徳利盃洗香合肉池等、新講談(細川風谷氏) 狂言(山本東次郎氏外同社中)

三曲合奏(尺八関口月童氏琴宮本美根和氏三弦塚本栄花女史)

晚餐(六時頃食堂開始) 御土産(天風氏作何か一点づ)

但し当日御欠席の方に対してはお土産の外発会記念までに席上製作を添へて贈呈す

●会費及払込み方法は左の通り

甲種 金参拾圓

乙種 金貳拾圓

右は発会当日何れも金五圓を申受け翌月より甲種は金壹圓半、乙種は金壹圓宛拾五ヶ月払込甲種残額貳圓五拾銭は作品引替の事、但し市内は毎月集金人を差出し伝票御捺印の上御渡しを願ひ、地方の方は振替又は為替にて専任幹事宛て御送金を乞ふ、尤も此繁雑を避くる為め発会当日一時全納又は当日作品引替の両度に等分して御払込みあるも御随意。

●作品は其趣旨に基き図題手法等筆者に自由を与へられ度従て絹紙大小は予め規定することを得ず、但し幾分でも公平を期し二点或は三点を組合せ一口と成すもあら

ん、甲種は筆者配合の表装其匣附、乙種は仮巻の事。

●製。作。期。間。は。会。員。数。に。応。じ。多。少。の。伸。縮。を。免。れ。ず。と。す。る。も。仮。に。壹。ヶ。年。半。を。予。定。す、作。品。全。部。完。成。の。上。一。堂。に。展。列。し。て。会。員。諸。氏。は。元。より。一。般。同。好。者。の。清。鑑。を。仰。ぎ。そ。して。後。抽。籤。を。以。て。そ。れ。／＼。会。員。御。一。同。へ。頒。呈。の。事。

●中途御退会の場合には既納の会費は諸雜費に繰込み時誼により相当の作品を酬ゆることあるべし。

●御。申。込。書。は。別。記。の。用。箋。へ。要。点。御。明。記。の。上。本。会。事。務。所。又。は。各。幹。事。の。手。許。迄。遅。く。も。発。会。前。三。日。ま。で。に。御。送。達。を。乞。ふ、是。は。一。切。の。準。備。上。特。に。希。望。す。る。処。

●御欠席の場合は予め代人御指定を願ふ。

東京市下谷区谷中初音町四丁目百番地

幹事 調所 武熊

同 日本橋区樽正町十四番地

同 亀井 唯二郎

同 芝区愛宕下町四丁目西一番地

同 吉田 克巳

同 京橋区弓町貳拾貳番地

同 中南 定太郎

同 京橋区宗十郎町拾貳番地

同 古川 金次郎

同 本郷区駒込上富士前町参番地

同 小峯 興義

同 京橋区参十間堀参丁目壹番地

専任幹事 茂野 梅吉

電話新橋貳参九六

振替東京壹八参九六

東京市京橋区三十間堀三丁目一番地

茂野方

天風後素會事務所

(裏)

種別	口数	会費	紹介者	入会者
		月賦 全納 二回	姓名	住所 姓名

右大正四年 月 日 入会申込候也

天風後素會中

茲に本会を發表するに当り日頃天風画伯が知遇を辱うせる各位の芳名を録して謹で敬意を表す

天風後素會 (いろは順)

- 石川照勤殿 石川角蔵殿 石原吉太郎殿 石井仁助殿
- 石井清秀殿 石井 估殿 石井徳太郎殿 伊藤 栄殿
- 伊藤太平殿 伊藤悦太郎殿 伊藤福雄殿 伊藤定次郎殿
- 伊藤彌三郎殿 伊藤柳助殿 今井甚太郎殿 今井興志雄殿
- 市原 求殿 市川惇治殿 井上公二殿 井上孫太郎殿
- 池田照誓殿 池田宙堂殿 猪服淇清殿 猪橋幸吉殿
- 岩井伊三郎殿 飯塚金太郎殿 林吉之助殿 服部政吉殿
- 服部竹二郎殿 服部半蔵殿 長谷川敬二殿 畠中金次殿
- 原 安民殿 原田熊治殿 原田新一殿 二階堂保則殿
- 二宮景輔殿 仁茂田兵四郎殿 原忠三郎殿 原 保太郎殿
- 細谷丈夫殿 堀清三郎殿 堀内正宏殿 本田元俊殿

富山栄吉殿	富田忠太郎殿	富樫文次殿	豊田鉄太郎殿	小森市松殿	近藤和三郎殿	近藤多喜司殿	近藤加久蔵殿
友田芳太郎殿	友野欽一殿	伴野賢造殿	鳥居欽八殿	児島喜仲殿	榎藤傳次殿	江原栄次郎殿	江藤厚作殿
大倉忠吉殿	大川親直殿	大川賢之助殿	大西直三郎殿	寺崎乙次郎殿	赤堀 茂殿	尼子四郎殿	秋田和男殿
大熊周利殿	大野吉五郎殿	太田信義殿	尾間 明殿	新井為三郎殿	荒井亀三郎殿	新井亀水殿	有地健祐殿
丘 宗潭殿	丘 球孚殿	小川鐵五郎殿	小澤仙太郎殿	有尾さだ殿	浅井辰五郎殿	浅野幸作殿	穴原栄次郎殿
奥平浪太郎殿	小野鉦次郎殿	岡田播陽殿	蔵 真三郎殿	青柳正喜殿	青木米作殿	朝比奈幸太郎殿	安達兼太郎殿
加賀豊三郎殿	加藤龜太郎殿	加藤觀澄殿	川村市左衛門殿	安倍好之助殿	笹岡省三殿	齋藤 壽殿	齋藤周作殿
川上五郎殿	兼坂又吉殿	片倉馨亮殿	吉田正蔵殿	齋藤玉男殿	佐藤三郎殿	櫻井二郎殿	酒田啓次郎殿
興田利作殿	玉置文次郎殿	田家九七郎殿	田山宗堯殿	澤村則辰殿	朔 順次殿	坂倉吉兵衛殿	坂口格太郎殿
田中錦太郎殿	田中増蔵殿	田中弘三殿	田中喜一殿	佐藤雄之助殿	清川弘道殿	木村農夫吉殿	木村さく殿
田中喜三郎殿	田島啓次郎殿	高橋雅之助殿	高橋正雄殿	木村儀四郎殿	木原善太郎殿	岸澤惟安殿	三輪善兵衛殿
高橋彦次郎殿	高野斧三郎殿	高橋久太郎殿	高坂徳鳳殿	三宅鑽一殿	三原新太郎殿	三澤竹三郎殿	宮崎吾一殿
高澤善作殿	高橋はつ殿	高木末吉殿	谷口喜作殿	宮田篤郎殿	紫 毅殿	柴田忠吉殿	柴田仁兵衛殿
龍岡萬敬殿	多田徳助殿	園村道太郎殿	津村重舎殿	柴丑之助殿	柴垣鼎太郎殿	篠原嶺葉殿	篠原久五郎殿
津久井省巳殿	辻又兵衛殿	土屋治三郎殿	中村源彦殿	篠崎清五郎殿	白名雄次郎殿	島津金七殿	椎野正兵衛殿
中山森彦殿	中村致道殿	中村彌一郎殿	中村 讓殿	平山勝敏殿	平沼亮三殿	平尾鐵也殿	平野絹次郎殿
中村隆貫殿	中村興一殿	中島 彌殿	中雄重次郎殿	平井榮太郎殿	平田篤次郎殿	諸井恒平殿	守田寶丹殿
中北庄吉殿	中田騷郎殿	南條哲次郎殿	長原新治郎殿	関口茂平殿	瀬沼定次郎殿	鈴木梨坪殿	鈴木延太郎殿
永田謙一殿	長田貫重殿	永井熊太郎殿	村井五郎殿	鈴木利三殿	鈴木小十郎殿	鈴木伊之助殿	鈴木銀次殿
村田莊五郎殿	内田好之輔殿	上松 翁殿	梅岡巳之吉殿	鈴木賢吉殿	鈴木卓爾殿	鈴木信一殿	鈴木谿郎殿
梅室純三殿	梅津小次郎殿	上田徳太郎殿	宇田川庄吉殿	鈴木 學殿	杉本九八郎殿	杉本 柳殿	菅禮之助殿
野原常二郎殿	野村半次郎殿	栗原白嶺殿	栗原金蔵殿	陶山善三郎殿	須田茂馬殿		
黒住弘毅殿	国枝鎌三殿	久我和三郎殿	久貝賢治殿				
呉 秀三殿	家島常七殿	山上信吉殿	山田信介殿				
山田莊吉殿	山谷徳次郎殿	山口 鍛殿	安井健次郎殿				
山口善兵衛殿	矢部 哲殿	正木音次郎殿	松崎松之助殿				
松田直七殿	丸尾 修殿	町田鉄之助殿	町田清治殿				
藤根久吉殿	藤井美豊殿	藤田義郎殿	古川専之助殿				
古屋幾久男殿	二見鋼太郎殿	船橋理三郎殿	福井忠兵衛殿				
深野半蔵殿	小池作三殿	小杉 潔殿	小島福太郎殿				

○事務所

天 風 後 素 會

電話新橋二三九六番

○画房

石 井 天 風

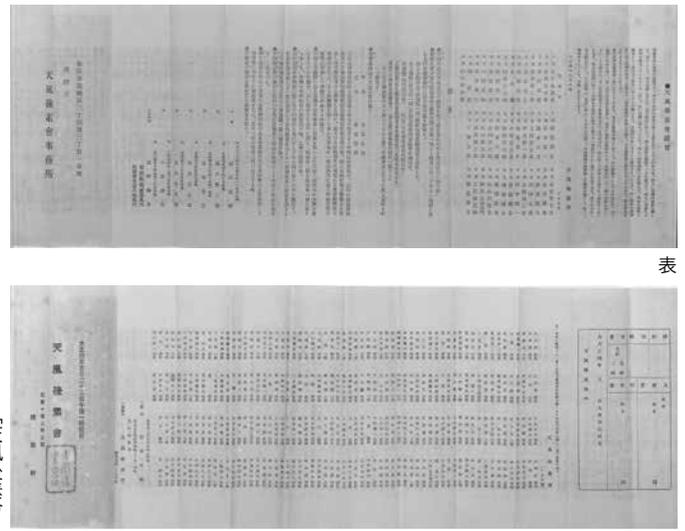
東京府下南品川五五七番地

東京市京橋区三十間堀三丁目一番地

茂野梅吉方

【天風後素會 案内状】

拜啓春暖の候益御清福に被為在大慶至極に奉存候陳ば本
 会は石井天風君を後援すべき目的を以て来る五月廿三日
 午後上野公園精養軒に於て発会可任当日は別記の通り半
 日の清遊を期し申候間御多用中枉げて御来臨の栄を得度
 此段御案内申上候 忽々



表

【天風後素會】

大正第四仲春

天風後素會(印)

相原寛太郎 殿

追て御出向之節は此状御示し願度尚来否子め御一報下さらば幸甚

(裏)

余興午後一時より

一、席上小點揮毫 (諸画伯一同)

一、席上樂焼 (諸画伯一同)

一、新講談 (細川風谷氏)

一、狂言 (山本東次郎氏)

一、三曲合奏 (尺八 関口月童氏)

一、新講談 (琴 宮本美根和氏)

一、三曲合奏 (三絃 塚本栄花女史)

晚餐午後六時より食堂開始

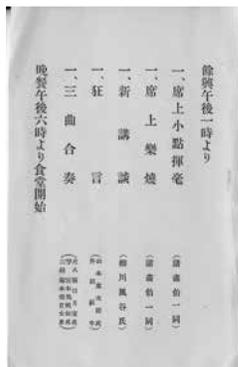
* * *

「天風画会」に続き、大正四年には林響の後援を兼ねて作品の頒布を目的として「天風後素會」が起こされた。趣旨の記された申込書と案内状の次第の通り、五月二十三日に上野公園精養軒において発会式が行われた。作品の制作期間としてはここではおよそ一年半が予定されているが、その後「延引」しながらも全部完成し、約二年半後の大正六年十二月九日、東京美術学校校友会倶楽部において展覧し、会員に頒呈されたことが、同会案内状(茂原市武田

勘七郎家文書より、『千葉県の歴史 資料編 近現代8』に翻刻)によつてわかる。



表



裏

天風後素會案内状

28 大正十一年六月二十二日付

沐芳老兄

其後引き続き御滞在のやうに伝承いたしました。がもう御帰りの事と拝察いたします。さて其おり御話いたしました。雅邦翁の筆塚もいよゝ進捗いたしました。昨日地鎮式を済ませました。其席上、下村川合両先生初め委員まであなたの御寄附下さるやうな事まで申出ました。是非それは御賛成を

願つた方がよいといふ事でしたから茲に改めて私から御願申し上げます。どうぞ至急に御送達下さい。(本郷区神明町四四五 橋本宗次郎宛)

ついで又筆塚、本門寺、橋本家、それ〳〵二巻づゝ納める門生連名に要する御芳名を別紙三枚御認め御同封願ます。之は月末限りとしてあります。

六月二十二日

(封筒裏)

伊豆国修善寺温泉

相原沐芳様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井毅三郎

六月二十二日

* * *

林響の師である橋本雅邦の筆塚を池上本門寺に建立することについて寄附を求めた手紙。大正十一年六月二十一日に地鎮式を終えたこと、下村観山や川合玉堂らの委員に相原の名を林響が出したことなどがわかる。筆塚に納める名前前執筆も依頼している。

29 大正十二年九月七日消印

(官製はがき表)

伊豆国田方郡修善寺

相原寛太郎様

(裏)

南品川五五七 石井林響

惨また惨、御地如何
御安全を祈りつゝ、
当方一同無事を御
知らせ申上げます

* * *

関東大震災直後の無事を知らせるも、惨状が伝わるようなはがき。表に赤鉛筆で「9. 17.」と書き込みがある。消印は九月七日だが、郵便到着の日付か。

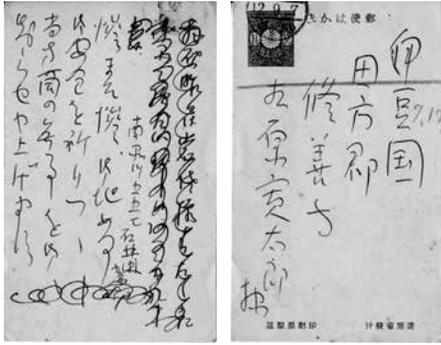


図29

裏 表

30 (大正十二年)九月十九日付

(官製往復はがき「返送用」表)

静岡縣田方郡修善寺

相原寛太郎様

九月十九日

〔東京南品川五五七／石井林響(住所印)〕

(裏)

つくづく生存を不安ならしめた程の天然災も御地に及ばざりしは何よりの御幸福です、当方多少の被害はまぬかれませんが一族愛禽ともに無事、当時御安心を得度早々はがき出しましたがおそらくは

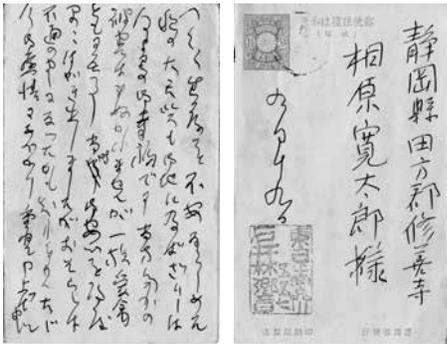


図30

裏 表

不通のまゝになったかも知りませんが、今御懇情にあづかり重ねて申し上げます

* * *

震災後、「一族愛禽ともに無事」を知らせるもの。返信用はがきに書かれており、まず相原より往復はがきにて修善寺に被害及ばなかったことの一報がなされたようである。「相原寛太郎行」の宛名は林響の筆跡ではなく、相原はこのようにして各方面へ安否気遣いの連絡をしていたと思われる。

31 (大正十四年)三月十五日付

(官製はがき表)

伊豆国 修善寺温泉

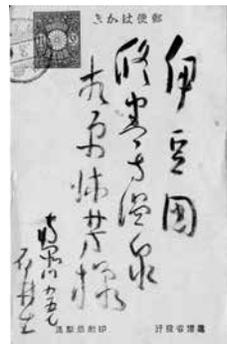
相原沐芳様

南品川五五七

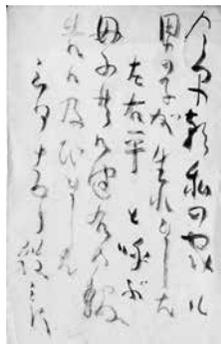
石井生

(裏)

今早朝私の家に
男の子が生まれました
左右平 と呼ぶ
母子共に健右御報
告に及びました
三月十五日 毅三郎



表



裏

図 31

32 大正十四年四月十六日付

拝啓

春和の候ますく、

御平安大賀此事に

存じあげます、陳（陳）ば

此度豚児の為め

過分なる端午の

御祝を寄せられ光榮

此上もなく御芳志

の程小家一同難有

御礼を申し上げます、

爾来母子共至つて

健康御安神を願ます、

不取敢右拝受の

御挨拶のみ 早々

四月十六日

響生

沐芳老兄

玉察下

追而此頃稀らしき

石濤和尚之黄山写生

の画冊を手に入れ独り

悦び居ります、新羅山人

の仿古山水冊もあれど遙

かに及ばず、ぜひ御一覽

を願ます

(封筒裏)

伊豆国修善寺

相原沐芳様 研北

(封筒裏)

南品川五五七

石井林響 四月十六日

* * *

この年三月、待望の長男が誕生した林響が、端午

の祝を受け取った礼状。追つて書きに、大名品、石

濤《黄山八勝画冊》を手に入れた悦びを記している。

この入手も三月のことであった。書風の変化は歴然

としており、大正半ば頃から候文でなくなっている。

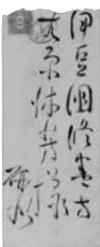
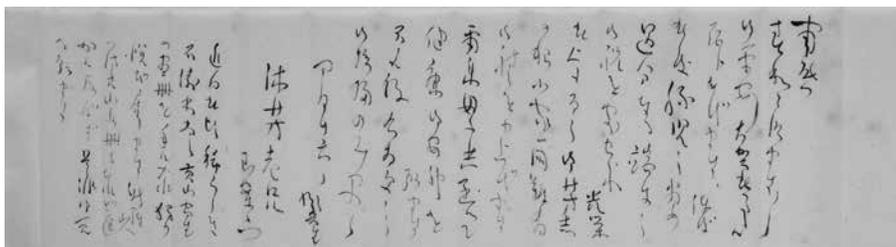


図 32

33 大正十四年五月十一日付

拜啓

先日は豚児の為め
過分の御祝を辱し

恐縮此上もありません

御芳志に甘え職と

燈台とを買いました

他から祝はれしもあり

まして、小居未曾有

の武張った節句を

見ました、謹々御礼

を申し上げます、只今

微意までに小包を

差上げます中の

支那製の青墨は

つまらぬものですが紙

本には妙かと思は

れます、御試み下さい

若葉のおあたりを

浦やみつゝ、右まで

御一同様へよろしく

五月十一日

毅三郎

沐芳道兄

研北

(封筒表)

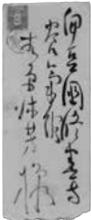
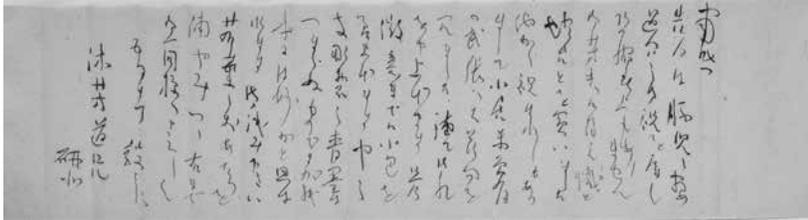


図33

伊豆国修善寺

養氣館

相原沐芳様

(封筒裏)

東京南品川

石井林響

五月十一日

* * *

長男の端午に寄せられた祝で職と燈台を買ったという礼状。返礼に中国製の青墨を贈っている。林響は「文墨雑話」を著し、『美術新論』三巻第十号、昭和三年十月、「墨は主に吾々は青墨を愛用するが、それに何の理屈があるのではなく、色々使つて見る内に、青墨の持味が紙の上にシツクリする様で、また自分の気持にシツクリするからである」と述べている。また浦上玉堂や岡田米山人といった林響の敬愛する南画系の作家が青墨を用い、自分も青墨を所蔵している旨を語っている。本状から、既に大正半ば頃にはこの趣味に凝つていたことがわかる。

34 (年不明、大正十五年か) 八月四日付

拜啓

打続く災天に熱

氣弥加はりどう

なる事かとおそれ
をなせし折柄やうく
に雨に恵まれ千草萬木と共に
生氣加はるを覚
えました

御左右如何あられますか

過般御芳書に預

りながら雑用に紛

れやうやく只今

拝誦せし次第何共

申訳けもありませぬ

御苦闘は例の村民

との御関係にてもあら

しにや御文意に依

て容易ならざるもの、

ありしやに拝察

それに御健康に

御異状のあられし

は一段と御心痛を

覚えさせられしなるべく

でも今は総てを勝

利の解決とは大慶

至極に存じます

正義と善戦とは

いつもかくあるべきもの

と信じます

くれぐれも御自重を

祈ります

小生は昨春来営み

かけし畫房やうく

に成り野人野に帰れる心地して自悦罷在ります、妻子も

暑休の為め当方に

團欒するのです、御

安心下され度御一同

様へもよろしく願上ます

御上京のついででもあられ

ましたらこちらへ御

枉駕願はしく待上げます

八月四日

響生

沐芳仁兄

研北

(封筒表)

伊豆国修善寺

相原沐芳様 研北

(封筒裏)

「千葉県大網町宮谷郷 白閑亭」(角印)

石井林響

* * *

千葉県大網町宮谷の「白閑亭」からの手紙。新しい画房が完成し、「野人野に帰れる心地して自悦」という心情を伝える。妻子も暑休のため合流の由。これが新井旅館に残された林響の最後の書簡となった。

35 昭和五年二月二十四日付

(官製はがき表)

伊豆修善寺

相原寛太郎様

千葉縣大網町

宮谷 石井きん

(裏)

拜啓 主人儀一昨廿二日

病氣再發致目下

重態ニ有之候間一寸

御通知申上候

二月廿四日

* * *

林響の妻より、林響が倒れ重態であることを知らせるもの。



図 35

裏

【訃報】

父 林響儀宿病再發二月廿五日午前三時十分死去致候間此段謹告仕候

追而來ル二月廿七日午後二時ヨリ三時迄大網町宮谷本國寺ニ於テ佛式ニ依リ告別式執行可仕候

千葉縣大網町宮谷

昭和五年二月廿五日

男

左右平

親戚総代

石井要吉

友人総代

茂野梅吉

島田墨仙

安田鞆彦

磯田長秋

伊東深水

佐藤三郎

石井與作

門人一同



訃報

【七七日忌挨拶状】

皆々様御変りもなくお過ごしのこと、存じ上げます。
扱 夫石井林響死去の節は、いとも厚き御同情を賜り御
鄭重なる御供物を頂戴いたしました事は身に染みて難有
御礼申し上げます。

亡夫が昨年三月廿四日突然脳出血に冒されました節は
皆様任何一方ならぬ御心配を掛けましたが、幸ひにも漸次
快方に赴きまして、十月頃には画筆を執れる程に些しの
故障も残さず恢復したので御座りました。然し其後も油
断なく養生を続けて居りました処、去る二月廿二日夕刻
の事で御座りました。俄かに左手が痺れ、続いて激しい
頭痛を訴へました。悲しくも再度の脳出血で御座りま
す。此時の驚きは申し上げ様も御座りません。直ぐと医
師を招き出来る限りの手当を致しましたが、其甲斐もな
く竟に廿五日午前三時に歿しました。行年四十八歳で御
座りますので、もう些し存へて居て呉れたらばと残念に
存じます、御察下さいませ。

遺骸は自寓の直ぐ傍の、法流山本國寺境内の丘上に埋葬
致しました。此の場所からは亡き夫が生前愛好して居り
ました、宮谷一带の風光を見渡す事が出来ますので、仏
も心静かに眠って居て呉れる事と、夢のやうな悲しみの
中にもこれ丈は喜んで居ります。

昨年十月に病後初めての画筆を執った時の亡夫の喜びの
傍が未だ目先に御座りますのに、本日は、はや七七日忌

の仏事を営む身と成りました。別便で御送り致しました
版画は亡夫がその時回春の喜びに浸つて写生帖に筆を執
つた小品で御座ります。御目に掛ける程のものでも御座
りませんが、満中陰の御印に代え、且は日頃御親しく願
つて居りました皆様にいづ迄も石井林響を記念して頂き
度いと存じまして、失礼ながら御贈り致します。御受納
下さいませすれば誠に仕合せに存じます。

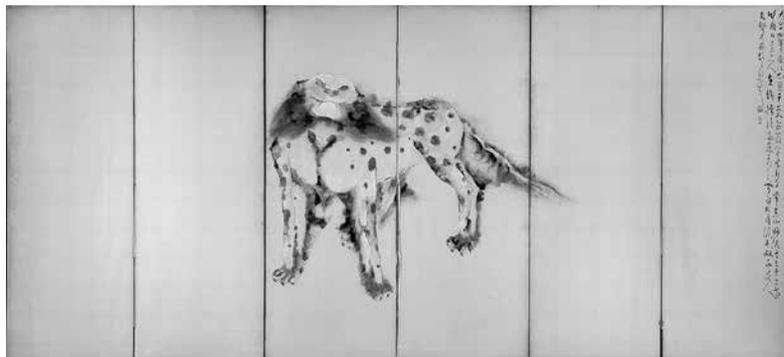
いまだ心も取乱れて居りますので、亡夫生前の御交誼に
対し御礼をも申し尽しませず、甚だ勝手に御座りますが
これで失礼させて頂きます。末筆ながらあとく、宜敷く
御願ひ致します。

昭和五年四月十四日

石井きん子

〔付記〕

私信を主とする本資料の掲載につきましては、ご遺族である
石井淳様、安田由紀夫様、新井旅館の相原葉子様に格別なる
ご理解とご了承を賜りましたことを御礼申し上げます。翻刻
にあたっては、新井旅館より資料提供を賜り、文書整理番号
のある同館保管の読み下し資料を参照させていただきました。
安田鞞彦書簡の難読字については池田宏様のご協力を得まし
た。記して感謝いたします。



〔図版解説〕石井林響《唐獅子牡丹図屏風》

紙本墨画淡彩六曲一双 各隻縦一六八・〇、横三六九・〇センチ
大正十四年（一九二五）
個人蔵・千葉市美術館寄託

本屏風は、前記展覧会「生誕135年 石井林響 千葉に出づる風雲児」終了後に存在が確認されたものである。林響没後の昭和三年（一九五七）の遺作展覧会に出品されて以後は未公開であった。

画中に「大正十四年歳次乙丑孟蘭盆節會為記念常在山妙徳寺三十三世／竹田日圭上人在殘檀徒齋藤壽氏寄進此屏風壹双而友人／林響石井毅三郎畫之」と記されている。大正十四年（一九二五）、千葉県東金市・妙徳寺の日圭上人に宛て、檀徒で林響の友人である齋藤壽の寄進により描かれたものである。日圭上人こと武田頭龍による林響の追悼文（武田頭龍「思ひ出のまま」『土筆』4-9 石井林響追悼号、昭和5年）にもこの屏風について触れられており、武田頭龍が住職として入った妙徳寺の大破した御堂宮繕のための寄付勸募に刺激となるようにとの発願から無償で描かれたという。林響とは実家同士が親戚の間柄で父同士は「無二の酒友」であったが、本人との面識及び交遊は、この齋藤壽を介して大正十年頃から始まった。当時の林響は、千葉への移住を實行に移す頃である。「芸術も宗教も極致は同一帰着点に帰するというのが林響の持論でそれに共鳴した」という武田頭龍に、大網宮谷の地を選んで「これからは神仏と隣交際をして神を友とし仏と共に居る考えになって芸術に精進するのだ」と、移住の思想的背景を語るようなこともあったようだ。

いかにも林響画らしい表情の唐獅子や蝶がおおらかな筆で描かれ、牡丹は透明感のある美しい墨色でたらし込みを多用。朱色と白、二種の金色と色数を抑えて描いた清々しい画面となっている。現存が確認できる数少ない林響の屏風絵として貴重である。右隻には「林響（朱文方印）」と「其山楼」（白文長方印）「山骨」（白文長方印／関防印）が、左隻に「林響（朱文方印）」がある。

[Introducing material] Letters Relating to Ishii Rinkyō (Transcription and Commentary)

[Illustration] Ishii Rinkyō “Karajishi (Chinese Lion) and Peony Folding Screen”

Matsuo Tomoko

Ishii Rinkyō (1884-1930) was a Japanese-style painter born in Toke Hongō-chō of Yamabe District, Chiba Prefecture (present-day Chiba City) who entered the art world at an early age at the end of the Meiji Period, and was active into the early Shōwa Period. This paper transcribes letters, with some additional commentary, and attempts to reveal more about Ishii Rinkyō from the end of Meiji to the beginning of the Shōwa Period. A section of these letters from Ishii Rinkyō to Aihara Mokuhō (Kantarō) (Arai Ryokan collection) were introduced in the exhibition “Ishii Rinkyō: Leading Nihonga Artist from Chiba, 135 Years since his Birth” held November 23, 2018 through January 14, 2019, while letters from Yasuda Yukihiko to Ishii Rinkyō (Chiba City Museum of Art collection Ishii Rinkyō-related material, donated by Mr. Ishii Jun) are introduced here for the first time. Aihara Mokuhō was third-generation master of Shuzenji “Yōkikan Arai” opened in 1872, and was on close terms with many artists. He had deep ties with Rinkyō among them, acting as his marriage mediator, etc., and continued to support him throughout his life. There were numerous letters from Rinkyō and invitations to artist-patron meetings - even an announcement of Rinkyō’s sudden death - remaining in the possession of the Arai Ryokan.

I also introduce Ishii Rinkyō’s “Karajishi (Chinese Lion) and Peony Folding Screen” (private collection; in trust to CCMA) that was discovered after the forementioned exhibition. The artwork appeared once following his death at an exhibition of his posthumous work in 1931, but has not been on public view since. It was produced in 1925, from a request for something stimulating to raise funds for the repair of the damaged temple of Myōtokuji in Tōgane City, Chiba Prefecture, on behalf of chief priest Nikkei Syōnin, alias Takeda Kenryū. Rinkyō was in the process of moving to Chiba at that time, and it seems there were also things he told the chief priest of the ideological reason behind his move. The lion and butterfly are painted with a generous brush in an expression very reminiscent of Rinkyō’s work, and the peony is in beautiful transparent black ink using much of the technique of dripping into wet ink. It is a pure scene painted in colors limited to red, white and two types of gold, and is a valuable piece as one of the few extant folding screen paintings by Rinkyō that are known.

(Translated by Barbara Cross)

平成三〇(二〇一八)年度 千葉市美術館の活動

一 展覧会

(一) 企画展(七件)

① 二〇一八年四月六日(金)～五月二〇日(日) 八階展示室・七階第五～七展示室

「百花繚乱列島―江戸諸国絵師めぐり―」

*近年の研究で魅力的な作品が多く見いだされ、再評価が進む仙台・茨城・栃木・名古屋・鳥取など各地方ゆかりの画人たちの作品、上方で制作された版画作品など、江戸後期の日本列島の各地で花開いた美術の諸相を板橋区立美術館の特別協力などにより総合的に紹介した。

(四日間/入場者二一、二七八人)



チラシ



「百花繚乱列島―江戸諸国絵師めぐり―」会場

② 五月三〇日(水)～七月八日(日) 八階展示室・七階第六～八展示室

「岡本神草の時代展」

*大正から昭和にかけての京都画壇で特異な女性像を描き続けた日本画家・岡本神草(一八九四～一九三三)の公立美術館では初となる回顧展。岡本は寡作で知られたうえに、三八歳の若さで亡くなった。本展では数少ない本画を可能なかぎり集め、素描、下図、資料類一〇〇点ほどを加えて画業を紹介するとともに、甲斐庄楠音など同時代に競い合った画家たちの作品や、師にあたる菊池契月の作品を展示した。

(三七日間/七、五〇三人)



チラシ



「岡本神草の時代展」会場

③ 七月二四日(土)～九月九日(日) 八階展示室・七階第五展示室
「木版画の神様 平塚運一展」

*平塚運一(二八九五〜一九九七)は、恩地孝四郎とともに近代日本を代表する創作版画家である。本展は、寄託品に所蔵作品を合わせ、約三〇〇点の作品からその全貌を検証した。平塚運一はその重要性に比して研究が進んでいない作家であり、まとまった規模の展覧会としては約二〇年ぶりの大回顧展となった。

(五六日間/九、八四八人)



チラシ



「木版画の神様 平塚運一展」会場

④九月一日(水)〜十一月一日(日) 八・七階展示室
「1968年―激動の時代の芸術」

*二〇世紀後半、現代美術にとっても転換点となった一九六八年の芸術状況を、ちょうど五〇年が経過した二〇一八年の時点から回顧する展覧会。現代美術を中心にデザイン、建築、演劇、舞踏、音楽、映画、漫画にも視野を広げ、作品のみならず映像や写真を交え、この熱い時代の美術を多角的に展覧した(二〇一八年美連協大賞・大賞受賞)。

(五二日間/一〇、五三〇人)



チラシ



「1968年―激動の時代の芸術」会場

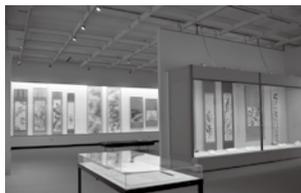
⑤十一月二三日(金・祝)〜二〇一九年一月一四日(月・祝) 八階展示室・七階第六〇八展示室
「生誕一三五年 石井林響展―千葉に出づる風雲児」

*石井林響(一八八四〜一九三〇)は現在の千葉市に生まれた、千葉ゆかりの日本画家。橋本雅邦に入門、若くして頭角をあらわし、歴史画から田園風俗画、南画など画風を大きく展開させながら、昭和初期にかけて活躍したが、画壇への刺激や示唆と房総の人々にも大きな存在感を遺して急逝した。画業の全容を振り返り、文人画への傾倒などを通じて「野人林響」が追い求めた理想の世界を探る。千葉県立美術館での回顧展以来約三〇年が経ち、新たな資料と視点を交えて、その魅力をあらためて広く紹介した。

(四六日間/六、六四〇人)



チラシ



「生誕135年 石井林響展―千葉に出づる風雲児」会場

⑥二月二〇日(日)〜三月三日(日) 八階展示室・七階第五展示室
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展―BIBで出会う絵本のいま」

*二年に一度スロヴァキア共和国の首都で開催される「ブラティスラヴァ世界絵本原画展(BIB)」。本展では二六回目の開催となるBIB2017から、グランプリをはじめとする受賞作品および日本からの出品作品を中心に紹介した。

(四二日間/七、九一四人)



チラシ



「プラティスラヴァ世界絵本原画展—BIBで会おう絵本のいま」会場

⑦三月九日(土)～二十九日(金) 一階さや堂ホール、八階展示室、九階市民ギャラリー、一一階講堂

「第50回記念千葉市民美術展覧会」

*第四八回千葉市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員および公募入選作品八三五点を七部門(日本画・洋画・彫刻・工芸・書道・写真・デザイン)に分けて展示した。
(二日間/一七、二八七人)



チラシ

(二)所蔵品を中心としたテーマ展(六件)

①二〇一八年四月六日(金)～五月二〇日(日) 七階第八展示室

「千葉が生んだ浮世絵の祖 菱川師宣とその時代」

*企画展「百花繚乱列島」にあわせ、「諸国絵師」の房州の例として、菱川師宣とその周辺をとりあげた。

(四日間/一一、三七九人)



「千葉が生んだ浮世絵の祖 菱川師宣とその時代」会場

②五月三〇日(水)～七月八日(日) 七階第五展示室
「浮世絵黄金期からの展開」



「浮世絵黄金期からの展開」会場

*企画展「岡本神草の時代展」にあわせ、神草たちも学んだ肉筆浮世絵美人画を、喜多川歌麿《納涼美人図》をはじめとする所蔵・寄託品と板橋区立美術館の所蔵品によって紹介した。

(三七日間／七、七〇七人)

③七月一日(土)～九月九日(日) 七階第六～八展示室

「旅—ちよつとそこまで、遠くまで」

*企画展「平塚運一展」にあわせて開催。旅をこよなく愛した平塚運一にちなみ、旅をテーマに所蔵品を中心に幅広い分野の作品を展示した。夏休み期間であり、展示および関連イベントには若年層向けの試みも多く盛り込んだ。

(五六日間／一〇、〇〇六人)



「旅—ちよつとそこまで、遠くまで」会場

④二月三日(金・祝)～二〇一九年一月一四日(月・祝) 七階第五展示室
「林響の周辺」

*企画展「石井林響展」にあわせ、林響が影響を受けた江戸時代の文人画や同時代の絵画、そして林響に感化された千葉の弟子たちなど、林響周辺の画家と作品を紹介した。

(四六日間／六、七二八人)



「林響の周辺」会場

⑤二月二〇日(日)～三月三日(日) 七階第六～八展示室

「新収蔵作品展」

*近年収集した作品を紹介した。

(四二日間／八、〇四二人)



「新収蔵作品展」会場

⑥三月九日(土)～三十一日(日) 七階展示室

「房総ゆかりの作家たち 特集：銅版画家・深沢幸雄を偲ぶ」

*同時開催の「千葉市民美術展」にあわせ、千葉の美術界に足跡を残した作家たちによる多様な作品を展示したほか、二〇一七年に逝去した銅版画家・深沢幸雄の業績を回顧した。

(二三日間／一、七五六人)



「房総ゆかりの作家たち 特集：銅版画家・深沢幸雄を偲ぶ」会場

二 展覧会関連講演会およびイベント等(二三件)

〈百花繚乱列島〉

①二〇一八年四月二二日(土) 一一階講堂(参加者九五八人)

講演会 「尾張名古屋は西か東か？」

講師 神谷浩(名古屋博物館副館長)

②五月五日(土・祝) 一階さや堂ホール(参加者約三〇〇人)

「千葉のうまいもん！市」



「千葉のうまいもん！市」より

③五月二二日(土) 一一階講堂(参加者七〇人)

講演会 「地方絵師の熱情―「仙台四大画家」の江戸と西国―」

講師 内山淳一(仙台市博物館副館長)

〈岡本神草の時代展〉

④六月二日(土) 一一階講堂(参加者九七人)

講演会 「岡本神草の夢と現」

講師 上園四郎(笠岡市立竹喬美術館館長)

〈平塚運一展〉

⑤七月三〇日(月) 七・八階展示室(参加者一三二人)(六一③参照)

「わくわく親子デー」

⑥八月一九日(日) 一階さや堂ホール(参加者九五〇人)

特別企画 「美術館で緑日気分!!」

参加・協力団体 花輪茶之介(飴細工職人)、千葉市埋蔵文化財調査センター、千葉市科学館ボランティア、WICANプロジェクト、千葉大学総合安全衛生管理機構、ヤックス、千葉県保険医協会、千葉市民ギャラリー・いなげ、当館ボランティア他



「美術館で緑日気分!!」会場



ギャラリーツアーの様子

⑦八月二十六日(日) 一一階講堂(参加者四〇人)

スペシャル講座「小さな木版画―木口木版画の魅力」

講師 長島充(画家・版画家/日本版画協会会員)



スペシャル講座「小さな木版画―木口木版画の魅力」の様子

〈1968年〉

⑧九月二十九日(土) 一一階講堂(参加者六〇人)

講演会とパフォーマンス「し・C・4―ガリバー一九六八を語る」

講師 シュウゾウ・アヅチ・ガリバー(美術家)

パフォーマンス シュウゾウ・アヅチ・ガリバー、荒木悠、Lily Shui



講演会とパフォーマンス「し・C・4―ガリバー1968を語る」より

⑨一〇月六日(土) 一一階講堂(参加者一一一人)

講演会「一九六八年前衛の終焉 美共闘廃墟からの出発」

講師 堀浩哉(美術家)

⑩一〇月二〇日(土) 一一階講堂(参加者九九人)

講演会「サイケのHAMANO」サイケとその後の世界を語る」

講師 浜野安宏(ライフスタイルプロデューサー)



講演会「サイケのHAMANO、サイケとその後の世界を語る」より

⑪一〇月二七日(土) 一一階講堂(参加者六五人)

映画上映会「略称連続射殺魔」(監督 足立正生、一九六九年)

⑫十一月一日(木)〜二日(日) 一階さや堂ホール(参加者一、八四六人)

さや堂ホール展示プロジェクト ハナムラチカヒロ個展「地球の告白」

⑬十一月四日(日) 一一階講堂(参加者一三六人)

映画上映会「新宿泥棒日記」(監督 大島渚、一九六九年)

⑭十一月四日(日) 一一階講堂(参加者三六人)

第一部 レクチャー「まなざしのデザイン」

講師 ハナムラチカヒロ(さや堂ホール展示プロジェクト出品作家)

第二部 トーク「これからの地球のことを」

ゲスト 鎌田東二(宗教学者)

⑮ 二月一日(日) 一階さや堂ホール(参加者七六人)

パフォーマンス「地球に捧げる回転」

パフォーマー ハナムラチカヒロ、Emine 他



パフォーマンス「地球に捧げる回転」より

〈石井林響展〉

⑯ 二月二日(日) 一一階講堂(参加者四六人)

講演会 「石井林響と房総の支援者たち」

講師 堀内瑞子(城西国際大学水田美術館学芸員)

⑰ 二〇一九年一月五日(土) 八階展示室入口

新春の獅子舞

出演 登渡神社登戸神楽囃子連



新春の獅子舞

⑱ 二月二日(土) 一階さや堂ホール(参加者二五〇人)

「新春 千葉のうまいもん!市」



「新春 千葉のうまいもん!市」会場

〈ブラテイスラヴァ世界絵本原画展〉

⑲ 二月三日(日) 一階さや堂ホール(参加者一〇五人)

平成三〇年度県民芸術劇場公演 「千葉交響楽団メンバーによる弦楽四重奏『音楽で楽しむ世界の旅』」

出演 千葉交響楽団 荒巻美沙子(バイオリン)、下城瑠五子(バイオリン)、春木英恵(ビオラ)、松本ゆり子(チェロ)

⑳ 二月一日(日) 一一階講堂(参加者一〇七人)

出品作家によるトークイベント 『ひまなこなべ』ができるまで」

講師 といかや(絵本作家)

㉑ 二月一六日(土) 一階さや堂ホール(参加者一六六人)

さや堂ナイトプログラム 「HIRUKO 水の祀り」

映像 飯田将茂(映像作家)／舞踏 最上和子(原初舞踏家)

三 市民美術講座

マルシェ参加店舗 豆 nakano × WICAN(コーヒー)・HELLO GARDEN(ミルク)・Thymons lab.(フード)・菓子工房のあ(菓子)・boulangerie dodo(パン)・wine stand pedro(ワイン)・齊藤ぶどう園(ワイン)・千葉陶芸工房(陶芸、ジュエリー、ガラス)



© photo by Hiroyasu Daido
さや堂ナイトプログラム
「HIRUKO 水の祀り」より

②二月一七日(日) 一階講堂(参加者五三人)

講演会 「いま気になる絵本の国イラン」

講師 愛甲恵子(ペルシャ語翻訳家)

③二月二三日(土) 一階講堂(参加者一六〇人)

出品作家によるトークイベント「荒井良二さんの絵本ができるまで」

講師 荒井良二(絵本作家)、広松健児(編集者)



出品作家によるトークイベント「荒井良二さんの絵本ができるまで」より

①二〇一八年四月二八日(土) 一階講堂(参加者八二人)

「6つのキーワードでたどる百花繚乱列島」

講師 松岡まり江(当館学芸員)

②五月一三日(日) 一階講堂(参加者五〇人)

「菱川師宣と浮世絵の誕生 房州から江戸へ」

講師 田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

③六月九日(土) 一階講堂(参加者六八人)

「東京画壇と京都画壇」

講師 河合正朝(当館館長)

④六月二三日(土) 一階講堂(参加者五四人)

「大正の青年たちが目指したものー国画創作協会、草土社そしてMAVOー」

講師 藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)

⑤八月四日(土) 一階講堂(参加者八三人)

「木版画の神様…平塚運一の人と作品」

講師 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

⑥九月八日(土) 一階講堂(参加者七七人)

「平塚先生こんにちは…平塚運一とその弟子たち」

講師 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

⑦ 二月一六日(日) 一階講堂(参加者六三人)

「石井林響に惚れ直す―林響の愛したものとともに―」

講師 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)

⑧ 二〇一九年二月二日(土) 一階講堂(参加者二二人)

「BIB参加作品に見る、絵本づくりとそのひみつ」

講師 山根佳奈(当館学芸員)

四 講師の派遣による講座・各種委員等(二三件)

(一) 講師派遣

① 二〇一八年四〜九月(期間中一五回) 千葉大学(参加者約五〇人)

普通教育科目「博物館資料論C」

ゲストティーチャー 水沼啓和(当館主任学芸員)

② 四月二二日(土) 千葉市生涯学習センター(参加者八九人)

生涯学習アカデミーちば第四期「日本美術の見方」

講師 河合正朝(当館館長)

③ 五月六日(日) あべのハルカス美術館(参加者七七人)

「浮世絵の新時代―春信と錦絵の誕生」

講師 田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

④ 五月三一日(木) 千代田区立日比谷図書文化館(参加者四四人)

「千代田区×東京ステーションギャラリー」夢二繚乱」展関連講演会 ジャーナリズムと竹久夢二」

講師 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

⑤ 七月二八日(土) 千葉市稲毛図書館(参加者二三人)

「美術講座 木版画の魅力〜木版画の神様平塚運一の魅力に迫る〜」

講師 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

⑥ 八月一九日(日) 佐川美術館(参加者二七〇人)

「生誕一〇年 田中一村展 記念講演会」

講師 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)

⑦ 八月二六日(日) 千葉市文化センター(参加者五五人)

平成三〇年度文化芸術普及事業 第一六回千葉市芸術文化新人賞「江上越個展

対話四千年」

ギャラリートーク・対談 畑井恵(当館学芸員)

⑧ 九月四日(火) プーシキン美術館、モスクワ(参加者一四〇人)

「Japanese woodblock prints of XVIII century」

講師 田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

⑨ 二〇一九年二月二〇日(日) 越谷産業会館(参加者一〇〇人)

「〜世界が驚いた肖像画を生んだ〜東洲斎写楽」

講師 田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

⑩二月二一、二六、二七日、三月一日(木、火、水、金) 城西国際大学および千葉市美術館(参加者二人)
「ミュージアムと教育」

講師 山根佳奈(当館学芸員)

(二)各種委員等

①二〇一八年四月～二〇一九年三月 文化庁
文化審議会

臨時委員 田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

②四月一五日(日)、五月一日(火)、五月二九日(火)、八月三日(金)、八月二一日(火)、九月七日(金)、一〇月一六日(火)、二〇一九年一月七日(月)、二月一八日(月) 山崎製パン株式会社総合クリエイションセンター(市川市)

収蔵作品展示

展示指導 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)

③七月一九日(木)、二〇一九年三月一二日(火) 印西市役所(印西市教育委員会)
平成三〇年度印西市文化審議会

委員 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

五 外部機関誌等への執筆(三六件)

*前号出稿後に確認されたものを含む

①西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)(共同執筆)「近代日本版画家名覧(一九〇〇―一九四五) 戦前に版画を制作した作家たち(一九)」『版画堂』119、二〇一八年三月、六九―七八頁

②畑井恵(当館学芸員)「民族藝術学の現場 Passage Tells: Shibuya―物語をまちの声」『民族藝術』Vol. 34、二〇一八年三月、一七四―一七五頁

③松岡まり江(当館学芸員)「ランダム・ハウス 特別寄稿 細川林谷―愛石と旅」『書道界』第三〇巻第四号(通巻三四一号)、二〇一八年四月、三四―三五頁

④松岡まり江(当館学芸員)「百花繚乱列島 江戸諸国絵師めぐり 1 仙台ゆかりの画家 菅井梅閑 故郷への思い伝える」『千葉日報』二〇一八年四月二〇日、一〇面

⑤松岡まり江(当館学芸員)「ぎやらいいモール」『読売新聞』二〇一八年五月一日(夕刊)、七面

⑥松岡まり江(当館学芸員)「百花繚乱列島 江戸諸国絵師めぐり 2 尾張出身の田中訥言 故郷が生んだ代表作」『千葉日報』二〇一八年五月八日、四面

⑦河合正朝(当館館長)「わが愛する三点」『國華清話会』会報』第三一号、二〇一八年五月一五日、一二頁

*第三二号、一九頁に「追記」掲載。

⑧松岡まり江(当館学芸員)「百花繚乱列島 江戸諸国絵師めぐり 3 滋賀・大津市の紀楳亭 歌舞伎とのコラボ!」『千葉日報』二〇一八年五月一五日、四面

⑨松岡まり江(当館学芸員)「百花繚乱列島 江戸諸国絵師めぐり 4 名古屋の北斎派・牧墨僊 試行錯誤し銅版画制作」『千葉日報』二〇一八年五月一六日、五面

⑩藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)「岡本神草の時代展 1 一躍時代のトップに」『千葉日報』二〇一八年六月一六日、四面

⑪藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)「岡本神草の時代展 2 宗教絵画の構図採用」『千葉日報』二〇一八年六月二二日、四面

⑫藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)「岡本神草の時代展 3 一争争ったライバル」『千葉日報』二〇一八年六月二六日、四面

⑬西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)(共同執筆)「近代日本版画家名覧(一九〇〇―一九四五) 戦前に版画を制作した作家たち(二〇)」『版画堂』120、二〇一八年六月、八一―九八頁

⑭西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)「木版画の神様 平塚運一展上 感性と技結実の逸品」『千葉日報』二〇一八年八月七日、四面

⑮西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)「木版画の神様 平塚運一展中 黒と白の骨太な構成」『千葉日報』二〇一八年八月二二日、五面

⑯西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)「木版画の神様 平塚運一展下 78歳円熟の作品世界」『千葉日報』二〇一八年八月一九日、五面

⑰水沼啓和(当館主任学芸員)「展覧会紹介 1968年・激動の時代の芸術」『美連協ニュース』No. 139、二〇一八年八月、一六頁

⑱西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)(共同執筆)「近代日本版画家名覧(一九〇〇―一九四五) 戦前に版画を制作した作家たち(二一)」『版画堂』121、二〇一八年九月、七九―九二頁

⑲水沼啓和(当館主任学芸員)「1968年 激動の時代の芸術」展上 万博機に未来志向の波」『読売新聞』(千葉版)二〇一八年一月一七日、三〇面

⑳水沼啓和(当館主任学芸員)「1968年 激動の時代の芸術」展中 横尾梓越えた芸術の冒険」『読売新聞』(千葉版)二〇一八年一月一九日、二四面

㉑水沼啓和(当館主任学芸員)「1968年 激動の時代の芸術」展下 歌で反戦運動被写体に」『読売新聞』(千葉版)二〇一八年一月二三日、二九面

㉒河合正朝(当館館長)「リレーエッセイ66 美術館の自立と「ふるさと納税」」『美連協ニュース』No. 140、二〇一八年一月、一二頁

㉓松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)「生誕135年 石井林響展 千葉に出づる風雲児上 房絵の風土を理想郷に」『千葉日報』二〇一八

年二月二十五日、二面

②4 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)「生誕135年石井林響展 千葉に出づる風雲児 中 21歳、天風ここにあり」『千葉日報』二〇一八年二月二十四日、二面

②5 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)「生誕135年石井林響展 千葉に出づる風雲児 下 ほぼ実物大のキリン!?」『千葉日報』二〇一八年二月二十五日、二面

②6 河合正朝(当館館長)『河合正朝絵画史論集 上巻』中央公論美術出版、二〇一八年二月

②7 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)「『新日本百景版画』について(特集 「奉祝」から「報国」の時代)」『近代画説』第二七号、二〇一八年二月、七四―九七頁

②8 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)(共同執筆)「近代日本版画家名覧(一九〇〇―一九四五) 戦前に版画を制作した作家たち(二二)」『版画堂』122、二〇一八年二月、六九―七八頁

②9 田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)「必見!! 今年の展覧会三〇〇 オーバリン大学アレン・メモリアル美術館蔵 メアリー・エインズワース浮世絵コレクション」初期浮世絵から北斎・広重まで、'莫科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)「必見!! 今年の展覧会三〇〇 没後60年 北大路魯山人

古典復興―現代陶芸をひらく―」『美術の窓』第三八巻第一号通巻四四四号、二〇一九年一月、七〇、一一七頁

③0 山根佳奈(当館学芸員)「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 上 鳥の目で街眺めると……」『読売新聞』(千葉版)二〇一九年二月一日、二六六面

③1 山根佳奈(当館学芸員)「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 上 対象に寄り添う眼差し」『千葉日報』二〇一九年二月一七日、四画

③2 山根佳奈(当館学芸員)「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 中 たんぽぽ春待つ根っこ」『読売新聞』(千葉版)二〇一九年二月一七日、二八画

③3 山根佳奈(当館学芸員)「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 下 木片「カヌー」の大冒険」『読売新聞』(千葉版)二〇一九年二月一日、二六六面

③4 山根佳奈(当館学芸員)「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 下 緻密な構成光るペン画」『千葉日報』二〇一九年二月二三日、二面

③5 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)「初山滋の彫り進みについて(特集 知られざる創作版画)」『版画芸術』No. 183、二〇一九年三月、六五頁

③6 畑井恵(当館学芸員)「民族藝術学の現場 縁と円―つながりゆく芸術祭」『民族芸術』Vol. 35、二〇一九年三月、一五八―一五九頁

六 ワークショップ等(九件)

〈百花繚乱列島〉

①二〇一八年五月五日(土・祝) 一階さや堂ホール(参加者三〇〇人)

「千葉のうまいもん!市 鯉のぼりづくりワークショップ」

講師 田口由佳(当館嘱託員)、ワークショップサポーター(当館短期ボランティア)(九人)



「千葉のうまいもん!市 鯉のぼりづくりワークショップ」より

②五月二二、一三日(土、日) 千葉市内(参加者五一一人)

ファミリープログラム「わんことお散歩!」

講師 諸橋和子(アーティスト)/セインズベリー日本藝術研究所企画・研究員



ファミリープログラム「わんことお散歩!」より

〈平塚運一展〉

③七月三〇日(月) 七・八階ロビーおよび展示室

―1 「わくわく親子デー わくわく探検号II」(参加者二六人)

講師 田口由佳(当館嘱託員)、ワークショップサポーター(当館短期ボランティア)(七人)

―2 「わくわく親子デー 旅の仲間を作ろう」(参加者五二人)

講師 山根佳奈(当館学芸員)、ワークショップサポーター(当館短期ボランティア)(四人)



「わくわく親子デー 旅の仲間を作ろう」より

―3 「わくわく親子デー 木版画はかせと行くギャラリートツアー」(参加者一三人)

講師 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

〈平塚運一展・ちよつとそこまで遠くまで展〉

④八月二一日(土・祝) 九階講座室(参加者二〇人)

山の日ワークショップ 「行った山/行きたい山/空想の山」

講師 山下麻衣+小林直人(現代美術家)



山の日ワークショップ「行った山／行きたい山／空想の山」より

⑤八月一九日(日) 一階さや堂ホール、七・八階展示室(参加者四八人)

「美術館で縁日気分!! 旅の仲間をつくろう」

講師 田口由佳(当館嘱託員)、ワークショップサポーター(当館短期ボランティア)(八人)

⑥八月二三、二四日(木、金) 七・八階展示室(参加者五八人)

「中学生のためのギャラリークルーズ'18」

講師 鑑賞リーダー(美術館ボランティア)、山根佳奈(当館学芸員)、田口由佳(当館嘱託員)



「中学生のためのギャラリークルーズ'18」より

〈石井林響展〉

⑦二月一五日(土) 一二階講堂(参加者一七人)

「素材であそぶ vol.2 箔」

講師 坪田純哉(日本画家)、田口由佳(当館嘱託員)



「素材であそぶ vol.2 箔」より

〈ブラティスラヴァ世界絵本原画展〉

⑧二〇一九年一月二〇日(日) 七階ロビー(参加者一二組二四人)

ファミリーワークショップ「どんどんつなげよう! ヘンテコいきもの」

講師 藤田百合(エデュケーター)



ファミリーワークショップ「どんどんつなげよう! ヘンテコいきもの」より

⑨ 一月二六日(土)、二月三、九、二四日(日、土、日)、三月二、三日(土、日) 七階ロビー(参加者 三七人、三三人、二四人、五二人、四四人、九四人)

ファミリーワークショップ「どんどんつなげよう! ヘンテコいきものく絵本編」

講師 田口由佳(当館嘱託員)、畑井恵(当館学芸員)、ワークショップサポーター(当館短期ボランティア)(一六人)



ファミリーワークショップ「どんどんつなげよう! ヘンテコいきものく絵本編」より

七 学芸員によるギャラリートーク(*は団体対応)

〈百花繚乱列島〉

① 二〇一八年四月二一日(水) (参加者六七人)

担当 松岡まり江(本館学芸員)

〈岡本神草の時代展〉

② 五月三〇日(水) (参加者五二人)

担当 藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)

〈平塚運一展〉

③ 七月一八日(水) (参加者五〇人)

担当 西山純子(当館上席学芸員兼学芸第三グループマネージャー)

〈1968年〉

④ 九月一九日(水) (参加者四五人)

担当 藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)

⑤ 一月八、一〇日(木、土) (参加者三〇人、二五人)*

担当 藁科英也(当館上席学芸員兼学芸第一グループマネージャー)

〈石井林響展〉

⑥ 一月二八日(水) (参加者三七人)

担当 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)

⑦ 一月二九日(木)、二月一四、二六日(金、水) (参加者各一五人)*

担当 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)

〈ブラティスラヴァ世界絵本原画展〉

⑧ 二〇一九年二月三日(水) (参加者三四人)

担当 山根佳奈(当館学芸員)

〈所蔵作品展 房総ゆかりの作家たち〉

⑨ 三月二六日(火) (参加者三七人)*

担当 松尾知子(当館上席学芸員兼学芸第二グループマネージャー)

八 鑑賞補助ツールの制作と活用(七回/三、七二七部)

*企画展にあわせ、主に若年層や美術の知識の少ない来館者を対象として、ワークシートやセルフガイドを制作し活用した。

「百花繚乱列島」鑑賞ツール(対象 小学生以上)

二〇一八年四月 三一〇部/五月 三五〇部



「岡本神草の時代展」鑑賞ツール(対象 小学生以上)

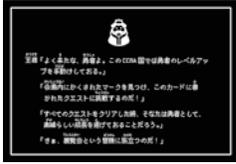
六月 三五〇部/七月 一五〇部

「岡本神草の時代展」スタンプラリー(対象 中学生以上)

六月 三〇〇部/七月 一二〇部

「平塚運一展」鑑賞ツール(対象 小学生以上)

七月 七二部/八月 三三三部/九月 一〇三部



「1968年」鑑賞ツール(対象 小学生以上)

一〇月 六〇〇部/十一月 六〇〇部



「石井林響展」鑑賞ツール(対象 小学生以上)

十二月 八〇部/二〇一九年一月 九〇部



「プラティスラヴァ世界絵本原画展」(対象 小学生以上)

二月 二八〇部

九 学校との連携事業

(一) 学校団体の受け入れ

①「小・中・特別支援学校鑑賞教育推進事業」(合計一九校、一、二〇三人)

* 遠隔校などの来館を促進するため、美術館が送迎バスを用意し鑑賞プログラムを提供。

「百花繚乱列島」(一校、三八人)

「岡本神草の時代展」(三校、二〇五人)

「平塚運一展」(二校、一〇四人)

「1968年」(六校、四三三人)(一〇―①参照)

「石井林響展」(四校、二三七人)

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(三校、一八六人)

②右記以外の方法で来館した児童・生徒の団体受け入れ(小学校七校、三二三人)

* ①と同様のプログラムを提供。

「平塚運一展」(二校、一二四人)

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(六校、一八九人)

(二) 職場体験学習の受け入れ(一八校、四〇人)

(三)「千葉市図工・美術担当教諭鑑賞一日研修」 八月二三日(木)実施(参加者一〇人)

講師 小西悟士(さいたま市立本太中学校教員)、牧井正人(福井県立美術館アトナビゲーター)

(四) 千葉市教育研究会中学校造形部会美術館活用グループとの連携

中学校美術部合同鑑賞会の実施 七月二五、二六日(水、木)(五校、参加者の六六七人)

* 二五日、準備会。二六日、鑑賞会。

(五) 千葉大学との連携

「千葉大学普遍教育教養展開科目『展示をつくるA』『博物館実習B』企画展示(参加者一六人)

講義 六月三日(日)～七月一五日(日)(七回)

展示 七月二八、二九日(土、日)

実施 七月三二日(火)～八月五日(日) 九階市民ギャラリー(入場者二四六人)

「二六人の千葉大生が選んだ千葉市美術館コレクション 一七番目のしてん」

一〇 アウトリーチプログラム

* 千葉大学や教育機関、地域NPOとの連携事業である「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WICAN)」の活動。

①「1968年」展における鑑賞教育プロジェクト(九―(一)―①参照)

* 大学生(参加者二人)による鑑賞ファシリテーター

協力校 千葉市立権名小学校(参加者四六人)

実施 二〇一八年九月二六日(水)

②「一緒につくって一緒に食べて 食を通した共生への試み」

上映会&パーティー 二〇一九年三月三日(日) NEW FOLKS studio & gallery

(参加者六〇人)

成果展示 三月九日(土)〜二四日(日) 七階ロビー

講師 中山晴奈(フードデザイナー)



「一緒につくって一緒に食べて 食を通した共生への試み」会場

一 一 県内外の美術館・博物館との連携

(一) 近隣美術館連絡会加盟館(千葉市美術館、千葉県立美術館、記念美術館、佐倉市立美術館、成田山書道美術館)の活動

連絡会議 七月五日(木) 成田山書道美術館

(二) 米国オーバリン大学アレン・メモリアル美術館所蔵メアリー・エインズワース浮世絵コレクションの日米相互の活用と専門知識を通じた交流事業。

*文化庁補助金活用事業。

一 二 ボランティア活動

(一) ギャラリートーク(合計 定例三四回、自主三八回)のべ参加者八七九人

* 展覧会の開催ごとに行った毎週水曜日の定例ギャラリートークのほか、各ボランティアが自主的に行った不定期のギャラリートークについて記載。

「百花繚乱列島」(定例五回、自主七回)参加者二二二人

「岡本神草の時代展」(定例五回、自主六回)参加者一五五人

「平塚運一展」(定例七回、自主六回)参加者一三二人

「1968年」(定例七回、自主九回)参加者一四四人

「石井林響展」(定例五回、自主七回)参加者一二二人

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(定例五回、自主三回)参加者九四人

(二) 鑑賞リーダー活動(四六回)のべ活動者三一九人

* 「小・中・特別支援学校鑑賞教育推進事業」等児童・生徒の団体受け入れ(九一(二)への協力活動。学校側の希望に応じて、少人数グループでの鑑賞に対応する。児童生徒のグループを案内する鑑賞リーダーとして、子どもの視点を前提に内容・みどころなどを解説。対応したボランティアのべ人数を記録。

「百花繚乱列島」(二回一三人)

「岡本神草の時代展」(七回五一人)

「平塚運一展」(一五回九四人)

* 「中学生のためのギャラリークルーズ18」(六一⑥)、「おしえて! 『はてな先生』」(二二(三)③)、「千葉市図工・美術担当教諭鑑賞一日研修」(九一(三)、一回二人)を含む。

「1968年」(八回六二人)

「石井林響展」(六回三三人)

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(九回六一人)

(三) ワークショップの企画・準備

① 二〇一八年五月五日(土・祝) 一階さや堂ホール

「千葉のうまいもん! 市 鯉のぼりづくりワークショップ」(六―①)

② 七月二十八日(土) 七階ロビー(参加者三四人)

立ち寄りワークショップ「木版画多色摺り」



立ち寄りワークショップ「木版画多色摺り」の様子

③ 八月八日(水)〜二二日(水) 七・八階展示室(参加者七三人)

「おしえて! 『はてな先生』」

④ 八月一九日(日) 一階さや堂ホール

「美術館で縁日気分!! 旅の仲間をつくらう」(六―⑤) / 「美術館で縁日気分!! 版画摺体験」(参加者一六三人)

⑤ 八月二三、二四日(木、金) 七・八階展示室

「中学生のためのギャラリークルーズ」(六―⑥)

⑥ 一月四、一日(日) 九階講座室(参加者三人)
「年賀状を多色摺木版画でつくらう」

⑦ 二〇一九年二月二七日(日) 一階プロジェクトルーム(参加者二八人)
「木版画多色摺体験」

(四) その他

各種展覧会における講演会や市民美術講座に積極的に参加し、スキル向上に役立てた他、有志によるグループ「もくもく会」は版画技術の向上を目指し、練習会を行った。

一三 出版活動

(一) 展覧会図録(五冊)および主な掲載論文

① 『百花繚乱列島―江戸諸国絵師めぐり―』 編集 松岡まり江(千葉市美術館) / 翻訳 ミウォシユ・ヴォズニ / 発行 千葉市美術館
成澤勝嗣 「縁は異なるもの? ―寄合書画制作の諸相を読む」
寺澤慎吾 「コラム」菅井梅関と「舊城朝鮮古梅之図」
藤和博 「コラム」水戸と江戸 「みずがつなぐ」画をはぐくむ地とたしなむ地」

本田論 「コラム」近世下野の画人たち―高久靄屋・小泉斐・戸田忠翰」

神谷浩 「コラム」「名古屋画壇」のエッセンス」

山下真由美 「コラム」江戸時代における鳥取画壇の特質」

久保佐知恵「コラム」細川林谷——常人に非ざる人」

松岡まり江「百花繚乱列島をめぐる——三つのオプショナルツアー」

松岡まり江(章解説・絵師略伝・作品解説)

松岡まり江(編)(絵師系図・主要参考文献)



②『木版画の神様 平塚運一展』編集 西山純子(千葉市美術館)／発行 千葉市美術館

西山純子「遡行する人 平塚運一小論」

西山純子(章解説・作品解説)

西山純子(編)(平塚運一略年譜・平塚運一主要参考文献リスト)



③『1968年—激動の時代の芸術』編集 水沼啓和(千葉市美術館)、小松健一郎(北九州市立美術館)、川谷承子(静岡県立美術館)、望月麻美子(翻訳)

嶋田美子／制作・発行 千葉市美術館、北九州市立美術館、静岡県立美術館

水沼啓和「1968 現代美術の転換点」

ウィリアム・マロツティ(翻訳 嶋田美子)「代々木から一駅はなれて 日本の

1968年における新宿、そして暴力と曖昧さの政治性」

〈A 激動の1968年〉

水沼啓和「1968年の社会と文化」

水沼啓和「美術界の1968」

〈B 1968年の現代美術〉

水沼啓和「千円札裁判と「反戦と解放展」

水沼啓和「環境芸術とインターメディア」

小松健一郎「日本万国博覧会」

小松健一郎「反博の動きと万博破壊共闘派」

川谷承子「トリックス・アンド・ヴィジョン」

〈C 領域を越える芸術〉

水沼啓和「アンダーグラウンドの隆盛—演劇・舞踏・実験映画」

川谷承子「イラストレーションの氾濫」

水沼啓和「漫画と芸術」

水沼啓和「サイケデリックの季節」

〈D 新世代の台頭〉

川谷承子「『プロヴオーク』の登場」

川谷承子「もの派の台頭」

水沼啓和「概念芸術の萌芽」

水沼啓和、小松健一郎、川谷承子(作品解説)

〈関連エッセイ・インタビュー〉

北井一夫(聞き手 川谷承子)「バリケード」と〈三里塚〉

シュウゾウ・アツチ・ガリバー「1960年代(Just that much)」

林静一「一九六八年から一九七〇年まで。」

田名網敬一(聞き手 水沼啓和)「回想―キラリ・ジョーズ」

羽永太朗「共犯者と言わしめた写真家・羽永光利」

嶋田美子「現代思潮社・美学校とポスト1968年」

松井茂「イソ、サム、トーノの《建築空間》―福岡相互銀行大分支店にみる建築と美術の協働」

阪本裕文「松本俊夫と1968年」

石崎尚「ネットワークとしての万博破壊共闘派」

梅津元「出来事と記録―現前／想起」

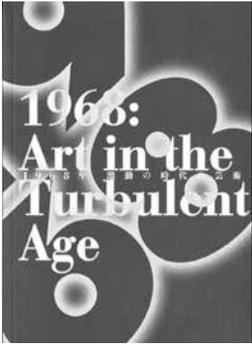
川谷承子「1968年の石子順造 日本現代美術の底流」

「年譜」

William Marotti「One Stop from Yoyogi: Shinjuku and the Politics of Violence and Ambiguity in Japan's 1968」

William Marotti「One Stop from Yoyogi: Shinjuku and the Politics of Violence and Ambiguity in Japan's 1968」

Ambiguity in Japan's 1968」



④『生誕一三五年 石井林響展―千葉に出づる風雲児』 編集 松尾知子／翻訳 マーサ・M・マクリントク／発行 美術出版社

松尾知子「石井林響 千葉に出づる風雲児」

松尾知子(章解説・作品解説)

松尾知子「コラム 修善寺の青春／支えた人々 画会について／雅邦塔が建

つ／天竜二俣へ／総南行／《林の中》 帝展推薦となる／林響の愛したものと

ち／石濤《黄山八勝画冊》を持つ(一)／石濤《黄山八勝画冊》を持つ(二)／画

房・白閑亭」

石井林響「総南行」(再録)

橋本関雪「石井君に就て」(再録)

石井林響「関雪氏の『南画への道程』を読む」(再録)

石井林響(林響書簡)

松尾知子(編)(年譜・石井林響自用印・参考文献)



⑤『ブラティスラヴァ世界絵本原画展―BIBで出会う絵本のいま』 編集

泉田佳代(久留米市美術館)、飯島礼子(奈良県立美術館)、山根佳奈(千葉市美

術館)、鈴木日和(小杉放菴記念日光美術館)、松原知子(うらわ美術館)、広松

由希子／発行 久留米市美術館、奈良県立美術館、千葉市美術館、小杉放菴記

念日光美術館、うらわ美術館、美術館連絡協議会

ヴィエラ・アノシキノヴァー「BIBは国をつなぐ」

Viera Anoskinova「BIB Connects Nations」

広松由希子「つぶやき」に耳を傾けるー絵本イラストレーションの力

山根佳奈「BIB国際シンポジウムーイラストレーションをめぐる今日の課題の追究、そして理解と交流のために」

張明舟(翻訳協力 野坂悦子)「中国の創作絵本ー近年の発展」

アリー・ブーザリー(翻訳 愛甲恵子)「イランの子ども向けの絵本」

タニヤ・ステルンソン(翻訳 波多野苗子)「展覧会の絵」

申明浩「今日までの韓国絵本の歩み」

飯島礼子「イラストレーションの力ーBIB2017を通して」

鈴木日和「絵本が私たちに届くまでー原画の制作過程に触れて」

ルトウイヒ・フォルベータ、ナルゲス・モハンマディ、荒井真紀、キムジミン、

アンナ・デスニツカヤ、ダニエラ・オレイニーコヴァー、ハンネ・バルトリン、

オフラ・アミット、ミロコマチコ、イスラエル・バロン、ロマナ・ロマニーシ

ンとアンドリー・レシヴ、ペテル・ウフナル、スヴェトザール・コシツキー、

あずみ虫、荒井良二、石黒亜矢子、きくちちき、こしだミカ、スズキコージ、

tupera tupera、どいかや、中野真典、町田尚子、皆川明、村山純子、ヨシタケ

シンスケ、蔡皋(ツアイカオ)、翱子(アオズ)、熊亮(シヨウリャン)、徐一文

(シイイーウェン)、ガザール・ビグデルー、アリレザ・ゴルドウズイヤン、

ファルシード・シャファイイー、リオラ・グロスマン、ヒラ・ハヴキン、ヴァ

リ・ミンツイ、リジョンホ、リミナ、パクジオンチェ(海外作家編集・翻訳

飯島礼子、泉田佳代、広松由希子、山根佳奈)「作家アンケート」

Senka Valhovi「Fanel Hanan Diaz」(審査員コメント)」

Mingzhou Zhang「Recent Development of Original Picture Books in China」

Ali Boozari「Children's Picture Book in Iran」

Tanya Sternson「Pictures at an Exhibition」

「年譜 BIBと絵本にまつわるできごと」

「地図」



(二)展覧会の出品目録

*企画展・所蔵作品展ごとに発行。

(三)定期刊行物

①美術館ニュース『C'n』第八六〜八九号

②千葉市美術館研究紀要『採蓮』第二一号 ※掲載論文等は左記の通り

堀浩哉「講演会「一九六八年前衛の終焉 美共闘廃墟からの出発」

山根佳奈「ジャポニスムを通して浮世絵を見る(仮称)」展のための作品調査報告」

松岡まり江「メアリー・エインズワース浮世絵コレクションー資料にみる収集の過程と黎明期の日本・欧米における浮世絵愛好」

一四 作品の収集

(一) 購入(二件)

ジョルジュ・ピゴー《稲毛海岸》、《稲毛・五月の節句》

(二) 寄贈(二〇〇件)

ジョルジュ・ピゴー《遊郭の仕置き》、同《日光》、同『日本におけるヴィクト

リア女王治世六〇周年記念祭』(石版画集)(以上、清水勲氏寄贈)

石井林響(絵付)《鶴亀図三組盃》、同(原画)《松茸図》、同(原画)《海老図》(以上、石井淳氏寄贈)

石井林響《瓶と枇杷》、同《閑人》、同《水波》、同《鳥》、同《藍采和》(以上、株式会社思文閣寄贈)

田岡春径《温泉場》(日比野秀男氏寄贈)

田中一村《つゆ草にコオロギ》、同《白梅図》、同《珊瑚樹》、同《南天とろうばい》、同《葉菖蒲とヨモギ》、同《山水図 略擬雲林筆意》、同《浅き春》、同《つゆ草》、同《桃華仙境》、同《軍鶏試作》、同《柿》、同《ほおずき》、同

《粟》、同《兜》、同《あばさけ観音》、同《十六羅漢像》、同《夕日》、同《春郊》、同《千葉寺はさ場》、同《千葉寺収穫》、同《千葉寺晩秋》、同《黄昏野

梅》、同《千葉寺麦秋》、同《麦秋図》、同《牛のいる風景》、同《春林茆屋 仿蕪村》、同《さえずり》、同《十六羅漢図》、同《巢ごもり(鶴)》、同《筑波山》、

同《阿蘇草千里》、同《新緑北日向》、同《僻村暮色》、同《日暮れて道遠し》、

同《宝島》、同《木姿》、同・作香筒、同・作木魚(附座布団)、同・作如意、同・撮影「旅の写真(足摺岬、室戸岬、鳴門)」(以上、川村不味氏寄贈)

田中一村・撮影／書写真(千葉風景)および葉書(高橋優香氏寄贈)

花田忠吾《爽秋閑日》、同《初秋の頃》(以上、秋元和雄氏寄贈)

東山魁夷《静晨》、椿貞雄《夏蜜柑に母》、山本正年《花生》、土肥刀泉《紫辰砂花瓶》、同《草禾文花瓶》、同《細口花瓶(たんぽぽ)》、田村耕一《鉄絵

壺》、松井康成《練上辰砂壺》、木村盛伸《鉄絵壺》(以上、綿貫弘一氏寄贈)

山口雪溪《寒山拾得図》、伝狩野永徳《豊干禅師図》、雲谷等益《人物図(寒山)》、狩野探玄齋守元《老子騎牛図》、勝田竹翁《老松鷹図》、狩野昌運《布袋

図》、高崇谷《人物落馬図》、狩野養信《人物図(諸葛孔明像)》、狩野雅信《人物

図(諸葛孔明像)》、狩野立信《三酸図》、狩野梅笑《柿本人麿図》、長谷川雪

齋《天神像》、谷文晁《寒山拾得図》、谷文晁《束带天神像》、谷文晁・依田竹

谷・遠坂文雅《蝶図扇面》、谷文一《墨梅図》、喜多武清《猿回し図》、同《十

二支図卷》、鈴木其一《草花図》、同《直言居士肖像》、伊年印《草花図》、曾我

蕭白《寿老人鹿鶴図》、費漢源《人物図(関羽像)》、方西園《梅に叭々鳥図(喜

上眉梢)》、黒川亀玉(三代か)《鶏図》、熊斐《墨梅図》、源琦《西王母図》、長澤

蘆雪《松図》、円山応震《老師出関図》、呉春《人物図》、岸岱《月に杜鵑図》、

同《山水図》、森狙仙《猿図(封侯図)》、皆川淇園《山水図》、明堂泥江《竹石

図》、浦上春琴《墨梅図》、安西於菟《山水図》、三浦梧門《山水図》、木下逸雲

《草木図(宜男多子図)》、日根対山《荷花図》、平野五岳《墨梅図》、田中訥言

《瓢箪図》、高隆古《人物図(孔子像)》、鶴田卓池《富士山図》、五邨《立花北枝

像》、(不詳)《覺正院大僧正図下絵》、英一蝶《款》《風俗図》、竹仙《梅花書屋

図》、柴田是真《梅雀図》、奥原晴湖《山水図》、村田香谷《花卉図(菊蟹図)》

(以上、折笠溪子氏寄贈)

平塚運一《髪結び》、同《閑日小景》、同《百日草》、同《きつぎ》、同《レ

ース模様 馬》、同《少女の顔》、同《葉牡丹》、同《上野寛永寺の塔》、同

《松江城斜陽》、同《伊豆初鳥》、同《梅》、同《伊豆小下田の富士》、同《奈良

の塔》、同《北松より眺む大山》、同《筑波町道標》、同《ロングビーチ沖》、同《ロスアンゼルス雲の雲》、同《ワシントンDCの古い家》、同《十五夜の富士》、同《青空 ワシントンDC》、同《泰山木の花》、同《ロスアンゼルスミッション》、同《芥子 母と子》、同《黒椅子裸婦》、同《グリーティングカード(一九八八・元旦)》、同《かわせみ》、同《にわとり》、同《瓦》、平塚運一ほか『版画と文芸 虹の小箱』第一号、安利麻愼『詩集 白黒頌 平塚運一木版画に寄す』(以上、伊藤英氏寄贈)

鈴木賢二『いろはかるた』より イ、ハ、ニ、ホ、チ、ヌ、カ、ヨ、ツ、ネ、ナ、ノ、オ、マ、ケ、フ、エ、テ、キ、メ、ミ、エ、ヒ、セ》、同《薄陽―二月頃の情景》、同《田ならし(ふりまんが)》、同《街裏》、同《版画一二ヶ月 三月 街裏、五月 麦、九月 秋立つ、一〇月 収穫、小牛》、同《水あそび(茨城県川島にて)》、同《菊》、同《石切場》、同《高萩炭鉱の町》、同《貌》、同《母と子》、同《見つめる》、鈴木賢二ほか『刻画』No.2、同『刻画』No.3、滝平二郎《農夫》、同《苗しろかき》、同《こやしはこび》(以上、鈴木解子氏寄贈)

深澤索一《築地風景》、齋藤清《作品名不詳(収穫)》、畦地梅太郎《泉岳寺墓所(『東京回顧図会』より)》、恩地孝四郎《上野動物園(『東京回顧図会』より)》、齋藤清《浅草観音堂(『東京回顧図会』より)》、平塚運一《赤坂離宮(『東京回顧図会』より)》、関野準一郎《花魁道中(『日本民俗図譜』より)》、大野麦風《作品名不詳(収穫A)》、同《作品名不詳(収穫B)》(以上、山根貴以子氏寄贈)

恩地孝四郎ほか『東京回顧図会』、前川千帆ほか『日本民俗図譜』(以上、野上とし子氏寄贈)

(三) 寄託(一四三件)

田中一村《蓮図 擬八山人筆意》他

一五 収蔵作品の修復・保存等

(二) 修復(三件)

(二) 所蔵作品のマット装(四四点)

(三) 写真撮影(一六五カット)

(四) 写真の画像デジタル化(三三九件)

* 過去に撮影した所蔵作品のポジフィルムについてデジタル化を行った。

一六 所蔵作品の貸出、特別利用

(二) 作品の貸出(三〇件二〇六点)うち寄託作品五一点

* 平成三〇年度開催(以後の巡回展も含む)について記載。

①「初公開 田中一村の絵画」(岡田美術館、二〇一八年四月―九月)
田中一村《アダンの海辺》一点(寄託作品)

②「特別展 池大雅 天衣無縫の旅の画家」(京都国立博物館、二〇一八年四月―五月)

池大雅《柳溪渡渉図》他二点

③「江戸の戯画―鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」(大阪市立美術館、二〇一八年四月―六月)

『鳥羽絵三國志』他九点

④「浮世絵モダン 深水の美人! 巴水の風景! そして…」(町田市立国際版画美術館、二〇一八年四月―六月/公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム、二月―二〇一九年一月)

エリザベス・キース《狂言図(緑衣の茂山)》他二六点

⑤「第七回鳥居清長忌展覧会 二日間だけの鳥居清長と隅田川の夏展」(回向院念仏堂、二〇一八年五月)

伝溪斎英泉《湯上り美人図》他二点(寄託作品)

⑥「若冲と光瑠」(石川県立美術館、二〇一八年六月―七月)

伊藤若冲《鸚鵡図》他六点(うち寄託作品三点)

⑦「起点としての80年代」(金沢21世紀美術館、二〇一八年七月―一〇月/高松市美術館、十一月―二月/静岡市美術館、二〇一九年一月―三月)

吉澤美香《無題(茶だんす)》他五点

⑧「開館二〇周年特別企画展 生誕二一〇年 田中一村展」(佐川美術館、二〇

一八年七月―九月)

田中一村《椿図屏風》他二六点(うち寄託作品二〇点)、資料一点

⑨「没後五〇年―藤田嗣治展」(東京都美術館、二〇一八年七月―一〇月/京都国立近代美術館、一〇月―十二月)

藤田嗣治《夏の漁村(房州太海)》一点

⑩「竹久夢二版画展」(須坂版画美術館・平塚運一版画美術館、二〇一八年八月―九月)

竹久夢二『児童を謳へる文学』他一七点

⑪「落合芳幾」(太田記念美術館、二〇一八年八月)

落合芳幾《婦女風俗図》他六点(うち寄託作品三点)

⑫「江戸絵画名品展 Masterpieces of Edo paintings and prints」(ブーシキン美術館、モスクワ、二〇一八年九月―一〇月)

呉春《漁樵問答図》他二〇点(うち寄託作品二点)

⑬「長澤蘆雪 ROSETSU Fantastische Bilderwelten aus Japan」(リートベルク美術館、チューリッヒ、二〇一八年九月―十一月)

長澤蘆雪《群仙図屏風》他二点

⑭「田原市制施行一五周年・田原市博物館開館二五周年記念特別展 渡辺華山の神髓」(田原市博物館、二〇一八年九月―一〇月)

渡辺華山《佐藤一斎像画稿 第三〇第七》他一点

⑮「横山華山」(東京ステーションギャラリー、二〇一八年九月―十一月/宮城県美術館、二〇一九年四月―六月/京都文化博物館、七月―八月)
横山華山《富士・天橋立図屏風》一点

⑯「鳥取画壇の祖 土方稲嶺―明月来タリテ相照ラス―」(鳥取県立博物館、二〇一八年一〇月―十一月)

宋紫石『宋紫石画譜』他七点(うち寄託作品三点)

⑰「イサム・ノグチと岡本太郎―越境者たちの日本」(川崎市岡本太郎美術館、二〇一八年一〇月―二〇一九年一月)

イサム・ノグチ《かぶと》他四点(寄託作品)

⑱「特別展 土佐派と住吉派―やまと絵の荘重と軽妙―」(和泉市久保惣記念美術館、二〇一八年一〇月―十二月)

土佐光起《豆鳥図》一点(寄託作品)

⑲「駒井哲郎―煌めく紙上の宇宙」(横浜美術館、二〇一八年一〇月―十二月)
駒井哲郎《フューグ・ソムナンビュール(夢遊病者のフーガ)》他七点

⑳「生誕一一〇年 東山魁夷展」(国立新美術館、二〇一八年一〇月―十二月)
東山魁夷《自然と形象 雪の谷間》他二点(寄託作品)

㉑「辰野登恵子 オン・ペーパーズ」(埼玉県立近代美術館、二〇一八年十一月―二〇一九年一月/名古屋美術館、二月―三月)

辰野登恵子《WORK80-P-18》一点

㉒「扇の国、日本」(サントリー美術館、二〇一八年二月―二〇一九年一月/山口県立美術館、三月―五月)
勝川春章《東扇 三代目大谷広右衛門》他四点

㉓「1968年―激動の時代の芸術」(静岡県立美術館、二〇一九年二月―三月)

娑婆留闍《獄送檄画通信(三)》他九点

*本展覧会は千葉市美術館より巡回(一)―(四)参照。

⑳「Oh! マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー」(兵庫県立美術館、二〇一九年一月―三月)
鬚嘸《若い仲間たち》他一点

㉕「モダンデザインが結ぶ暮らしの夢」展(高崎市美術館、二〇一九年二月―三月/東北歴史博物館、七月―九月/パナソニック汐留ミュージアム、二〇二〇年一月―三月)

イサム・ノグチ《おかめ》他二点(寄託作品)

㉖「河鍋曉斎 その手に描けぬものなし」(サントリー美術館、二〇一九年二月―三月)
河鍋曉斎《観音尊像》一点(寄託作品)

㉗「奇想の系譜展 江戸絵画ミラクルワールド」(東京都美術館、二〇一九年二月―四月)

曾我蕭白《獅子虎図屏風》他二点(うち寄託作品・重要文化財一点)

⑳「山陽新聞創刊一四〇周年記念 岡山県立美術館開館三〇周年記念 江戸の奇跡・明治の輝き―日本絵画の二〇〇年」(岡山県立美術館、二〇一九年三月―四月)

伊藤若冲《鸚鵡図》他二点

㉑「福沢一郎展 このどうしようもない世界を笑いとばせ」(東京国立近代美術館、二〇一九年三月―五月)

福沢一郎《風景》一点(寄託作品)

㉒「東日本大震災復興祈念 伊藤若冲展」(福島県立美術館、二〇一九年三月―五月)

伊藤若冲《乗興舟》他三点(うち寄託作品一点)

(二)写真の貸出、撮影等(特別利用)(八〇件一六六件)
山本鼎《漁夫》他

一七 友の会運営事業

(一)会員数(二〇一九年三月三一日現在)

①一般・ユース会員一、三四六六人

②賛助会員 個人三三人 法人五件

(二)友の会日帰りバスツアー

「眺めのよい場所と美術館を巡る」(鋸山・金谷・長南・市原)
二〇一八年一月三〇日(金)(参加者三九人)

(三)その他のイベント

①「特別鑑賞会『平塚運一展』及び館長を囲むお茶会」
二〇一八年八月六日(月) 一〇階会議室(参加者九人)

②「特別鑑賞会『石井林響展』及び館長を囲むお茶会」
二〇一八年十二月二日(日) 一〇階会議室(参加者六人)

一八 博物館実習(実習生二二校二二人)

二〇一八年九月四日(火)～六日(木)、十一日(火)～十三日(木)

一九 図書室の運営

公開日数 三四六日
利用人数 九六七人

二〇 施設の利用(利用日数)

市民ギャラリー(三一団体一七、五八七人)

講堂 五〇二コマ

講座室 三八七コマ

さや堂ホール 四九〇コマ

* 講堂、講座室、さや堂ホールは一日三コマ(一〇～一三時、一三～一七時、一七～二〇時)

(二)千葉県科学館との相互割引

入場料割引を実施(利用者三四人)

二一 他施設利用者

ミュージアムショップ売上件数 一三、三六八件

二二 地域連携事業

(一)美術館ふれあい会議

二〇一九年三月二〇日(水) 一〇階会議室(参加者九人)

「拡張工事後の美術館一階(さや堂・フリースペース)の活用について」

* 地域住民や当館職員による協議。

平成三〇(二〇一八)年度 市民ギャラリー・いなげ 企画展および施設の利用者

(一)企画展(九件)

①二〇一八年七月三日(火)～一六日(月・祝)

「稲毛の夏休み―海辺の記憶を伝える―」

*幕張小学校や地域住民が所蔵する生活用具や漁具を資料として展示し、埋立前の稲毛の夏休みの様子を紹介した。

(二三日間／入場者七三二人)



「稲毛の夏休み―海辺の記憶を伝える―」会場

②七月三一日(火)～八月五日(日)

「世界児童画展千葉県展」

*美育文化協会と共催で「世界児童画展」の優秀作品と千葉県の入選以上の作品約三〇〇点を展示。市内の小中学校一五校、中学校一校が入選。

(六日間／入場者六一六人)

③八月一四日(火)～二六日(日)

「創造海岸いなげ展」

*千葉にゆかりのある若手作家、木床亜由実(絵画)、山崎雄策(写真)、和田的(陶芸)三氏の合同展。

(二日間／入場者五九七人)



「創造海岸いなげ展」会場

④八月一四日(火)～二六日(日)

「千葉市中学校美術部展」

*市内中学校二二校の美術部合同展。約二〇〇点を展示。

(二日間／入場者七九二人)

⑤一一月一七日(土)～二二月二日(日)
「第二回いなげ八景水彩画コンクール展」



「千葉市中学校美術部展」会場

*「いなげお話し会」で選定された「いなげ八景」をテーマにした水彩画の展覧会。今回より大人部門の他に小中学生部門を新設した。市長賞二点、理事長賞二点、稲毛賞二点、市民ギャラリー・いなげ賞四点、入選三二点を展示(応募総数四一点)。
(二四日間／一、八〇二人)

⑥ 二月二六日(水)～二〇一九年一月一三日(日)

千葉大学連携事業 写真展「みつける、とらえる」

*千葉大学との連携事業、普遍教育教養展開科目「アーティストと展示をつくる」の一環として開催。千葉大学の学生五人、一般三人の作品を展示。講師・白井綾(写真家)。
(二日間／入場者四六四人)



「千葉大学連携事業 写真展「みつける、とらえる」」会場

⑦ 一月四日(金)～一四日(月・祝)

「ギャラリー・いなげ新春展」

*ギャラリー・いなげで講習会等の指導を行う地域の作家一人による小品展。
(二〇日間／七三四人)

⑧ 一月四日(金)～一四日(月・祝)

「千葉の畑に棲みついた江戸と明治の忘れ物 泥面子と型押しおはじき」

*千葉市在住の田中和夫氏が長年にわたり市内の畑で発掘した泥面子やガラス製のおはじ

きのコレクションを展示(三)～⑤・⑥参照)。
(二〇日間／七三四人)

⑨ 二月七日(木)～二四日(日)

「千葉ゆかりの作家展 武藤亜希子―記憶の中の風景―」

*千葉市在住の作家・武藤亜希子による個展。布などを主な素材として海辺の街の記憶を残す稲毛の松林をモチーフとした新作などを展示。期間中、地域住民とのワークショップを実施(二)～⑬・⑭参照)。
(二六日間／五二六人)



「千葉ゆかりの作家展 武藤亜希子―記憶の中の風景―」会場

(二)イベント、ワークショップ等の開催(二四件)

① 二〇一八年四月二八日(土)

「春のスケッチ大会」(参加者四二人)

講師 佐藤央育(美術家・千葉県立幕張総合高等学校教諭)、NAMIKI(イラストレーター)



「春のスケッチ大会」の様子

② 六月九日(土)

「山口マオ版画ワークショップ」(参加者二人)

講師 山口マオ(絵本作家・イラストレーター)

③ 六月九日(土)～一二月八日(土)(全十一回)

「千葉市伝統文化和装マナー親子教室」(参加者三五人)

講師 松本美知子、堤美智子他

* 「文化庁伝統文化親子教室事業」の一環として開催(三二一⑦参照)。



「千葉市伝統文化和装マナー親子教室」の様子

④ 六月二〇日(日)、一〇月二七日(土)

「創造海岸美術講座」(参加者一人、二四人)

講師 木村聡子(フラワーデザイナー)/フラワールース制作指導)、
NAMIKI(イラストレーター/色であそぼう○○どうぶつ担当)



「創造海岸美術講座」より

⑤ 七月二四日(火)

「教職員を対象とした画材研修会」(参加者二〇人)

講師 大塚義孝(ペンてる株式会社教育普及担当)

⑥ 七月二五、二六日(水、木)

「教職員実技講座」(参加者三人)

講師 水野祥江(千葉市立磯辺小学校教諭)、為我井直子(千葉市立稲毛第二小
学校教諭)

⑦ 七月二九日(日)

「夏休み子ども美術講座」千葉の土で絵を描く(参加者二人)

講師 佐藤央育(美術家・千葉県立幕張総合高等学校教諭)

* 前日の二八日(土)も実施予定だったが台風のため中止。



「夏休み子ども美術講座「千葉の土で絵を描く」の様子

⑧七月三十一日(火)

「子どもの絵のみかた『描写と表現』」

講師 藤澤英昭(千葉大学名誉教授)

⑨九月二二日(土)

「写真撮影講座 稲毛の街を撮る」(参加者一〇人)

講師 白井綾(写真家)

⑩一〇月六、七日(土、日)

「秋休み子ども美術講座」(参加者二〇人)

講師 小山博(市民ギャラリー・いなげ所長)

⑪十一月三日(土・祝)

「秋のスケッチ大会」(参加者九人)

講師 NAMIKI(イラストレーター)

⑫十一月二四日(土)

「写真撮影講座 夜景を撮る」(参加者一四人)

講師 佐藤信太郎(写真家)

⑬二月八日(土)、二〇一九年二月二一日(月・祝)

「M+A+T+S+Uをつくろう」(参加者六人、九人)

講師 武藤亜希子(美術家)



「M+A+T+S+Uをつくろう」

⑭二月二一日(月・祝)

「なくしもの屋」(参加者五人)

講師 武藤亜希子(美術家)

(三)ミニ企画展(ロビー等を整備・活用した展覧会)(九件)

①二〇一八年三月二〇日(火)～四月二〇日(金)(二八日間)

「幕張総合高校授業成果展」

*前年度事業。千葉県立幕張総合高等学校の授業研究の成果展。

②四月二二日(土)～三〇日(月・祝)(九日間)

「ミニ稲毛の記憶展」

③五月三日(木・祝)～三十一日(木)(二五日間)
「春のスケッチ展」

*「春のスケッチ大会(二二―①)の作品展示」

④六月一日(金)～三〇日(土)(二六日間)

「山口マオ オリジナル作品展」

*「山口マオ版画ワークショップ(二二―②)にあわせて開催」

⑤六月二〇日(水)～三〇日(土)(二〇日間)

「明治時代のおはじぎ展」

*本展示をきっかけとして「千葉の畑に棲みついた江戸と明治の忘れ物 泥面子と型押し おはじぎ(二一―⑧)を開催」

⑥九月一日(土)～三〇日(日)(二六日間)

「泥面子ミニギャラリー展」

*前項に続く展示

⑦一〇月一三日(土)～十一月五日(木)(二九日間)

「着物帯でつくる花結び作品展」

*「千葉市伝統文化和装マナー親子教室(二二―③)の講師によるミニ作品展」

⑧一二月五日(水)～一六日(日)(一二日間)

平成三〇年度 埋蔵文化財ロビー巡回展「弥生狩猟民展」

*千葉市埋蔵文化財調査センターとの連携事業

⑨二〇一九年二月二六日(火)～三月三十一日(日)(三〇日間)
「海辺の記憶を伝える稲毛展」

(四)その他(地域連携等)

①『いなげ八景散策マップ』の作成

*ギャラリー周辺の関連施設や地元商店街(稲毛せんげん通り商店街)と連携し、周辺施設の利用促進を目的とする『いなげ八景散策マップ』を作成

②二〇一八年五月五日(土・祝)、二月一日(土)(参加者 一九人、八人)

「いなげ八景ツアー&ランチ」

*海辺の記憶を残す稲毛を学芸員の解説で巡るツアー。稲毛商店街が運営する地域交流施設「あかりサロン稲毛」などと共同で実施

③七月八日(日)、二月一日(土)(参加者 一七人、一〇人)

「いなげお話し会」

*稲毛について地域の歴史や文化の情報を地域住民などから収集する集まり

④八月一九日(日)

千葉市美術館「美術館で縁日気分!!」へのブース参加

*埋立前の稲毛の様子をプロジェクトや写真によつて紹介

⑤一〇月二四日(水)(参加者五人)

「千葉市民ギャラリー・いなげ利用者懇談会」

*施設に対する評価や新たなニーズの把握などを目的として、地域の小中学校関係者、地元商店街、地域NPO関係者、利用者代表、学識経験者、指定管理者による意見交換会

⑥ 一月二一日(日)～二五日(日)(一三日間)

「稲毛レトロ写真展」企画協力

*稲毛あかり祭「夜灯(よとぼし)」の一環として京成稲毛駅構内で毎年行う「稲毛レトロ写真展」を企画。構内のスロープに稲毛の古写真を展示した。

⑦ 稲毛あかり祭「夜灯」の広報物制作

*パンフレット、ポスター、中吊り広告の編集およびデザインを担当。公共施設運営の視点から見やすい広報物に改善した。

⑧ 一月二四、二五日(土、日)

第一三回稲毛あかり祭「夜灯」特別夜間公開(参加者一、〇九六人)

*地域の祭に会場のひとつとして参加。打瀬船のオブジェの他、「秋休み子ども美術講座」(二)～⑩や地域の小学校(稲毛第二、磯辺、真砂第五)が授業で制作した創作灯ろう約三〇〇丁を展示。また、県内在住の海月岳人(美術家)による光の演出を行った。



(五) 職場体験学習の受け入れ(六校二二人)

(六) 施設の利用者

展示室(三〇八日/一四、〇八一人)

制作室(三〇八日/一二、七八七人)

(七) 旧神谷伝兵衛稲毛別荘の公開(五二日/一、七三五人)

*耐震改修のため、二〇一八年五月末で館内見学等を休止(二〇二〇年三月一日再開)。

① 団体利用者に対する解説(一一団体二一回)

*学芸担当と所長が解説を行った。

② 市内小学校の見学(二校)

③ 広報紙の発行

『海気通信』第一五号(一回)

平成30年度利用者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計		
展覧会観覧者	企画展	百花繚乱列島	5,307	5,971											11,278	
		岡本神草の時代展		296	5,247	1,960									7,503	
		平塚運一展				2,108	5,418	2,322								9,848
		1968年 激動の時代の芸術						1,994	5,041	3,495						10,530
		石井林響展								994	3,059	2,587				6,640
		プラティスラヴァ世界絵本原画展 第50回千葉市民美術展覧会										1,786	4,961	1,167		7,914 17,287
	所蔵展	菱川師宣とその時代	5,351	6,028												11,379
		浮世絵黄金期からの展開		296	5,373	2,038										7,707
		旅一ちょっとそこまで、遠くまで				2,148	5,523	2,335								10,006
		林響の周辺								987	3,128	2,613				6,728
		新収蔵作品展										1,828	5,036	1,178		8,042
		房総ゆかりの作家たち													1,756	1,756
	展覧会観覧者 計 (A)		10,658	12,591	10,620	8,254	10,941	6,651	5,041	5,476	6,187	8,814	9,997	21,388	116,618	
貸出施設利用者	市民ギャラリー	551	2,100	1,590	100	646	2,239	1,202	232	1,100	7,827				17,587	
	講座室	366	335	275	298	260	357	291	279	292	247	46	304		3,350	
	講堂	290	833	595	360	850	280	120	610	120	7,827	230			12,115	
	さや堂ホール	500	385	242	285	1,520	466	404	1,285	1,423	7,950	236	109		14,805	
貸出施設利用者 計 (B)		1,707	3,653	2,702	1,043	3,276	3,342	2,017	2,406	2,935	23,851	512	413		47,857	
その他利用者	図書室	54	61	213	113	77	85	85	43	50	44	76	66		967	
	講座・講演会等	244	172	219	73	254	182	413	2,055	115	89	369			4,185	
	コンサート・ワークショップ等		17		165	1,194			39	149	439	380	138		2,521	
	学校プログラム・実習等	38		227	116	323	309	347	100	176	232	280			2,148	
その他利用者 計 (C)		336	250	659	467	1,848	576	845	2,237	490	804	1,105	204		9,821	
	ミュージアムショップ売上件数	1,203	1,438	1,603	1,073	1,254	1,009	1,416	1,412	546	952	1,173	289		13,368	
	レストラン来客数	941	1,592	1,006	603	1,118	996	739	680	612	729	948	1,281		11,245	
他施設利用者 計 (D)		2,144	3,030	2,609	1,676	2,372	2,005	2,155	2,092	1,158	1,681	2,121	1,570		24,613	
美術館 利用者総計 (A+B+C+D)		14,845	19,524	16,590	11,440	18,437	12,574	10,058	12,211	10,770	35,150	13,735	23,575		198,909	
市民ギャラリー・いなげ	企画展等の入場者・参加者	展示室利用者 (E)	1,503	1,589	1,203	1,048	1,300	1,167	1,322	1,347	848	1,072	726	956	14,081	
		制作室利用者 (F)	638	671	834	1,442	1,573	496	1,125	2,124	468	2,415	490	511		12,787
	企画展等の入場者・参加者	稲毛の夏休み				(733)										(733)
		世界児童画展千葉県展				(616)										(616)
		創造海岸いなげ展					(597)									(597)
		千葉市中学校美術部展					(792)									(792)
		第2回いなげ八景水彩画コンクール展								(1,802)						(1,802)
		写真展「みつける、とらえる」									(464)					(464)
		ギャラリー・いなげ新春展										(734)				(734)
		泥面子と型押しおはじき										(734)				(734)
	武藤亜希子—記憶の中の風景—											(526)			(526)	
	イベント、ワークショップ等の参加者	(42)	(19)	(101)	(68)		(40)	(79)	(1,130)	(24)			(14)		(1,517)	
	旧神谷伝兵衛稲毛別荘 (G)		649	871	189	26										1,735
庭園(*ロビーを利用したミニ企画展等を含む) (H)		1,342	862	502	479	480	152	175	639	420	39	53	173		5,316	
市民ギャラリー・いなげ 利用者総数 (E+F+G+H)		4,132	3,993	2,728	2,995	3,353	1,815	2,622	4,110	1,736	3,526	1,269	1,640		33,919	

(()内は概数。空欄は該当なし・利用不能を示す。)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第二二号

二〇二〇年三月三〇日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団

千葉市美術館

〒〇一〇〇三 千葉市中央区中央三―一〇―八
電話 〇四三―二二二―二三二一(代)

翻訳協力―バーバラ・クロス

制作―e r A

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.22

March 30, 2020

Edited and Published by

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba City, Chiba 260-0013 JAPAN

Phone. 043-221-2311

Translated by

Barbara Cross

Produced by

erA

ISSN 1343-148X

Me [mé] × Futoshi Hoshino Crosstalk “Where does the Flow Line go?”

Speaker:

Haruka Kojin (Contemporary Art Team 目[mé])

Kenji Minamigawa (Contemporary Art Team 目[mé])

Futoshi Hoshino (Aesthetics / Kanazawa College of Art, Lecturer)

The contemporary art team 目[mé] is a world-renown art collective whose works completely transform preexisting spaces and imbue the viewing experience with a strong emotional appeal. This talk was held in connection with the exhibition 目[mé] *Obviously, no one can make heads nor tails* (November 2–December 28, 2019) at the Chiba City Museum of Art. This exhibition, the first solo museum show for 目[mé], encompassed the entire museum, including not only displays but also the viewers’ movements and awareness. It invited viewers into a facility with an unusual kind of reality.

The talk began with an introduction by 目[mé] artist Haruka Kojin and director Kenji Minamigawa, who introduced their representative works as well as past works related to this exhibition. For Kojin, the starting point was her childhood memories and the wonder that this world exists—a wonder scooped up from everyday life through her delicate sensibilities. As such, 目[mé] has been experimenting with how to present a “flow line” through viewer subjectivity in their work. As Hoshino pointed out, the works of 目[mé] consistently ask people what it means to see. People do not necessarily see things only by sight but can also “see” something without being there, or even through the eyes of others.

Next, based on Hoshino’s actual experience in the exhibition hall, a discussion developed about the interaction between viewers that takes place in a museum. The role of the “scaper”, one of the important elements of the Chiba City Museum exhibition, was also discussed. Tracing Kojin’s inspiration, it becomes clear that there are cognitive problems lurking in the background of their work, such as extreme shifts in scale and the displacement of the macroscopic perspective.

The talk concluded with a question and answer session from the audience, leaving various mysteries unanswered.

Edited by Megumi Hatai (curator in charge of this exhibition)

者は内容を明かさなさいとお願いということになっていて、それ以外の一般のお客さんに対しては特にネタバレ禁止とは言われなかったと思います。にもかかわらず、なぜ誰もネタバレしないのかということなのですが、思うにネタバレしてもすごさがよくわからないんだと思います。「同じ部屋が二つあります」「そうか……」みたいな感じで、すごさが伝わらないと思うんですね。映画のネタバレって、「実は仲間だったあいつが黒幕だった」「おお！」みたいな感じでびっくりするので、ネタバレをバラすかバラさないかというのは大事なのですが、たぶんこの作品はネタバレしてもすごさがわからないし、バラす方もなんの快樂もない。おそらくそういうところが理由ではないかと思いました。

2019年11月30日(土)

於 千葉市美術館11階講堂

本トークは、当美術館の展覧会「目[mé] 非常にはっきりとわからない」(2019年11月2日～12月28日)にあわせて開催された。

編集：畑井恵(同展担当学芸員)

キャプション・クレジット

図1

たよりない現実、この世界の在りか(2014) 資生堂ギャラリー PHOTO:加藤健

図2～6

repetition window(2017) 宮城県石巻市被災地エリア リポーンアート・フェスティバル2017

図7～8

Elemental Detection(2016) 旧民俗文化センター さいたまトリエンナーレ2016

図9～10

FICTIONAL SCAPER(2013) 象の鼻テラス

図11～13

レブリケーション・スケーパー(2015) 水戸芸術館現代美術ギャラリー カフェ・イン・水戸R

リーってなって、やったー！って感じはあんまりないですね。そこから逃げたい感じの方が強いかな。(荒神さんに確認して)それでオッケーだそうです。(会場笑)

質問者C こんにちは。目[mé]のお二人と星野さんにもお伺いしたいんですけど、この展覧会はSNS等でネタバレをしないでくださいとか一切言っていないんですよ。で、最初そんなので大丈夫なのかなって思ったんですけど、私が知る限りではネタバレはされていない。目[mé]の方からネタバレ禁止っていうのを明確に言わなかったことと、それがバレていない現状についてお二人はどう考えているのかと、何故ネタバレしないのかっていうのを星野さんに解説していただけたらと。

南川 ネットバレについては今もずっと悶々としていることで。最初のオープニング時点で報道とかに対してこっちから積極的に出さないっていうのを決めてたんですけど。本音を言うと、それをこっちからは言うけど、報道は別に自由というか、それを前提に書くのは自由じゃないですか。こっちからは決しておすすめはしないんですけど。批評とかも結局同じで、ネタバレだから批評できないっていうのはなんか悶々とするなあって思ってた。でもそのネタバレと報道っていうのは常に拮抗しているべきで、その間になにかできそうな感じを、いつも思っています。それに対して自分はなにを考えられるのかなと思って。ネタバレについて制限していく方向にものか働くと、それをどんどん加えていくことになるっていうのが最初に直感としてあって。じゃあこれもやめてください、あれもやめてくださいって、制限によってさせないっていうのも違うし。その間で僕たち作家と鑑賞者は一体どういう行動をとるのかっていうのに興味がある。という感じですかね。

荒神 何故おすすめしないかっていうと、見た人のお客さんの導線を奪ってしまう、体験を奪ってしまうからっていうことなんですけど。それと同じように見た人が思ってくださいってっていうのはすごく有り難いというか、すごいことだとは思ってますけど。でも一方で例えばネタバレがあったとしても、自分たちにとっても本当にどこまでが作品だったかっていうのが、もうわからなくなってきているので。それが、例えばなにか情報が出たからといって、それを見るか見ないかって選ぶのは見る人次第だし。正解が特になんないんじゃないかなっていう。

南川 あと同時に、ネタバレを禁止することによって、見られない人が知る可能性を奪うことでもあるので。その逆にね。だけどその間に作家も皆も立っていて、どう扱っていいかってことですよ。それってきつと、いろんな社会問題ともつながっているとも思うから。そのあいだでなにができるのかって、今リアルに感じていて。

星野 面白いご質問だなあと思って伺っていました。まず私の知る限りネタバレは、たしか「メディア関係は禁止」という感じだったと思うんですよ。取材関係

を出したりしている。そういう謎の流行があるらしいです。私も、原稿依頼を受けて初めて知りました。面白いですよ。(会場笑)

最後に質疑応答などもしましょうか。1時間以上しゃべってきたので、よろしければ残り15分ぐらい、会場の方から目[mé]の皆さんに質問などしていただけたらなと思います。

質問者A 今日はありがとうございました。私、越後妻有のコインランドリーの作品がとても好きで、あのときの体験を今でも鮮明に覚えています。今日の展示もですね、自分が7階にいるのか8階にいるのか段々わからなくなってきて、とっても楽しかったです。この作品は、こちらに来てから考えがどんどん変わっていったのか、それとも元々こういう感じでやろうっていうふうに思われてやったのか、そのあたりをお伺いしたいです。

南川 そうですね、最初に来てからですね。スケーパーとか、収縮と増大みたいなものを空間につくりたいっていう、鑑賞者の運動みたいなものの状態を作品にしたいっていうのはずっとありました。それがどうやったらできるかっていうのをずっと悩んでいてつくった面と、あとはキュレーターの畑井さんから声をかけられたときに、2020年に千葉市美術館がリニューアルする状況で、美術館ってなんなのかっていうのを、キュレーターさんと作家とか鑑賞者とか、他の監視さんも含めて、もう1回考えたっていうのをおっしゃっていて。それもあって、段々つくっていったっていう感じですね。

質問者B 今日は非常に興味深いお話を伺わせていただきありがとうございます。目[mé]さんの作品は初めて拝見させていただいたんですが、いつも展覧会とか行きますと、この絵なんかよくわかんないとか、なんだこの彫刻は、ってなると、キャプションを読んだりですとか、図録を買って、わかる言葉でいつも理解したつもりになっているんですね。で、今回の展示なんですけど、非常にはっきりとよくわからないって感じでして。解説もなければ、なにか具体的な図録があるわけでもなく。なにが正しいんだろうって、すごく自分自身の考えに晒される、突き放されるといいますか、ということをやっている。自分が美術を見ているときにはいつも、正しい答えを求めているような気がしまして。鑑賞されるですとか解釈されるっていう点で、どういったお考えをお持ちなのか伺いたいです。

南川 鑑賞されることと、解釈されること……。目[mé]は始めて6年とかそれぐらいで、まだ批評とかあんまり言説されてなくて。今は本当に、どういうふうに皆さんが感じたり論じてくれるのかっていうのは楽しみにしています。個人的には、芸大に入って、作品にキャプションを置いた瞬間に違和感があって。自分的にはそこらなんか考えてたんじゃないかって思ってるんですけど。キャプションをつけた瞬間になにかに加担してるんだと直感しました。今だと、現代アートの海外の作家との類推とかもされますが、知らない作家に対しては知りたいんですけど、同じカテゴ

いものだったじゃないですか。だからその単位の細胞とも対峙してるはずなんですよ。今は考えられないけど。そう考えると、地球よりも大きいものとも、もしかしたら対峙したことがあるのかもしれないとあって思うと、もう、興奮します。(会場笑)ありえないと思ってるけど、対峙したことあるのかなって、自分は。

南川 この広さがわからないって言われてる宇宙の端を、実は知っているかもってというのが、それを聞いた僕の興奮ポイントで。(会場笑)宇宙船とかは生きてるうちは間に合わないけど、自分の体では実は感じられるっていうことに、唯一の望みをかけて生きていくんです。

星野 まあさっぱりわからないんですが(会場笑)、でも、これはすごく大事なことだと思うんですね。目[mé]のお二人の話はいつもさっぱりわからないんですが、でもそれを作品で見せてもらえると、すごくよくわかるわけですよ。

最近『現代思想』¹²という雑誌で巨大数についての原稿を書いたんですが、巨大数ってすごく大きい数のことらしいんですね。でも、巨大数って、それだけ聞いてもすごさがよくわからないんです。たとえば、10の26乗って言われても、数として「ああ大きいんでしょうね」というくらいで、実感としてはわからない。わからないとしたら、それを何か別の形に変換しないとイケない。で、なぜ10の26乗がすごいと思わないかという、知的にそれを認識しようとしているからですよ。頭の中で、10を26回掛けたら10の26乗になるとわかってしまうわけです。だから、そのすごさがわからない。でも、それを別の形に変換してやると、そのすごさがわかる。お二人の話もさっぱりわからないのですが、そのさっぱりわからないことを作品にすると、おそらくわかるわけですよ、その感覚が。今回の展覧会にしても、7階と8階ですごく細かいところまでまったく同じディテールの空間が二つある。その途方もなきたいなものは、言葉で言われると「へえ」という感じですが、実際に見たらすごいわけです。今回の展覧会のタイトルにもあるような「わからない」ことを、どうすればわかるようにできるか。そういうことかなと、一人で納得しながら聞いていました。

南川 面白いですね。巨大数っていう言葉だけでも、かなり興奮します。(会場笑)

星野 10年くらい前から、ネット上のアマチュア数学者のコミュニティがあるらしいんです。もともと数学者は巨大数ってあまり問題にしなかったらしいんですよ。それは数学者の仕事じゃないから。でもアマチュアの数学者たちがそれに興味を持ちはじめ、海外でも large number というコミュニティがあるらしいです。そこでフィッシュ数という数を考案した人が、今ではその巨大数の専門家になって本

12 星野太「感性的対象としての数:カント、宮島達男、池田亮司」『現代思想』2019年12月号(47巻15号)、青土社、2019年、188～196頁。

荒神 そう、それなんですけど。そうすると、普段めっちゃ静かな男の子や女の子が、私と同じようにすごい変な顔したりとかしていて、もしかしたら同じようなことを感じたのかなと思って。個人じゃなくて、自分の個人的な認識っていうのを越えた瞬間に、人はありえない行動をとったり、自分じゃない存在になれたりするっていうことなのかなと思って。これは下敷きになったんですけど、大事にとってあったんです。

南川 わかんないですけどこれがスケーパー的というか、もしかしたらさつき星野さんのおっしゃった、括弧の中に自分が入れるとか。そういうことに気づいたんですかね。見てないところに存在できるみたいな。

星野 荒神さんのお話を何度か伺っていると、やはりスケールの大きな視点運動があると興奮する傾向があるのかなと思いました。(会場笑)

今回の個展の着想になった間接的なきっかけが、チバニアン¹¹を見に行っただととおっしゃっていました。また、今度『美術手帖』に載るインタビューでは、地球の表面で起こっている出来事のスケールで見ると、美術館というのは、延々と搬入と搬出を繰り返している場所だ、ということもおっしゃっていました。これは確かにそうだなと思ったんですよね。巨視的なスケールで見ると、美術館というのは、ある一定期間何かを運び入れて、終わったらそれを運び出す、それを何十年も繰り返している場所です。そこから今回の展覧会もできていると思うんですが、スケールを極端に大きくするとか、極端に遠いところに視点を据えるというのが、今日紹介していただいた過去の作品も含めて、目[mé]の作品に共通するところなのかなと思います。

南川 荒神は石庭の石がすごく良いつて言っていて、重森三玲の東福寺の石庭の石をみた時に、極端に大きいものと、極端に小さいものが、実は同じなんだということがわかるつて言っていて。けっこう僕は時間がかかってわかったというか。荒神曰く、岩つていうのは単位がない。さっきの景色に近づけないつていうのは、人間の認識が単位つていうものを持っていて、森が木になって木が葉っぱになるつていう、こっち側の認識によって見れないんだけど。岩は、目で見たり写真で見ると、めちゃくちゃ小さいのかめちゃくちゃ大きいのか全くわからなくて、それが特に石庭には見れるつていう。大きいイコール小さいつていうのが、多分興奮ポイントなんです。(会場笑)

荒神 かつて自分たちも、針で点をついたぐらいの、卵子つていうすごいちっちゃ

11 千葉県市原市、養老川流域田淵にある地磁気逆転地層(千葉セクション、2018年に国の天然記念物に指定)。約77万年前に最後の地磁気逆転現象がおきた痕跡が残されている。本展会期後の2020年1月17日、韓国釜山で開催されたIUGS(国際地質科学連合)の理事会において、千葉セクションが前期-中期更新世地質年代境界のGSSP(国際境界模式地)に決定されたことで、約77万4千年前～約12万9千年前(新生代第四紀更新世中期)の地質年代の名称が正式に「チバニアン」となった。

せて、鑑賞者がどうするのか僕らも全く予想できなかつたんですけど。鑑賞者が鑑賞者を意識するというか、これに入った後で、他のお客さんが怪しく見えてくるとか、まあそういうことをしたいと思っかなり実験的にやった作品です。そこらへんでずっと考えていたスケーパーっていう考えが、この《非常にはっきりとわからない》で、一番出したかった形で出せているような気がします。

星野 たしかに、水戸美術館のこの作品を見ると、今回の個展の背景にある狙いが見えてくると思うんですね。たとえば今回、1階に臨時の受付があるんですが、現在この美術館は工事中で、実際に建物の外側に足場が組んであったりする。それはおそらく工事のための実際の設営なんだろうけれど、その中でこういう仮設的な空間を見ると、外壁の部分はどうなんだろう、という疑いが生まれてくると思うんですね。僕自身、今日美術館に来てふと思ったのが、建物外側の柱に「千葉市美術館はこちら」という矢印が大量に書いてあって、なんかこれおかしいなって思ったんですよ。ふつうこんなに書く必要ないだろうと思って、これもなんか作ってるのかな、という疑いを抱いたりしていました。

さっきの「後頭部問題」にしてもそうですけど、ふだん僕らは自分たちが見ているものをなかつたことにしているんですね。ピカソの絵を見に行くと、実際には後頭部をほぼ見ていたはずなのに、後頭部がなかつたかのように振舞っている。あるいは外国の人のレクチャーに行くと、だいたい通訳が入っていて、自分たちが理解した言葉というのは通訳の人がしゃべった言葉であるにもかかわらず、まるで自分がその人の話している英語やフランス語をじかに聞いたかのように括弧に入れている。たぶん日常生活を送るうえで、僕らは膨大な情報を受け取っているんだけど、その情報に全部向き合っていると頭がおかしくなってしまうので、その一部だけを認識して生活をしている。でも実は、そういう、自分がノイズとして切り落としている膨大な領域があるんですね。無意識にそういうフィルタリングをしているということが、作品を経験した後で如実に伝わったりすることがあると思うんです。

南川 なんか荒神がね、小学校の……それもそうですね。スライド出ますかね

荒神 小学校の時の、全生徒と全先生が集まって集合写真を撮りますみたいな企画があつて、うわ何それと思つて。そしたら校庭に四角が書いてあつてその中にみんな整列してくださいみたいになって、見上げたら屋上にカメラマンがいたんですけど。私なんか普段はすごい静かなタイプで、目立ちたいとかない、引っ込み思案だつたんですけど、その時ばかりはなんか、こんなつぶつぶの集合として、自分が存在できるんだと思った瞬間にすごいテンションが上がつてきて、もうありえない顔でわーって写つたんですよ。(会場笑)

南川 これ？

で、船に敬礼した途端、これが奇跡的に船から風船がばあって出て、フウって汽笛が鳴ったんです。その人はそのまま帰って、家族にも一切気づかれてなかったです。こんなことをやっていました。鑑賞者が作品になるっていうか、荒神が、人間は目と鼻と口があって、こんなに似てるのに、それをどうやったら感じれるのかみたいな。さっきの同じ物質っていうか、そもそも人間同士がめっちゃくちゃ似てるってことをどうやって感じるのかみたいなところから掘り下げていきました。



図11

もうひとつ、スケーパーについて発表した作品が、水戸芸術館のグループ展で発表したものです(図11)。水戸芸術館のグループ展に参加した作品で、会場の最後にこういう部屋があって。たまに展示してなかったりする場所なんですけど、そこが良いと思っていて。そこに展示してない感じをつくって、でちょっとだけドアが開いて。水戸芸の人を困らせたと思うんですけど、素通りして欲しいってことを言っていて。これに気づいた人が入っていくようにして。ときには、ちょっとここに作品ありますよって案内もしたかもしれないんですが、そういう状態をつくりました。でこう、扉を入っていくと、美術館の



図12

中に入ったような感じになるんですよ。学芸員さんがいそう(図12)。重要なのが、さらに奥につながっているドアがあって、そこは鍵がかかっていると。だから、美術館のそのさらに奥に入っていけるような雰囲気をつくっていて。その中に今までの展覧会の全ポスターとかを借りたりして、水戸芸の裏側みたいな場所をつくりました。そこに、どこかしこに、スケーパーがどうとかって書いた書類がいっぱいあるんですよ。その書類作りに一番時間をかけました。展示マップってあるじゃないですか、展覧会によくあるやつ。鑑賞者が会場でそれをどのように折り畳んでいくのかとか。めっちゃ調べられてるみたいな状況なんですよ。で、スケーパーって謎の言葉があって。それに入会するシステムがあったり、いろんなスケーパー会員証とかが散らばってたり。だからスケーパーって何?みたいな状態をつくって。美術館にはここのお客さんが何をしても注意をしないでほしいって言うのを言っていて。それを見ていくっていう作品です。



図13

見方によっては、水戸芸って鑑賞者をずっと監視してたんだってツイッターでそういうこと言う人もいたりします。(会場笑)で、鑑賞者がどういう仕草をしているか、手を後ろに回して作品見てるとか、足がぐねってなるタイミングとか色々書いてあります(図13)。こんな場所に入っちゃったらお客さんがどうなるのかをすごく見たかったんですよ。ほとんどの人は素通りしたと思うんですけど、まあ色んなことが起きて。監視さんには20分に1回この部屋に入ってきてもらうんですけど、その監視さんに10人ぐらいの人だかりが後ろについていたりとか。ここにあった飴を食べたりとか、このティーポットでコーヒー湧かしてお茶会してたりとか、本を読み散らかしてるだとか。あと、水着と浮き袋とかがあって、それを4人家族だっけ、ここにシュノーケルとか浮き袋をつけて、美術館の受付に戻って来て「僕たちどうすればいいですか」って聞かれて。それはもう、まったくこっちの想像を超え過ぎてたんですけど。(会場笑)まあいろんなことがあって、スケーパーという存在を見

た。自分の場合は過去の作品をある程度知っていたから、「あ、今回こうきたか」みたいな目で作品を見ていたのですが、実際に印象に残っている鑑賞体験というのは、周りのお客さんの反応だったりします。そこが今回、美術館だからこそ起こったことだと思いますね。これまでの芸術祭での展示だと、そういうことが起こりづらかったのではないかと。だから今回、美術館という場所で目[mé]の作品を体験したときに、来場者どうしの相互作用がすごく印象的でした。そういえば、目[mé]には「スケーパー」という独特な造語があると教えていただいたので、関連してそのことについてもお願いできますか。

南川 はい。スケーパーっていう、素材っていうと失礼になるんですけど、空間をつくるクレートとかそういうものと同じ位置づけで考えているものがあります。スケーパー、景色の人っていう造語、スケーパーソンのスケーパーなんですけど。過去に、スケーパーをテーマにいくつか作品をつくっていきまして、それを紹介していきます。

これは2014年に横浜の象の鼻テラスっていうところで発表した、《fictional scaper(フィクショナル スケーパー)》という作品です(図9)。象の鼻テラスは、横浜の海の近くにあるカフェみたいな施設なんですけど、そこで展示するにあたって色々リサーチしました。この場所にありそうな、ソフトクリーム屋さんみたいな感じの建物があって、そこでお客さんが受付をします。「5分間だけ人生を変えられます」みたいな怪しい謳い文句を発信して、それに引き寄せられた人が来るんですよ。なんですかって言って。(会場笑)

で、色々アンケートをとられて、どれくらい人生変えたいですかみたいなのを書いたら、じゃあわかりましたって言って係員が鍵を渡して、この中の部屋に入られます。するとロッカーがいっぱいあって、渡された鍵のロッカーを開けると、指示書と衣装が入っています。メイク室があって、メイクさんがついて。フィクショナルディレクターっていうマインドを調整する人がいて。なんだか不安じゃないですか。そこでそれを大丈夫大丈夫っていう人もいて、アラームが鳴るまでの約5分間、野に放たれるんですよ。例えば、ひとつは芝生をルーペで5分間ずっと一本ずつ見るだけ。芝生についての古い本を横に置いて。本をずっと見ながら芝生を1本1本見るだけです(図10)。そうすると5分でアラームがビビーって鳴って、帰られると。これにハマった人がいて、連日通うようになって、アンケートは良いから芝生の人やらせて。なにか良かったのか。(会場笑)

これは「絵に描いたような絵描き」っていうんですけど、これもハマった人がいて。もうアンケート良いから絵描きやらせて。あとは、船が出るところで、船長さんの格好をして敬礼して帰ってくるやつ。これがなんか変な話があって、この作品をやったら、家族連れのお父さんがちらちらこっち見てるんですよ。子どもたちはソフトクリーム買ったりなんかして。急にそのお父さんが家族から離れてぼんって走ってきて、本当に5分だけなの!? ってだけ言ってまた帰って。なんなのかなあと思ったら、また来て、家族には絶対にバレたくないけどやりたいって。わかりました!って言って、急いでやって、その人がもらった鍵は船長さんの鍵



図9



図10

荒神 作品も、それを見る人も、作者も、こういうものとかも全部同じじゃないですか。同じものでできている。物質でできているから、ちょっとでもなにか、わざとらしさとか狂いとかがあると、同じいつも見ているものだから、ちょっとでも狂うとすぐわかっちゃうと思うんですよ。これはつくったものだなとか、これはつくってないとかっていうのはすぐ判断できてしまうと思うんです。で、増井はつくってないを目指すって言うんですけど、埃の1個までつくり込まないと、つくってないってことはもう難しいんですよ。新しいものがそこにあるとかってなってくると難しくって。何故そこまでやるかっていうと、伝わらないといけなとか、作品を見る人が、自分と同じようにこう感じとれなきゃいけないっていうことだから、同じ生物とか同じ物質としてちゃんと作品を自然に受け入れられるようにつくるためには、そこまでやらなきゃいけないって感じ、ですかね。

星野 ちょっと理解するのに15分くらい必要なので、少し違う話をしてお茶を濁したいと思います。(会場笑)

でも、よくわかるというか、それこそ最初の「なぜ空に落ちていかないのか」という荒神さんの疑問は、私のような哲学を仕事にしている人間も真面目に考えているんですよ。たとえば、どうして太陽が東から昇って西に沈むのかは、基本的には経験的にそう言えるにすぎないと主張する人たちがいます。自然法則というのは、これまでたまたまこういう自然法則であっただけで、自然法則自体がこれから変わる可能性もゼロではないのではないかと。それこそ3秒後に、重力の方向が変わって、空に浮いていってしまうかもしれないわけですよ。まあまずありえないんだけど、ただ理論的に考えると、それが絶対には言えない。こういうことを本当に数学とか使って計算する人がいて、これまで地球の自然法則がこうなっていたのは確率的にそういうふうになっていただけであって、ごくわずかな確率で自然法則が今後変わる可能性がある、みたいなことを言う人がいるんですよ。それをどこまで真面目に受けとって良いかはわかりませんが、でもそういうことを、我々の業界でもけっこう真面目に考えたりしている。

さっきの植物の色の話も似たようなことを言ってる人がいて、知識の流れというのは人間がもっている知識に限られたものではなくて、それこそ植物がどういう形になれば一番効率的に花粉を運んでもらえるとか、蜜蜂や蝶々や太陽との相互作用のなかで、植物や動物の形が変わるというのもひとつの知識の伝達であって、それが情報なんだということも真面目に主張している人たちがいます。だから、僕にとってはそんなに突飛な話ではないというか、わかるなっていうところもけっこうあるんですよ。

今回の展示会の話をすると、初日に普通に観客として来て、でも作品の体験の仕方としてはさっき南川さんがおっしゃったような、他の人の反応を見て「なにかが起こっているな」みたいな感じだったんですよ。初日だったからかもしれませんが、7階で見えていたら、他のお客さんが、「あ!そういうことか!」とかなんとか言い出している。(会場笑)

あとは、「頭がおかしくなったかと思った」と言っている人が8階にいたりしまし

に、途中段階を見ちゃって、初見で会うことはできないっていう。これ本心なんですけど、1回本当に記憶消して見たいっていつも思うんですけど、どうしてもできなくて。だからお客さんの反応を通してしか自分らの見たい世界っていうのは見られない。それを悶々と考えた挙げ句、今回の作品に行き着いて。今回はお客さんの反応がもう本当にまちまちで、それはほとんど全部、もうほんと涎が出るほどじろじろ、たまに変装したりして見に行ってるんですけど。そこで実感を得てるっていうのはすごくあります。

星野 南川さんは、観客を通して自分がつくった作品を見ているということですよ。自分では見られないから、人の目を通して自分の見たかったものを見ると。いきなり素朴な話になってしまうんですけど、目[mé]の作品って毎回すごく大掛かりじゃないですか。とっても大変だと思うんですよ。それを毎回かなりのクオリティでつくっていらっしゃる。だから見た人はすごいなあと思うんですが、そのモチベーションはなんなのかっていうのを見るたびに思うんですよ。もちろん作品をつくることによる喜びもあるし、それを展覧会を通して人に見てもらおうこと、他人と共有することの喜びというのもあると思うんですが、それにしてもこれだけの労力を、ほとんど作品というよりは公共事業みたいなレベルでやって、それが根底のところでは一体どういう欲求に根ざしているのかなって。すごく素朴な疑問なんですけど、どうでしょう？

南川 多分これ、荒神も僕も増井も違う。

荒神 うんうん。

南川 で、いつも一緒にやっているスタッフも、長い人で1年でもうむちゃくちゃになるんで、なんでこんなにやってるのかなって思うんですけど。自分の場合はかなりコンセプトのところで荒神に影響を受けていて、それをアイデアと言葉に変えるんです。自分のなかでは、この世界がどこに向かっていくのかっていうことを、いったんこう、本当にこういう話しかしてないんで、いったん言葉になっちゃったんですよ。それがすごく空虚というか、これを言葉で見せることって、究極は伝わんないって思って。で、本当に自分のなかで世界が明かされた日があつて。それをどうやって1番良い状態で死ぬまでに自分も含めて感じられるのかっていう。この荒神の言葉で言うと、まあいい物体に皆ぼんっ！って乗っている。なにこれ！？っていうことを、しっかり感じて死にたいじゃないですか。もうわけわからなさすぎるじゃないですか。この外を見たら、星があつて、その星がどれくらいの距離離れているかもわかんない圧倒的な謎のなかで皆毎日生きている。このことをはっきりして死にたいなっていう自分があつて。それはもう勉強とか、証明によって明かすっていうよりは、このなんでもないラーメン臭い自分が、ただたんにあああーんってなつて死にたいみたいななんじゃないかなっていう。それに対してけっこうがついてるというか、それを感じたいっていう。

南川 そうですね。目の見えない人でめっちゃお洒落な人に出会ったことがあるんです。本当にお世辞抜きで服装がすごいお洒落で、でも生まれつき全盲だっておっしゃってて。それがなんでなのか全くわからなくて。聞いてみたら、お洋服屋さんに行けりゃいいんですけども、行ったときの店員さんの自分との距離感とか、繊細な空気感とかを感じとって、それが蓄積されて、もう大体選べるっていう。で、それは普通に目が見える人よりもお洒落っていう。それがすごいはってして。その人に見るってなんなんですかって聞いたら、見るってなんですかって逆に聞き返されて硬直したんですけど。

それと自分が前から思っていた、植物は目がないのになんであんなに色をもっているのかっていうのを悶々と考えていて、それは多分そのさっきの話とつながるんですけど。極端に言うと、蝶々から情報を得て、何十万年とかこんな感じ？って目が見えてないけどやって、なんか良い反応もらったとか、情報が集まるじゃないですか。それで段々こういう感じがオッケーねってやって色を変えたりしていると。それって、生物一体という個体を超えて、蝶を通して植物は見えているって言えると思うんですよね。そのお洒落な人も同じで、自分たちの個人っていう主体を僕たちは超えて、何か感知したりできるっていうことなんじゃないかと思って、それがすごくはってしました。

星野 そのお話を夏にお会いしたときに聞いて、私もはってしたところがありました。それは目[mé]の作品について考えるうえでもそうだし、やはり見るってどういふことなのかをすごく考えさせられたエピソードで。このあいだ、ある芸術祭を見に行ったら、目の見えない方とその補助をされている方が二人組で鑑賞されていて、目が見える方が作品を言葉で事細かに説明しているんですね。それで、目の見えない方はそれを聞きながら、ふんふんという感じで頷いていた。ふだん私たちは各作品をぼんぼんと短い時間で鑑賞して、すぐに次に行っちゃったりじゃないですか。それに比べたら、その他人の言葉で作品を「見て」いる人の方がよほど1枚の絵をじっくり見ているな、と思ったんですね。

あと、なぜ植物が色をもっているかというのも面白い話で、植物自体は色を知覚できるわけではないけれど、他の個体と相互作用するために色をもつんだということも、面白い考えだと思いながら聞いていました。そう考えると、見るということとは必ずしも目で見ること限定できないというか、私たちは見るということを知覚で見ることとして考えると思うんですが、必ずしもそうではないのではないかな。このエピソードは目[mé]の作品を考えるときにも示唆に富むエピソードだなと思って、そういうことを今回カタログの方にも書きました。

南川 制作に関わってくれたスタッフに言われたのが、目[mé]の作品が好きだから制作準備から一緒にやっているのに、私が見れないじゃないかって。途中段階を見ちゃうから。その一言にすごい、あつと思って。そういえば僕らは作品発表したときのお客さんの動きにめちゃくちゃ興味があるのは何故かっていうこととつながっていて。結局僕らは作品を見たくてしょうがないから作品をつくっているの

の作品というのはずっと一貫して、見るってどういうことなのかをずっとこちらに問いかけてくるような作品ばかりなんですよ。たしかwebのインタビューで目[mé]の名前の由来が披露されていたと思いますが、南川さんが突然トイレで閃いたんですって。

荒神・南川 そうそう。

星野 要するに勢いで決まったということなんですが、やはりその名前の通りというか、ふだん私たちは目でものを見ているし、実際に美術館に行く目的というの、「この目で」作品を見るためですよ。ただ、目[mé]の展覧会に行つて帰つてくると、自分はなにを見たのかということ、それぞれが考えざるをえない。さきほどの話だと資生堂ギャラリーの作品が一番わかりやすいと思うんですが、実際に会場まで行つても、そもそも入口のところで帰つてしまう人もいれば、入口の正面にかかっているドローイングを作品だと思つて帰つてしまう人もいます。もちろんなかに入つていって、ひと通り展覧会を見た人がほとんどだと思いますが、そのなかでも半分くらいの方はさきほどの鏡の仕掛けには気づかない。それから少し奥まったところにある光も、ほとんどの人は見ずに帰つてしまう。そう考えると、私たちは展覧会を見に行つて、いったいなにを見ているのかということになってしまう。なにを見たら本当にそれを見たことになるのか、っていうのはやはり考えざるをえないと思うんですよ。

これはかならずしも現代美術に限つた話ではなくて、絵画とか彫刻とか、もっと古典的な作品を見るときでも、やはり考えざるをえない問題だと思うんですよ。ふつう私たちはルノワール展やピカソ展に行つて、それを実際に「この目で見た」と満足して帰つてきたという経験をしていると思うんですが、実際たとえば混み合つていて、前の人の後頭部が邪魔でよく見えないとか、そういうことが普通にあるわけですよ。同じ展覧会であっても、時間帯や見ている状況に鑑賞経験というのは大いに左右される。

南川さんのお腹を下しているときに作品を見たときの経験もよくわかります。そもそも、鑑賞経験つてつねに理想的な観客を前提として語られると思うんですよ。理想的な環境で、しゃべらずにじつと見るみたいな、なにかそういうフィクションとしての理想的な鑑賞体験というものを学校では教え込まれると思うのですが、実際の鑑賞の経験つて、ノイズと言つてもいいかもしれませんが、いろんなノイズや関数によっていくらでも変わつてくると思うんですよ。目[mé]の場合、それを極端なカタチでやってはいるんですが、そもそも展覧会や作品というのは実はすごく複雑なものであつて、その場に「足を運んだ」から「見た」んだ、とはとても言えない。逆に、そこに足を運んではいけないけれど自分はそれを見たかもしれない、といったことも言えてしまう。ここで、以前南川さんに伺つた面白い話を連想したりもするんですが、その話などはいま私が言つた二つめの話と関わってくるかもしれません。

ました。間近の池の記憶って、生々しい水だったりすると思うんですけど、一歩でも景色のままの池や湖に近づけるようなものをつくりたいと思っていました。

この作品が、時間を掛けてつくったにもかかわらず、雨が降ったらどうしようってことをあんまり考えてなかったんですよ。トリエンナーレをプロデュースされた、P3 art and environment の方々が、アーティストをすごく大事にしてくれるアートマネジメント組織で、雨だったら封鎖でしよって言ってくれたりしてたんですよ。で、最初に雨が降ったときに荒神が見に行って、意外や意外に結構綺麗だったんですよ。この作品で下手に見せたくないの、表面じゃないですか。ゴミのついたりしたら、もう神経質になって、常に掃除を入れるくらい、一番見せたくないな。いかに、人工的な表面を自然に存在させるかみたいな。増井が「つくってないを目指す」。どうやって「つくってない」状態をつくれるのか、みたいなことも言っていて。大事なことは表面なんですね。それで、雨は表面が人工的であるってことを一発でわからせるから、当然見せたくないと思っていたんですが、その景色が綺麗だったんですよ。で、荒神が真っ先にこれは見せたいって言い始めて。皆で大慌てして、お前言うてるのが全く違うって。(会場笑)

このとき僕も結構考えさせられて、導線っていうのを鑑賞者の主体性をつくっていくって考えてたんですよ。だから最初にこの入口があって、次にこう曲がるでしょ、そしたらこういう光が入ってきて、って考えてたんですよ。でもそれにはかなり無理があって。鑑賞者って当然自由じゃないですか、やっぱりちょっとトイレ行こうとかなるし。で、作家が明らかに見せたくないなみたいなことまで目に入ってくることもあると思うんですよ。こんなにいろんなことをつくり込んだのに、雨で表面に水が張ってしまっている状態って、作家が意図したことなのかわかんなくなっていく。その対峙感というか。導線は、鑑賞者の主体性から考えたものなんですが、今までつくれなかった導線の感覚がありました。計算ではつくれないというか。鑑賞者に判断を投げってしまうっていう。これは雨降ったら見るもんじゃないよって人もいるだろうし、いやこれは逆に綺麗なんじゃないかって人もいる。そういう今まで出せてなかったことを出せることに気がついてきて、それは今回の《非常にはっきりとわからない》につながっています。導線のルートをこちらが予測してそこにはめることではなくて、他者の見る目っていうのが、常に動いている運動として存在して、空間をみている状態をつくることに、この出来事が大きく影響しています。という感じで、いったん、目[mé]の自己紹介でした。

星野 ありがとうございます。そもそも今日のトークのタイトルが「導線の行方」ですよ。最初このタイトルをご提案いただいて、ちょっと変わったタイトルだなと思ったんですね。というのは、「導線」という言葉は美術に関わっている人のなかでもキュレーターの方や、実際に会場づくりをする方との会話のなかで話題にすることはあるんですが、アーティストの方が「導線」を問題にするときにどういう話になるのかな、と思っていました。その一端がいま少し見えたという気がしています。

それから、過去の作品を3つほど紹介していただいて思ったのですが、目[mé]

とと、見てて良いのかっていう拮抗みたいなものを残したくて、縁側はこういう丸見えの空間にしています。色んな感情も含めながら、ただ街が戻っていくような、今の被災地の現状っていうのを、鑑賞者の目に記録していつてもらうような作品です。スーパー堤防っていう石巻のほとんどの海が、9mだったっけか、高い堤防が建って、街から海が見られなくなっているとか、色んな問題が起きているところも通っていきます。動画が一瞬だけ……。こういう感じで、家の基礎だけが残っている場所なんかをずっと通っていきます。誤解を恐れず言うと、流された家の視点のような、淡々とした視点から場所を見せていく作品です。

最後にもう1点。さいたまトリエンナーレ¹⁰で2016年に発表した作品で、こういう植え込みみたいなのところに作品の入口があります(図7)。この左半分の木は目[mé]がつくったというか、植えたものですね。右側は元々生えていたものです。ここにトンネルみたいなものをつくって、ここから入っていく作品です。中に入っていくと、こういうふうになっています(図8)。この時も、説明をあえてしていなくて、ここでUターンして帰る人もいました。この前新聞記者さんに会ったら、「え、俺ここで帰ったけど、これなに？ 作品？」みたいなことを言っていましたね。これは実は、継ぎ目のない鏡面でできていて、上を歩くことができます。一緒にやっている仲間でインストーラーを名乗っている増井宏文がいるんですけど、増井と制作スタッフが1年半くらい研究を重ねて、素材を調べて、開発して、本当に奇跡的にできました。この世界に継ぎ目のない鏡はならしく、色んな業者に関わってもらったんですけど、特許を取った方が良いとか言われました。建築物でも、継ぎ目のない鏡ってないだろうって。これはね、大儲けできるとかって言われて。でも放ったらかしにしています。これについて何かありますか？



図7



図8

荒神 これは最初、全然まだ原点の話なんですけど、山を遠くから見ているんですよ。山の表面ってこぼこぼこしてて、すごく面白いじゃないですか。山の表面を触りたいと思って、近づきたいと思うんだけど、実際に近寄っていくと、山は森になって、そして林になって、木になって、結局触れたり近づけたりするのって1本の木の葉っぱとか、そういうものじゃないですか。だから結局、自分が見て触りたい、近づきたいと思った遠くの山には近づけないっていう話をしてたんですよ。それが何ともストレスなんだっていう話をしていて、風景には近づけないっていうことをずっと言ってたんですけど。

南川 近づけないはずの景色に、どうやって景色のまま近づけるのかっていうのが面白いなあと。最初この湖とか池っていうアイデアではなくて、素材をベースに考えていて。あっこれだとなんかできるかもしれないって、このかたちになり

10 「さいたまトリエンナーレ2016」(2016年9月24日～12月11日、埼玉県さいたま市)

上に白い砂浜がうすーく全体的にかかかって真っ白の街になっているようで、それがすごい不思議と綺麗って思ってしまった。で、その街を歩いていたんですよ。そのなかの一部の写真を撮ったんですけど、トイレの和式の便器とか、タイルの上に砂がパサって乗っている様子なんですけど、それを見たときに、地層って変わり目がハッキリあるじゃないですか。その地層と地層の間に自分はもしかしたら立っていて、その間を見ているんじゃないかっていうことを思ったときに、本当の、本来の景色っていうのは何なんだろうっていうふうに思わされて。こうやって自然は街を海にしていって、しばらくするとそこにショベルカーがやってきて、人間はそれを街にまた戻そうとするじゃないですか。それでずっとまた月日が経ったらもしかしたらそこはまた海になるかもしれないっていうことを連想して。その本来っていうものをすごく考えたんです。そのとき同時に、すごいモヤモヤしながらその街を見てたんですけど、そこにいるっていう、自分が立つっていうことを許されているようにも感じたんですよ。そこを見て良いというか、そこにいて良いってことを許されているって感じがしたっていうことを話していたんですけど。



図4



図5



図6

南川 それをいつか作品にしたいと思っていて、6年経って、石巻でリボーンアートフェスティバル⁹という芸術祭⁹があって、声をかけて頂いたときに、もう1回被災地を見に行くことができました。そこで、その荒神がさつき言っていたような光景をまさに目にしたわけなんですけど、まるで何事もなかったように、同じ場所に同じ道路がつくられている場所もあって。極端な所では、セブンイレブンが流されたところに全く同じセブンイレブンがつくられていて、あのオレンジ色のタイル1枚1枚も同じ場所で元に戻ってきている。そういうなにか、感情みたいなものももちろんありながらも、人間が街を戻していくっていう行為が、本当にそれぞれ地球の運動のひとつとしてやっているぐらい、突き放されて見えたんですよ。運動のように、流されたものをただ戻していくように見えた。それをどうにか形にできないかと思ってつくった作品です。

まず作品の入口ですが、こういう昔からあったかのような小屋をつくっています(図4)。これは地元の人なんかが見ればもう一発でわかるんですけど、石巻の中心街では、新しい建物しかないんです。地元の人はずいぶんこういうのが無いよねってすぐわかる家、元々あったようにしか見えないんですけど、あるはずのないものみたいなものを入口にしています。この中にお客さんが入っていくと、納屋みたいなところに出ます(図5)。勝手口みたいなところにつながって、その中は、家の縁側のようなところにつながっていくと。で、ここにしばらくいると、この縁側が揺れ出して動き出すんですよ。こういう手入れの届いていない庭みたいなところに縁側があるんですけど、それが外に動き出します。で、道路に移動する縁側(トラック車両を改装したもの)から、今の被災地の光景をただずっと見るという作品です(図6)。この縁側は、地元の人からの視線に、けっこうさらされます。ガラス越しに。見るこ

9 「Reborn-Art Festival 2017」(2017年7月21日～9月10日、宮城県石巻市)

た。気づきっていうのをつくるためには、見逃してっていうのは不可欠で、見逃してくれる人がいるから、本当に気づく人がいます。気づきだけだと、気づきすらなくなるというか。気づくことってもう導線のなかに入ってしまったって、見逃してっていうのを大事にしようと考えました。

もうひとつ、暗い角みたいなのがありまして、これもここに角があるなって気になった人が入って奥に行くと、廊下の端っこが開口部というか、開いていて、真っ暗になっています。ここを人によって異なるんですが5分から10分くらい見ていると、ぼやっと丸い光が見えてくるんです。これも開口部だけ見て、あ、なんか穴開いているだけかなって帰る人もいれば、ずっと凝視して、この空間に多分30分ぐらいい目が慣れてくると、ぱっと見えたって人もいますけど。そういう、なんて言うんですかね、自分がこう見たいと思った時間の長さに関わって見えてくるようなものです。これが一応ひとつのメインの作品として考えていまして、「不可解な光」って名付けていて、実はモーターで超高速回転している光の粒なんですけど、目をこぼちぼちってやっても、これがなんの素材でできているかわからない。10分、20分ずっと見て、見えてきた人でも、結局それが何でできてるかとか、何なのかっていうのはわからないようにするために高速回転させています。荒神が、空に落ちるときに友達を見ていたってということから、段々つくっていったんですけど、結局この世界っていうのは、不確かでしかなくて、それを確かめようとするだけが唯一確かであるってというようなことを、そのまま作品にしたようなものです。だから導線のなかで観客がなにかこう、確かめようとしなければ作品は見えてこないし、確かめようとしなければそれで良いと思う。そういう状況を作品にしたものです。鑑賞者がどう行動する可能性があるのかみたいなのを結構時間をかけて考えて、ゴールがないようにどうやって空間をつくるかっていうのを色々考えてつくっています。

次の作品を紹介します。これは石巻の被災地でつくったものです(図2)。3.11の2011年の震災の直後に現地に行きまして、そこで僕らが京都でやっていた展覧会が震災で中止になってしまっていて、そのことを受け入れられずに悩んでいたんですけど、結局なんで震災が起きて、人が大変だっていうときに作品を発表してはいけないのか、みたいなことを考え込んでしまっていて。もうそれだったら直接現場に行って作品をつくろうって言って見に行っただけです。震災の直後に被災地に行って、色々考えた挙げ句キャンピングカーで行くことにして、ずっと見て回ったんです。そうすると、キャンピングカーでただ現場を見るだけってということへの罪悪感というか。それと、見たい自分の、見ても良いんじゃないかという気持ちとの葛藤がずっとあって、そのなかでこれは荒神が撮った写真(図3)ですね。そこで思ったことを。



図2

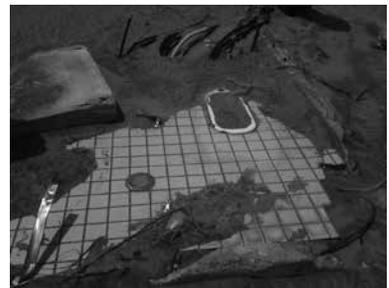


図3

荒神 結構、その葛藤しながら景色をずーっと見ていたところのある一角が、街全体が海にわーっと流されて、家の基礎だけが残っている場所があったんですよ。でその基礎にはトイレのタイルとか玄関のタイルとか沢山こう残っていて、その

言っています。例えばピカソの絵を見ているときに、自分の前にいっぱい人がいる。その人の後頭部がどれくらいピカソの絵に影響しちゃっているんだろうかという話です。例えば僕が体験したことがあるんですけど、お腹を下していたときに、フォーヴィズムの絵を見て、まあお腹が痛くてちょっとしか見られなかったんですけど、やたら体験・体感性が高かった。もっと言うと、結局そのピカソの絵は、額に入れて、その額がどれだけ豪華だったかとか、それが美術館というすごいところに置かれていることが、その絵の体験にとってどれくらい重要だったのか、みたいなことって実際どれくらい関わっているんだろう。更にこれをぐーっと引いていくとですね、今日雨だったこと、その日を鑑賞者が選んだことも関係してくるようになっていきます。それをもっともっと引いていくと、結局自分たちは地球上でなにかをつくっていて、結局さっきのコンセプトにもつながっていくとは思いますが。そういう一分の一の状態、自分と同じスケールの導線とか空間っていうものがあって、皆さんも今日多分、玄関を出られて美術館に来られてっていう、その導線のなかで作品を表わしていたい。導線の影響っていうのを作品としてアプローチしたいと思うようになって、色々と作品をつくっているわけです。

そのほとんど最初にやった作品が、この《たよりない現実、この世界の在りか》です。会場となった資生堂ギャラリーは、地下1階がギャラリーに、上が商業ビルになっています。普段はホワイトキューブで、エレベーターで降りてドアが開くと白い壁があって、作品が飾られてっていうところに、ホテルの宿泊階に出ちゃったのかなって感じになるような設えをしています。ここで僕らはお客さんがどういう反応をするかっていうのを合計で1週間ぐらい見ていたんですけど、当然帰る人もいます。「あつ」って言って引き返しちゃって。展覧会見にきたはずなのについていうのがどうなるのかと思ったんですけど、次の角ぐらいまで追いかけていったりしても、そのまま帰ってしまう人も結構いました。あとこれは知り合いだったんですけど、このホテルの廊下に小さいドローイングを飾ってたんです。これが目[mé]の個展というか、目[mé]の作品なんだって思って、「見たよドローイング」みたいな人がいましたね。(会場笑)

資生堂ギャラリーはもうひとつ階段の入口があって、そこにこういう元から非常口だったような扉を設置して、このなかのビルの裏側みたいなのところに入っていくと、さっきのエレベーターホールにつながっていくと。このままお客さんはおそろおそろ中に入っていくと。まあ当然作品だろうって思って入っていく人も勿論いたと思うんですけど。するとひとつだけ扉が開いている部屋がありまして、なんだかさっきまで人がいたような形跡があって、よくあるようなところに鏡が置いてあるような光景になっています。ここの鏡をよく見てみると、鏡の向こう側の空間を全部反転させて、つくっていると。実は制作的には大変だったんですけど、例えば電球にパナソニックって書いている小さい文字なんか全部反転させて、もうやれるところは全部やりきっていると。こういう時計も、逆に回転するようになり。ティーバッグなんか全部反転させて鏡写しにしています。で、ここの鏡で鑑賞者がどうなるのかというのを1週間のなかで見えていたんですけど、大体半分くらいの人がなんとも思わずにスルーして行って、半分くらいの人がそこに気づいて中に入っていきました。

いう流れでいきましようか。

南川 はい。「導線の行方」というテーマもあって、導線について考えていること、それに主にふれたような作品を紹介します。これが2014年に、資生堂ギャラリーで発表した作品《たよりない現実、この世界の在りか》(図1)です⁸。で、この根源というか。



図1

荒神 幼稚園のときに、屋上で仰向けになる体操があったんですけど。仰向けになって空をぼーっと見ているときに、なんでこんなに上の方に空間が広がっているのに、自分の身体はそこに落ちないんだらうということが、すごく不安になってきて。で、友達の背中が地面にくっついているのを確認しないと、その体操ができないっていう状態に陥って。幼稚園のときはその、屋上で仰向けになるってことが怖くてできなかったんですよ。だけど、よく考えたら、何故落ちないかっていうのを、大人に聞いても誰も保証してくれるわけじゃないじゃないですか。もしかしたら、本当にいつか投げ出されるかもしれないっていうことを考えると、無性にものすごく怖くなって。そういう体験があったっていうことを、話していたんですけど。

南川 とりあえず「はあ？」っていう感じですよ。だから重力があるから落ちないじゃん？ っていうところから始まるんですけど。でも重力、万有引力っていうものをネットとかで調べると、確かに「地球よりも遥かに膨大で広大な外」、というものがあって、そっちに引っ張られないのはなんでだろうとか。単純なことのように実はあんまりわかんないなって俺も思いはじめて。で、その空に落ちそうっていう感覚は荒神曰く勘違いではなく、今も微かに残っていて、それをコロコロ椅子(キヤスター付きの椅子)の上に仰向けになって広い場所で転がってみればわかるって言われて。それで3、4回駐車場に連れて行かれてコロコロ椅子で転がされたんですけど、それはただ恥ずかしいだけでした。でもまあ、考えてみても、確かに外には落ちないってのはつきりとは言えなくて。でも今日も落ちてないし、昨日も落ちなかったよなあとも思ったんですが。でもそれは、今まで2019回公転軌道を回っていたというカウントがあるだけで、その次がどうなるっていうのは、実際のところ絶対にわかんないんだと。何だか僕も段々怖くなっていった。まあ、そこからあーだこーだ考えているうちに、作品になっていきました。作品にする上では、平行して導線っていうものを考えています。作品の空間にある状態、技術とか制作を含めた目標というか、目的として導線を作品にしていくということを考えています。

今回の《非常にはつきりとわからない》も、その延長線上にあるのではないかと。導線の方はわりと制作寄りの考えで、自分たちは「絵画の後頭部問題」とか

8 「たよりない現実、この世界の在りか」(2014年7月18日～8月22日、資生堂ギャラリー)

人間なしの世界みたいなことを書かれていました⁶。「人間なしの」っていう言葉を使われていたことに、僕はもう一言で射抜かれたような気がして、そこから一方的に会いたくなってしまったんですね。

ちょうどそのときに、アートコーディネーターの山口祥平さん、あの川俣正さんというアーティストさんの、日本のプロジェクトをいくつも手掛けている人なのですが、その人からよく目[mé]にとって重要なタイミングで電話がかかかってきて、「この人に会った方が良いよ」みたいなことを言ってくれるんですよ。根拠はわからないんですけど。それで電話がかかかってきて、「星野太さんと会った方が良いよ」って言われて。「えっ、なんでですか」みたいなことを聞いたまま、理由もわからないままだったんですけど。ちょうどそのときに『美術手帖』の記事を見たのと、十和田市現代美術館から地域アートのことをベースにしたトーク⁷に呼んでいただいたときに、星野さんがゲストで来られていて、ああやつと会えるってなりました。そこでさらに自分たちの思いが高まってきて。今度展覧会をするので、寄稿していただけますか？というふうにお願ひして、段々それがエスカレートして、何回千葉市美に来たら良いんだらうっていう状態になって。まあそういう次第で今日、星野さんをゲストにトークをさせていただけるというところで。

星野 ご紹介ありがとうございました。星野です。よろしくお願ひします。

南川・荒神 お願ひします。

星野 いま、なぜこれだけお仕事をいただけるのかという理由をはじめて伺って、そういう理由だったんだなということがわかって面白かったです。昨年、十和田市現代美術館のトークで一緒する機会があり、駅からのタクシーの中でちょっと話をしたのが初めてだったと思います。だから、お二人とお目にかかってからまだ1年くらいですね。そのあと今回の展覧会の話をお伺って、最初はカタログへの寄稿、それからこのトーク、『美術手帖』のインタビューと続いて、ここ半年くらい、お二人の話を聞く機会が何度もありました。僕自身、目[mé]の作品について、カタログの原稿を書いているときに色々考えることが出てきて、それを受けて今日こういった場で話をさせていただけることを楽しみにしてきました。

おそらく今日いらっしゃる方のなかには目[mé]の作品を見たことがない方も多いと思うので、これまでどういう作品をつくってこれたのかを紹介してからの方が良いんじゃないか、とききほど打ち合わせ中に話していました。そこで、南川さんと荒神さんから、過去のプロジェクトのうち、今回の展覧会に比較的關係するもの、あとは代表作と言える作品をご紹介いただいて、そこから話をしていくと

6 大森俊克×沢山遼×新藤淳×星野太「SPECIAL TALK コンテンポラリー・アートとは何か」『美術手帖』2017年12月号(vol.69, no.1062)、美術出版社、92～99頁。

7 十和田市現代美術館2019年度展覧会関連イベント〈「地域アート」はどこにある？〉プロジェクトクロストーク2日目(2018年11月4日開催)。

——本日は目[mé]¹のメンバーであるアーティストの荒神明香さん、ディレクターの南川憲二さん、そして星野太さんにお越しいただいております。目[mé]のお二人は皆さんご存知のとおり、今回の出品作家です。星野太さんを簡単にご紹介させていただきますと、美学者として御著書『崇高の修辭学』²の他、『ラッセンとは何だったのか?——消費とアートを越えた「先」』³や『コンテンポラリー・アート・セオリー』⁴などに数多くご寄稿また翻訳をされています。また今回の展覧会の図録にもご寄稿いただきました。現在は金沢美術工芸大学の専任講師でもいらっしやいます。本日はこのお三方に「導線の行方」というテーマでお話しさせていただきます。それでは皆さんどうぞよろしくお願ひいたします。

南川・荒神・星野 よろしくお願ひします。

南川 最初に、星野さんへは目[mé]からお願ひをして、展覧会カタログへの寄稿と、『美術手帖』の2月号にも展覧会について取り上げていただきました⁵。今日のトークにも来ていただいて、客観的に見たらどんだけ仲が良いんだみたいに見えるかもしれませんが、実は目[mé]から一方的にお願ひして来ていただいている次第です。

その理由というか、最初に目[mé]のコンセプトみたいなところについてお話しします。荒神と話していたときに、「なんか死んだ?」みたいな感じになることが、作品ができた瞬間だということを昔言っていて、それが何なんだろうと僕の方で考えていました。荒神に色々聞いたところ、自分たちの肉体も、この世界を構成する物質でできているじゃないですか。要は、ある科学によると二十何種類に分けられる同じ物質で、ビルや空と同じ物質で自分たちもできている。ということはつまり、この世界の果てと自分自身の肉体もある意味つながっているはずだと。それを人間という主観がありながら、どうやって死ぬまでに感じる事ができるのか。死んだ瞬間なのか。主体がなくなって、一気に客体になったときに、それは感じられるのか。でも死んだら、神経もなくなるから無理かなとか。なんかかんとか考えていたときに、ある知り合いからですね、そういうことを「思弁的实在論」というんじゃないかと聞いた記憶がありまして、で、『美術手帖』の何年号だったか忘れちゃったんですけど、そこに星野さんの文章で、思弁的实在論について、

1 目[mé]とは、アーティスト 荒神明香、ディレクター 南川憲二、インストーラー 増井宏文を中心とする現代アートチーム。個々の技術や適性を活かすチーム・クリエイションのもと、特定の手法やジャンルにこだわらず展示空間や観客を含めた状況／導線を重視し、果てしなく不確かな現実世界を私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開している。

2 星野太『崇高の修辭学』月曜社、2017年。

3 原田裕規 編著／斎藤環、北澤憲昭、大野左紀子、千葉雅也、大山エンリコイサム、上田和彦、星野太、中ザワヒデキ、暮沢剛巳、土屋誠一、河原啓子、加島卓、櫻井拓、石岡良治 著『ラッセンとは何だったのか?——消費とアートを越えた「先」』フィルムアート社、2013年。

4 筒井宏樹 編／石田圭子、エレナ・フィリボヴィッチ、奥村雄樹、河田亜也子、沢山遼、星野太 著『コンテンポラリー・アート・セオリー』イオスアートブックス、2013年。

5 星野太＝聞き手「ARTIST INTERVIEW 目[mé]」『美術手帖』2020年2月号(vol.72, no.1080)、美術出版社、192～207頁。

目 [mé] × 星野太 クロストーク「導線の行方」

荒神明香(現代アートチーム目 [mé])

南川憲二(現代アートチーム目 [mé])

星野 太(美学／金沢美術工芸大学講師)